

164
742

法 規

實例民事訴訟法

辯護士肥田健吉君閱
相原稻造君編纂

附 民事訴訟ニ關スル諸文例
○行政裁判法
○執行
○其他數件
規 則
○家資分散法
○訴訟費用法
○訴訟規則
○其他數件
規 則
○婚姻養子縁組ニ關スル訴訟規則
○其他數件

行發堂櫻金

036775-000-7

CZ-785-017

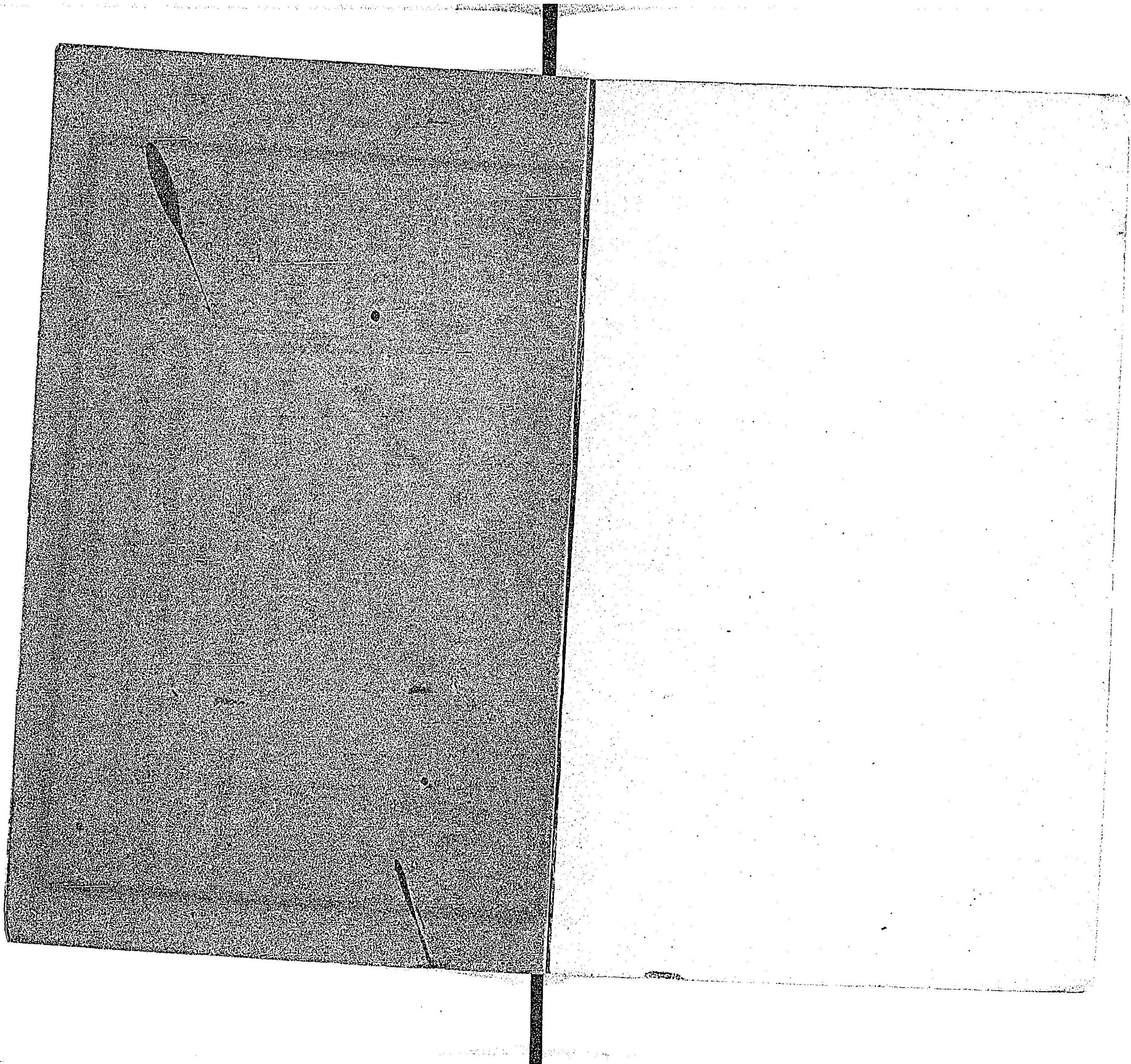
實例民事訴訟法 (龍頭法規)

相原 稻造 / 編

M27

BBS-0209





C2
985
019

持15
2/6

民事訴訟用印紙法

(明治廿四年
一月一日實施)

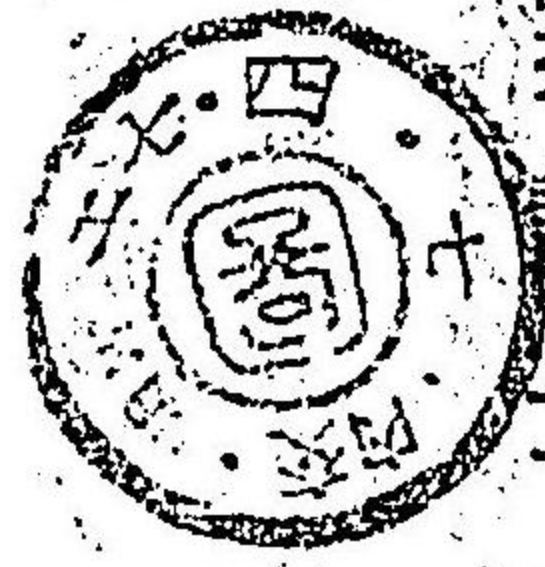
第一條 民事訴訟ノ
書類ニハ以下數條
ノ規定ニ從テ其正
本ニ印紙ヲ貼用ス
可シ但裁判所書記
ニ口述ヲテ調書ヲ
作ラシメタルトキ
ハ其調書ニ印紙ヲ
貼用ス可シ

第三條 財産權上ノ
請求モ係ル第一審
ノ訴訟ニハ訴訟物
ノ價額ニ應シ左ノ
區別ニ從テ印紙ヲ
貼用ス可シ

法規 實例民事訴訟法

辯護士 肥田健吉先生閱

相原稻造編述



第一編 總則
第一章 裁判所

第一節 裁判所ノ事物ノ管轄

第一條 裁判所ノ事物ノ管轄ハ裁判所構成法ノ規定ニ從フ

第二條 訴訟物ノ價額ニ依リ管轄ノ定マルトキハ以下數條ノ規定ニ從フ

第三條 訴訟物ノ價額ハ起訴ノ日附ニ於ケル價額ニ依リ之ヲ「算定
ス」果實、損害賠償及ヒ訴訟費用ハ法律上相牽連スル主タル請求ニ
附帶シ「」ノ訴ヲ以テ請求スルトキハ之ヲ算入セス

第一節 裁判所ノ事物ノ管轄

訴訟物ノ價額ニ
 額金五圓迄 二十錢
 同十圓迄 三十錢
 同二十圓迄 六十錢
 同五十圓迄 一圓五十錢
 同七十五圓迄 二圓廿錢
 同百圓迄 三圓
 同二百五十圓迄 六圓五十錢
 同五百圓迄 十圓
 同七百五十圓迄 十三圓
 同千圓迄 十五圓
 同二千五百圓迄 二十圓
 同五千圓迄 廿五圓
 同五千圓以上ハ千圓ニ達スル毎ニ二

第四條 一ノ訴ヲ以テ數箇ノ請求ヲ爲ストキハ前條第二項ニ掲グルモノヲ除ク外其額ヲ合算スルモ本訴ト反訴トノ訴訟物ノ價額ハ之ヲ合算セス

第五條 訴訟物ノ價額ハ左ノ方法ニ依リ之ヲ定ム

第一 債權ノ擔保又ハ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權カ訴訟物ナルトキハ其債權ノ額ニ依ル但物權ノ目的物ノ價額寡キトキハ其額ニ依ル

第二 地役カ訴訟物ナルトキハ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價額ニ依ル但地役ノ爲メ承役地ノ價額ノ減シタル額カ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價額ヨリ多キトキハ其減額ニ依ル

第三 賃貸借又ハ永賃借ノ契約ノ有無又ハ其時期カ訴訟物ナルトキハ爭アル時期ニ當ル借賃ノ額ニ依ル但一个年借賃ノ二十倍ノ額カ右ノ額ヨリ寡キトキハ其二十倍ノ額ニ依ル

圓ヲ加フ
 訴訟物ノ價額ヲ算定スルニハ民事訴訟法第三條乃至第六條ノ規定ニ從カフ

第三條 財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ニ付テハ其訴訟物ノ價額百圓ト看做シ印紙ヲ貼用ス可シ

財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ト其訴訟ニ由テ生スル財産權上ノ訴訟ト併合スルトキハ其多

第四 定時ノ供給又ハ收益ニ付テノ權利カ訴訟物ナルトキハ一个年收入ノ二十倍ノ額ニ依ル但收入權ノ期限定マリタルモノニ付テハ其將來ノ收入ノ總額カ二十倍ノ額ヨリ寡キトキハ其額ニ依ル

第六條 訴訟物ノ價額ハ必要ナル場合ニ於テハ第三條乃至第五條ノ規定ニ從ヒ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ定ム

裁判所ハ申立ニ因リ證據調ヲ命シ又ハ職權ヲ以テ檢證若クハ鑑定ヲ命スルコトヲ得

第七條 地方裁判所ノ判決ニ對シテハ其事件カ區裁判所ノ事物ノ管轄ニ屬ス可キ理由ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第八條 事物ノ管轄ニ付キ區裁判所又ハ地方裁判所カ管轄違ナリト宣言シ其裁判確定シタルトキハ此裁判ハ後ニ其事件ノ緊屬ス可キ裁判所ヲ濫束ス

額ナル一方ノ訴訟物ノ價額ニ依リ印紙ヲ貼用ス可シ

第四條 本訴ト反訴ト其目的が同一ノ訴訟物ナルトキハ反訴ノ訴狀ニ印紙ヲ貼用スルヲ要セス

第五條 控訴狀ニハ第二條ノ規定ニ從ヒ其半額上告狀ニハ其全額ノ印紙ヲ加貼ス可シ

第六條 左ニ掲グル書類ニハ五十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第九條

地方裁判所カ事物ノ管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スルトキハ原告ノ申立ニ因リ同時ニ判決ヲ以テ原告ノ指定シタル自己ノ管轄内ノ區裁判所ニ其訴訟ヲ移送ス可シ
區裁判所カ事物ノ管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スルトキハ同時ニ判決ヲ以テ其訴訟ヲ所屬ノ地方裁判所ニ移送ス可シ
移送ノ申立ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結前ニ之ヲ爲ス可シ
移送言渡ノ判決確定シタルトキハ其訴訟ハ移送ヲ受ケタル裁判所ニ繫屬スルモノト看做ス

第二節 裁判所ノ土地ノ管轄(裁判籍)

第十條 人ノ普通裁判籍ハ其住所ニ依リテ定マル

普通裁判籍アル地ノ裁判所ハ其人ニ對スル總テノ訴ニ付キ管轄ヲ有ス但訴ニ付キ專屬裁判籍ヲ定メサル場合ニ限ル

第十一條 軍人、軍屬ハ裁判籍ニ付テハ兵營地若クハ軍艦定繫所ヲ

第一 抗告

第二 故障

第三 証據調ノ申立

第四 仮差押及ヒ仮處分ノ申請

第五 判決ノ送達

第六 執行力アル正本ヲ求ムル申立但此正本ノ數通ヲ求ムルトキハ其一通毎ニ五十錢

以テ住所トス但此規定ハ豫備、後備ノ軍籍ニ在ル者及ヒ兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル軍人、軍屬ニ之ヲ適用セス

第十二條 外國ニ在ル本邦ノ公使及ヒ公使館ノ官吏並ニ其家族、從者ノ裁判籍上ノ住所ハ本邦ニ於テ本人ノ最後ニ有セシ住所ナリトス此住所ナキモノニ付テハ司法大臣ノ命令ヲ以テ豫メ定ムル東京内ノ區ヲ以テ其住所ナリトス

第十三條 內國ニ住所ヲ有セサル者ノ普通裁判籍ハ本人ノ所在地ニ依リテ定マル若シ其現在地ノ知レサルカ又ハ外國ニ在ルトキハ其最後ニ有セシ內國ノ住所ニ依リテ定マル

然レトモ外國ニ住所ヲ有スル者ニ對シテハ內國ニ於テ生シタル權利關係ニ限リ前項ノ裁判籍ニ於テ訴ヲ起スコトヲ得

第十四條 國ノ普通裁判籍ハ訴訟ニ付キ國ヲ代表スル官廳ノ所在地ニ依リテ定マル但訴訟ニ付キ國ヲ代表スルニ付テノ規定ハ勅令ヲ

ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用スベシ

第七條 和解及ヒ督促手續ニ付キ民事訴訟法第三百八十一條第三項及ヒ第三百九十條ノ規定ニ依リ訴カ區裁判所ニ繫屬スルトキハ第二條第三條ノ規定ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス可シ

第八條 再審ヲ求ムルノ訴狀ニハ其訴ヲ爲ス可キ裁判所ノ審級ニ依リ相當

第九條 原狀回復ノ申立ニハ其書面ヲ差出ス可キ裁判所ノ審級ニ依リ相當ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第十條 答辨書其他前數條ニ掲ケサル申立及ヒ申請ニハ二十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第十一條 民事訴訟法第九十七條第一號ノ場合ノ外此法律ニ從ヒ印紙ヲ貼

以テ之ヲ定ム

公又ハ私ノ法人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘラルルコトヲ得ル會社其他ノ社團又ハ財團等ノ普通裁判籍ハ其所在地ニ依リテ定マル此所在地ハ別段ノ定ナキトキハ事務所所在ノ地トス若シ事務所ナキトキ又ハ數所ニ於テ事務ヲ取扱フトキハ其首長又ハ事務擔當者ノ住所ヲ以テ事務所ト看做ス

第十五條 生徒、雇人、營業使用人、職工、習業者其他性質上一定ノ地ニ永ク寓在ス可キ者ニ對スル財產權上ノ請求ニ付テノ訴ハ其現在地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得ルハ其現在地ノ兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル軍人、軍屬ニ對シテハ其兵營地若シハ軍艦定繫所ノ裁判所ニ前項ノ訴ヲ起スコトヲ得

第十六條 製造、商業其他ノ營業ニ付キ直接ニ取引ヲ爲ス店舗ヲ有スル者ニ對シテハ其店舗所在地ノ裁判所ニ營業上ニ關スル訴ヲ起

スコトヲ得

前項ノ裁判籍ハ住所及ヒ農業用建物アル地所ヲ利用スル所有者、用益者又ハ賃借人ニ對スル訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス但此訴カ地所ノ利用ニ付テノ權利關係ヲ有スルトキニ限ル

第十七條 内國ニ住所ヲ有セサル債務者ニ對スル財產權上ノ請求ニ付テノ訴ハ其財產又ハ訴ヲ爲シテ請求スル物ノ所在地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得債權ニ付テハ債務者(第三債務者)ノ住所ヲ以テ其財產ノ所在地トス又債權ニ付キ物カ擔保ノ責ヲ負フトキハ其物ノ所在地ヲ以テ財產ノ所在地トス

第十八條 契約ノ成立若クハ不成立ノ確定又ハ其履行若クハ廢除、廢罷、解除又ハ其不履行若クハ不十分ノ履行ニ關スル賠償ノ訴ハ其訴訟ニ係ル義務ヲ履行ス可キ地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第十九條 會社其他ノ社團ヨリ社員ニ對シ又ハ社員ヨリ社員ニ對シ

用セザル民事訴訟ノ書類ニハ其効ナキモノトス但印紙ヲ貼用セス又ハ貼用スルモ不足アルトキハ裁判所ハ相當印紙ヲ貼用セシメ之ヲ有効ナラシムルヲ得

第十二條 印紙ノ種類及貼用方ハ明治十七年第四號布達ニ依ル

第十三條 印紙ハ管轄屬ノ許可ヲ得タル賣捌所ニ於テ發賣セシム其他ニ於

其社員タル資格ニ基ク請求ノ訴ハ其會社其他ノ社團ノ普通裁判籍アル地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十條 不正ノ損害ノ訴ハ責任者ニ對シ其行為ノ有リタル地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十一條 辯護士又ハ執達吏ノ手数料及ヒ立替金ニ付キ其委任者ニ對スル訴ハ訴訟物ノ價額ノ多寡ニ拘ハラス本訴訟ノ第一審裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十二條 不動産ニ付テハ其所在地ノ裁判所ハ總テ不動産上ノ訴殊ニ本權並ニ占有ノ訴及ヒ分割並ニ經界ノ訴ヲ專ラニ管轄ス地役ニ付テノ訴ハ承役地所在地ノ裁判所專ラニ之ヲ管轄ス

第二十三條 不動産上ノ裁判籍ニ於テハ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權ニ基ク不動産上ノ訴ニ附帶シテ同一被告ニ對スル債權ノ訴ヲ起スコトヲ得

テ賣買スルコトヲ許サス

第十四條 官許賣捌所外ニ於テ印紙ヲ販賣シタルモノハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス其情ヲ知テ買取シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス第十五條 前條ノ規定ヲ犯シタル者ハ刑法ノ減輕、再犯加重及ビ數罪俱發

不動産上ノ裁判籍ニ於テハ不動産ノ所有者若シハ占有者ニ對スル人權ノ訴又ハ不動産ニ加ヘタル損害ノ訴ヲ起スコトヲ得

第二十四條 相續權遺贈其他死亡ニ因リテ效果ヲ生スル處分ニ基ク請求ノ訴ハ遺產者死亡ノ時普通裁判籍ヲ有セシ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

相續裁判籍ニ於テハ遺產債權者ヨリ遺產者又ハ相續人ニ對スル請求ノ訴ヲ起スコトヲ得但遺產ノ全部又ハ一分カ其裁判所ノ管轄區内ニ存在スルトキニ限ル

第二十五條 第二十二條ノ規定ヲ除ク外原告ハ數箇ノ管轄裁判所ノ中ニ就キ選擇ヲ爲スコトヲ得

第三節 管轄裁判所ノ指定

第二十六條 管轄裁判所ノ指定ハ裁判所構成法ニ定メタル場合ノ外尙ホ不動産上ノ裁判籍ニ訴ヲ起ス可キ場合ニ於テ不動産數箇ノ

ノ例ヲ用非ス

第十六條 第六條第十條乃至第十二條ノ規定ハ非訴訟事件ニ之ヲ準用ス

勅令第六號（明治廿五年一月十一日）

明治廿四年勅令第三號中左ノ通改正

第一條 各省北海道

廳及府縣廳ハ其所

管又ハ監督スル事

務ニ係ル民事訴訟

ニ付キ國ヲ代表ス

第二條 各省大臣ハ

省令ヲ以テ所屬特

別地方機關中其用

裁判所ノ管轄區内ニ散在スルトキモ亦之ヲ爲ス

第二十七條 管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲ス場合及び其決定ヲ爲ス裁判所ハ裁判所構成法第十條ノ規定ニ從フ

第二十八條 管轄裁判所ノ指定ニ付テノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ

其申請ニ付キ管轄權ヲ有スル裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

右裁判所ハ口頭辯論ヲ經ズシテ其申請ヲ決定ス

管轄裁判所ヲ定メタル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

管轄裁判所ノ申請

申請人

何府何郡何町何村何地籍職業

何

某

被申請人

何府何郡何町何村何地籍職業

何

某

申請人何某ヨリ被申請人何某ニ係ル何々事件（或裁判所構成法第十

掌任務ニ係ル民事訴訟ニ付キ國ヲ代表スルモノヲ定ムルヲ得

第三條 前二條ノ場

合ニ於テ國ヲ代表

シ訴訟ヲナスニハ

各官廳ノ長官又ハ

長官ノ指定シタル

所屬官吏トス

大藏省令第二號（明

治廿五年二月四日）

造幣局及稅關ハ其

司掌事務ニ係ル民

事訴訟ニ付國ヲ代

表ス

農商務省令第一號廿

條ノ四ケノ場合若クハ不動産カ數ケノ裁判所管内ニ散在スルモノニ付キ何レノ裁判所ヲ以テ管轄裁判所ト定ムベキヤ判然不仕候間相當ノ管轄裁判所御指定被成下度申請仕候也

年月日 申請人

何

某印

何々裁判所長

判事 何 某殿

第四節 裁判所ノ管轄ニ付テノ合意

第二十九條 第一審裁判所ハ當然管轄權ヲ有セサルモ當事者ノ合意

ニ因リ管轄權ヲ有ス但書面ヲ以テ合意ヲ爲シ且其合意カ一定ノ權

利關係及ヒ其權利關係ヨリ生スル訴訟ニ係ルトキニ限ル

裁判管轄ニ付合意ノ申立

申立人

何府何郡何町何村何地籍職業

何

某

五年二月二日

大林區署ハ官林ニ
關スル事件ニシテ
其司掌事務ニ係ル
民事訴訟ニ付國ヲ
代表ス

右申立人何某ヨリ被申立人何某ニ對シ何々事件ニ付當地方裁判ノ
當然ノ管轄ニハ無之候得共當事者双方合意ヲ以テ當地方裁判所ノ
判決ヲ受度此段及申立候也

海軍省令第一號(明
治廿五年三月八日)

各鎮守府造船部兵
器部工計部建築部
及新原探炭所ハ其
司掌事務ニ係ル民
事訴訟ニ付國ヲ代
表ス

年月日	申立人	右
	何	某印
	被申立人	何
	何々地方裁判所長	某印
	判事	何 某印

陸軍省令第二號(廿
五年三月十六日)

明治廿五年一月勅

第三十條 被告カ管轄違ノ申立ヲ爲サスシテ本案ノ口頭辯論ヲ爲ス
トキハ亦前條ト同一ノ効力ヲ生ス

第三十一條 左ノ場合ニ於テハ第二十九條及ヒ第三十條ノ規定ヲ適

令第六號第一條ニ

據リ各師團監督部
屯田兵監督部ハ左
ノ區別ニ從ヒ總テ
民事訴訟ニ付キ國
ヲ代表ス

近衛軍隊并ニ近衛
師團司令部參謀本
部及其管轄ノ官衙

監軍部及其管轄ノ
管衙砲兵會議工兵
會議憲兵司令部蹄
鐵學舎經理學校中
央軍馬育成所ニ關
スル事項

近衛師團監督部
第一師管內軍隊及

用セス

第一 財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ニ係ルトキ

第二 專屬管轄ニ屬スル訴ナルトキ

第五節 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避

第三十二條 判事ハ左ノ場合ニ於テ法律ニ依リ其職務ノ執行ヨリ除
斥セラル可シ

第一 判事又ハ其婦カ原告若クハ被告タルトキ又ハ訴訟ニ係ル
請求ニ付キ當事者ノ一方若クハ雙方ト共同權利者、共同義務
者若クハ償還義務者タル關係ヲ有スルトキ

第二 判事又ハ其婦カ當事者ノ一方若クハ雙方又ハ其配偶者ト
親族ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦
同シ

第三 判事カ同一ノ事件ニ付キ證人若クハ鑑定人ト爲リテ訊問

陸軍各官衙(近衛監督部ニ揚クル軍隊及官衙并陸軍本省東宮武官中央司計部被服廠被服工長學舎千住製絨)ニ關スル事項

第一師團監督部

第二師管内軍隊及

陸軍各官衙ニ關スル事項

第二師團監督部

第三師管内軍隊及

陸軍各官衙ニ關スル事項

第三師團監督部

第四師管内軍隊及

陸軍各官衙ニ關スル事項

ヲ受クルトキ又ハ訴訟代理人タル任ヲ受クルトキ若シハ受ケタルトキ又ハ法律上代理人ト爲ル權利ヲ有スルトキ若クハ之ヲ有シタルトキ

第四 判事が不服ノ申立アル裁判ヲ前審又ハ仲裁ニ於テ爲スニ

當リ判事又ハ仲裁人トシテ干與シタルトキ但此場合ニ於テ判

事ハ受命判事又ハ受託判事トシテハ職務ノ執行ヨリ除斥セラ

ルコト無シ

第三十三條 判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラルトキ及

ヒ偏頗ノ恐アルトキハ總テノ場合ニ於テ各當事者ヨリ之ヲ忌避ス

ルコトヲ得

偏頗ノ忌避ハ判事ノ不公平ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フニ足ル可キ

事情アルトキ之ヲ爲スコトヲ得

第三十四條 判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラレ、場合ニ

ル事項

第四師團監督部

第五師管内軍隊及

陸軍各官衙ニ關スル事項

第五師團監督部

第六師管内軍隊及

陸軍各官衙ニ關スル事項

第六師團監督部

屯田兵隊及北海道

ニ在ル陸軍各官衙

ニ關スル事項

屯田兵監督部

農商務省令第八号

(廿五年四月五日)

鑛山監督署ハ其司

於ケル判事ノ忌避ハ其訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス之ヲ爲スコトヲ得

偏頗ノ恐アル場合ニ於テハ原告若クハ被告其覺知シタル忌避ノ原

因ヲ主張セスシテ判事ノ面前ニ於テ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立

ニ對シ陳述ヲ爲シタル後ハ判事ヲ忌避スルコトヲ得ス

第三十五條 忌避ノ申請ハ判事所屬ノ裁判所ニ書面又ハ口頭ヲ以テ

之ヲ爲スコトヲ得

忌避ノ原因ハ之ヲ證明スルコトヲ要ス忌避セラレタル判事ノ職務

上ノ陳述ハ其説明ノ用ニ充ツルコトヲ得

原告若クハ被告ガ判事ノ面前ニ於テ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立

ニ對シ陳述ヲ爲シタル後其判事ニ對シ偏頗ノ忌避ヲ爲ストキハ忌

避ノ原因其後ニ生シ又ハ之ヲ其後ニ覺知シタルコトヲ説明ス可シ

忌避申請

掌事務ニ依ル民事訴訟ニ付國ヲ代表ス
 内務省令第四号（廿五年四月十三日）
 鉄道廳土木監督署衛生試験所ハ各其司掌事務ニ依ル民事訴訟ニ付國ヲ代表ス
 司法省令第五号（廿五年四月廿七日）
 司法官廳ヨリ起スヘキ民事訴訟ニ於テハ明治廿五年勅令第六号第二條ニ依リ訴訟ヲ受クベ

申請人 何府何郡何町何番地族籍職業
 何縣何市何村 何 某
 被申請人 何府何郡何町何番地族籍職業
 何縣何市何村 何 某
 右當事者間何年（何号何々請求事件ノ掛官タル判事何某ハ（訴訟法第三十二條ノ四ヶ原因若クハ同第三十三條ノ偏頗ノ恐レアル申請人若クハ被申請人ノ（何々ニ付）民事訴訟法第三十二條第何項若クハ第三十三條ニ該當スル忌避ノ原因有之候者ト確信仕候間該判事ヲ職務ヨリ除斥相成度此段申請候也

年月日 右 何 某印
 何地方裁判所長 判事 何 某印

キ裁判所ノ檢事局ヲシテ國ヲ代表セシム

辯護士法

第一章 辯護士ノ資格及職務

第一條 辯護士ハ當事者ノ委任ヲ受ケ又ハ裁判所ノ命令ニ從ヒ通常裁判所ニ於テ法律ニ定メタル職務ヲ行フモノトス但シ特別法ニ因リ特別裁判所ニ於テ其職務ヲ行フコトヲ妨グズ

第二條 辯護士ラン

第三十六條 忌避セラレタル判事合議裁判所ニ屬スルトキハ其裁判所忌避ノ申請ヲ裁判ス但忌避セラレタル判事ハ其裁判ニ參與スルコトヲ得ス
 若シ其裁判所右判事ノ退去ニ因リ決定ヲ爲スコト能ハサルトキハ直近上級ノ裁判所其申請ヲ裁判ス
 區裁判所判事忌避セラレタルトキハ上級ノ地方裁判所其申請ヲ裁判ス若シ區裁判所判事カ忌避ノ申請ヲ正當ナリト爲ストキハ裁判ヲ要セス

第三十七條 忌避ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得忌避セラレタル判事ハ先ツ申請ノ理由ニ付キ職務上意見ヲ述ブ可シ

第三十八條 忌避ノ申請ヲ正當ナリト宣言スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス其申請ヲ不當ナリト宣言スル決定ニ對シテハ即

ト欲スル者ハ左ノ條件ヲ具フルコトヲ要ス

第一 日本臣民ニシテ民法上ノ能力ヲ有スル成年以上ノ男子ナルコト

第二 辯護士試験規則ニ依リ試験ニ及第シタルコト

第三條 辯護士試験ニ關スル規則ハ司法大臣之ヲ定ム

第四條 左ニ掲グル者ハ試験ヲ要セス

第一 刑事檢事タル者又ハ辯護士ニシテ其請求ニ因リ登録ヲ取消シタル者

第二 法律學ヲ修メタル法學博士、帝國大學法律科卒業生、舊東京大學法學部卒業生、司法省舊法學校正則部卒業生、及司法官試補タリシ者

時抗告ヲ爲スコトヲ得

第三十九條 忌避セラレタル判事ハ忌避申請ノ完結スルマテ總テノ行爲ヲ避ク可シ然レトモ偏頗ノ爲ニ忌避セラレタル判事ハ猶豫ス可カラサル行爲ヲ爲スコシ

第四十條 忌避申請ノ管轄裁判所ハ其申請アラサルモ忌避ノ原因タル事情ニ付キ判事ヨリ申出アルトキ又ハ他ノ事由ヨリシテ判事カ法律ニ依リ除斥セラレタル疑アルトキモ亦裁判ヲ爲ス

此裁判ハ豫メ當事者ヲ審訊セスシテ之ヲ爲ヌ又其裁判ハ之ヲ當事者ニ送達スルコトヲ要セス

第四十一條 本節ノ規定ハ裁判所書記ニモ之ヲ準用ス但其裁判ハ書記所屬ノ裁判所之ヲ爲ス

第六節 檢事ノ立會

第四十二條 檢事ハ左ノ訴訟ニ付キ意見ヲ述フル爲メ其口頭辯論ニ

立會ヲ可シ

第一 法人ニ關スル訴訟

第二 婚姻ニ關スル訴訟

第三 夫婦間ノ財産ニ關スル訴訟

第四 親子若クハ養親子ノ分限其他總テ人ノ分限ニ關スル訴訟

第五 無能力者ニ關スル訴訟

第六 養料ニ關スル訴訟

第七 失踪者及ヒ相續人虧缺ノ遺産ニ關スル訴訟

第八 證書ノ偽造若クハ變造ノ訴訟

第九 再審

檢事ノ陳述ハ當事者ノ辯論終リタルトキ之ヲ爲ヌ
當事者ハ檢事ノ意見ニ對シ事實ノ更正ノミニ付キ陳述ヲ爲スコトヲ得

第五條 左ニ掲グル

者ハ辯護士タルコトヲ得ズ

第一 重罪ヲ犯シ

タル者但シ國事犯ニテ復権シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第二 不敬罪、偽

造罪、偽証罪、賄賂罪、誣告罪、竊盜、詐欺取財罪、費消罪、贓物ニ關スル罪、遺失物埋藏物ニ關スル罪、家資分散ニ關ス

第二章 當事者

第一節 訴訟能力

第四十三條 原告若クハ被告カ自ラ訴訟ヲ爲シ又ハ訴訟代理人ヲシ

テ之ヲ爲サシムル能力ト法律上代理人ニ依レル訴訟無能力者ノ代表ト法律上代理人カ訴訟ヲ爲シ又ハ一ノ訴訟行爲ヲ爲スニ付テノ特別授權ノ必要トハ民法ノ規定ニ從フ

第四十四條 外國人ハ自國ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ有セサルモ本邦ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ有スルモノナルトキハ之ヲ有スルモノト看做ス

第四十五條 裁判所ハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハズ職權ヲ以テ訴訟能力、法律上代理人タル資格及ヒ訴訟ヲ爲スニ必要ナル授權ニ欠缺ナキヤ否ヤヲ調査ス可シ

裁判所ハ遲滯ノ爲メ原告若クハ被告ニ危害アリ且其欠缺ノ補正ヲ

爲シ得ルモノト認ムルトキハ原告若クハ被告又ハ其法律上代理人

ニ其欠缺ノ補正ヲ爲ス條件ヲ以テ一時訴訟ヲ爲スヲ許スコトヲ得

此場合ニ於テ裁判所ハ欠缺補正ノ爲メ相當ノ期間ヲ定メ其期間ノ滿了前ニ判決ヲ爲スコトヲ得ス但其欠缺ノ補正ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結マテ之ヲ追完スルコトヲ得

第四十六條 訴訟無能力者又ハ相續人ノ未定ノ遺産又ハ不分明ナル

相續人ニ對シ訴訟ヲ起ス可キ場合ニ於テ法律上代理人アラサルトキハ其事件ノ繫屬ス可キ裁判所ノ裁判長ハ申立ニ因リ遲滯ノ爲ニ危害ノ恐アル場合ニ限り特別代理人ヲ任ス可シ

右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲シ其裁判ハ申請人ニ之ヲ送達シ又申請ヲ認許シタルトキハ其任セラレタル特別代理人ニモ亦之ヲ送達ス可シ
申請ヲ却下スル裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第三 公權停止中

第四 破産若クハ

家資分散ノ宣告ヲ受ケ復権セサル者又ハ身代限りノ處分ヲ受ケ

ル罪及刑法第百

七十五條同第二

百六十條同第二

百八十二條同第

二百八十六條同

第二百八十七條

同第三百六十條

ニ記載シタル定

役ニ服スベキ輕

罪ヲ犯シタル者

債務ノ辨償ヲ終
ヘザル者

第六條 辯護士ハ報
酬アル公務ヲ兼シ
ルコトヲ得ズ但シ
帝國議會議員府縣
會常置委員ト爲リ
又ハ官廳ヨリ特ニ
命セラレタル職務
ヲ行フハ此ノ限リ
ニ在ラズ
辯護士ハ商業ヲ營
ムコトヲ得ズ但辯
護士會ノ許可ヲ得
タルモノハ此ノ限
リニ在ラズ

第二章 辯護士

特別代理人撰定ノ申請

原告人 何府市何町何番地族籍職業 某

被告人 何府市何町何番地族籍職業 某

右原告人何某被告何某ニ對シ何々ノ訴訟提起仕度候得共何某ハ
(訴訟無能力者)ハ相續人未定ナルカ又相續人ノ所在不分明ナルカ
ニテ法律上代理人無之萬一法律上代理人ノ撰定アル迄此訴訟ヲ遲
滯スルハ原告ノ爲メ重大ノ危害ノ恐アルヲ以テ訴訟法第四十六
條ニ依リ特別代理人撰定相定度此段及申請候也

年月日 原告人 何 某印

名簿

第七條 辯護士ハ辯
護士名簿ニ登錄セ
ラルコトヲ要ス
第八條 各地方裁判
所ニ辯護士名簿ヲ
備フ
辯護士ハ其氏名ヲ
登錄シタル地方裁
判所ノ所屬トス
刑事訴訟法第二百
六十四條及第二百
七十九條ノ所屬辯
護士ハ受訴裁判所
々在地ノ辯護士ヲ
以テ之ニ充ツ
第九條 辯護士名簿

何々地方裁判所長

判事 何 某段

第四十七條 第十五條ニ掲ケタル場合ニ於テ訴訟無能力者方其現在
地又ハ兵營地若クハ軍艦定繫所ノ裁判所ニ訴ヲ受ク可キ場合ニ於
テ其法律上代理人他ノ地ニ住スルトキハ遲滯ノ爲メ危害ヲシト雖
モ前條ノ規定ニ從ヒ特別代理人ヲ任スルコトヲ得
此他裁判ニ對シ抗告ヲ許ス規定ヲ除外總テ前條ノ規定ヲ適用ス

第一節 共同訴訟人

第四十八條 左ノ場合ニ於テハ共同訴訟人トシテ數人ガ共ニ訴ヲ爲
シ又ハ訴ヲ受クルコトヲ得
第一 數人カ訴訟物ニ付キ權利共通若クハ義務共通ノ地位ニ立
ツトキ
第二 同一ナル事實上及ヒ法律上ノ原因ニ基ク請求又ハ義務カ

ニ登録ヲ請フ者ハ其所屬地方裁判所ノ檢事局ヲ經由シテ司法大臣ニ請求書ヲ差出スベシ
 登録請求書ニハ第二條乃至第六條ノ事項ニ關スル證明書ヲ添フベシ
 第十條 登録ヲ請フモノハ登録手数料トシテ金二十圓ヲ納ムベシ
 他ノ地方裁判所ニ登録換テ爲スルハ手数料トシテ金十圓ヲ納ムベシ

訴訟ノ目的物タルトキ
 第三 性質ニ於テ同種類ナル事實上及ビ法律上ノ原因ニ基ク同種類ナル請求又ハ義務カ訴訟ノ目的物タルトキ
 第四十九條 共同訴訟人ハ其資格ニ於テハ各別ニ相手方ニ對立シ其一人ノ訴訟行爲及ビ懈怠又ハ相手方ヨリ其一人ニ對スル訴訟行爲及ビ懈怠ハ他ノ共同訴訟人ニ利害ヲ及ホサス
 第五十條 然レトモ總テノ共同訴訟人ニ對シ訴訟ニ係ル權利關係カ合一ニノミ確定ス可キトキニ限り左ノ規定ヲ適用ス
 共同訴訟人中ノ或ル人ノ攻撃及ビ防禦ノ方法(證據方法ヲ包含ス)ハ他ノ共同訴訟人ノ利益ニ於テ効チ生ス
 共同訴訟人中ノ或ル人カ争ヒ又ハ認諾セサルトキト雖モ總テノ共同訴訟人カ悉ク争ヒ又ハ認諾セサルモノト看做ス
 共同訴訟人中ノ或ル人ノミカ期日又ハ期間ヲ懈怠シタルトキハ其

第十一條 登録ニ關スル規則ハ司法大臣之ヲ定ム

第三章 辯護士
ノ權利及義務

第十二條 辯護士ハ登録後三年ヲ經過スルニ非ザレバ大審院ニ於テ其職務ヲ行フコトヲ得ズ
 三年以上判事檢事タリシ者ハ此ノ限ニ在ラズ

第十三條 辯護士ハ正當ノ理由ヲ證明スルニ非ザレバ裁判所ノ命シタル職

第三節 第三者ノ訴訟參加

懈怠シタル者ハ懈怠セサル者ニ代理ヲ任シタルモノト看做ス
 然レトモ懈怠シタル共同訴訟人ニハ其懈怠セサリシ場合ニ於テ爲ス可キ總テノ送達及ビ呼出ヲ爲スコトヲ要ス其懈怠シタル共同訴訟人ハ何時タリトモ其後ノ訴訟手續ニ再ヒ加ハルコトヲ得

第三節 第三者ノ訴訟參加

第五十一條 他人ノ間ニ權利拘束ト爲リタル訴訟ノ目的物ノ全部又ハ一分ヲ自己ノ爲ニ請求スル第三者ハ本訴訟ノ權利拘束ノ終ニ至ルマテ其訴訟カ第一審ニ於テ繫屬シタル裁判所ニ當事者雙方ニ對スル訴(主參加)ヲ爲シテ其請求ヲ主張スルコトヲ得
 第三者カ原告及ビ被告ノ共謀ニ因リ自己ノ債權ニ損害ヲ生スルコトヲ主張スルトキモ亦同シ

主參加訴

何府何市何町何村何番地何族何職業

務ヲ行フヲ辭スル
コトヲ得六

第十四條 辯護士
左ニ掲グル訴訟事
件ニ付其職務ヲ行
フヲ得ス

第一 相手方ノ協
議ヲ受ケテ之ヲ
贊助シ又ハ委任
ヲ受ケタル事件

第二 判事檢事奉
職中取扱ヒタル
事件

第三 仲裁手續ニ
依ル仲裁人ト爲
リテ取扱ヒタル
事件

主參加人 何
原告人 何
被告人 何
訴訟目的物 何
(物品) 何
此見積代價金何圓

何裁判所ニ繫屬中ナル何年(何)ノ何号原告人何某ヨリ被告人何某ニ
對スル何々訴訟事件ノ目的物ハ主參加人ノ所有物ニシテ被告
人方ニ預ケタルモノニシテ被告人ガ所有物ニアラザルナリ故ニ原
告人請求ノ如ク其物品ヲ引取ラル、ニ於テハ主參加人ノ損害賠ナ
カラザルヲ以テ茲ニ主參加人ノ申立ヲナシタル事實ナリトス

證據方法

第十五條 辯護士
係爭權利ヲ買受ク
ルコトヲ得六

第十六條 辯護士
訴訟事件ノ委任ヲ
承諾セザルトキハ
速ニ其旨ヲ委任者
ニ通告スベシ若通
告ヲ怠リタルハ
之ガ爲メ生シタル
損害ノ責ニ任ズ

第十七條 辯護士
所屬地方裁判所又
ハ其管内區裁判所
々在地ニ事務所ヲ
定メ之ヲ所屬地方
裁判所檢事局ニ届

一定ノ申立
原告被告ニ於テ主參加人ノ所有タルコトヲ承認シ右物品ヲ引渡シ候
證據判決相成度此段申請仕候也

年月日 主參加人 何 某印

何々裁判所 何 某印

第五十二條 本訴訟ハ第一審ニ繫屬スルト上級審ニ繫屬スルトヲ問
ハス原告被告若クハ主參加人ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ主參加
人ニ付テノ權利拘束ノ終ニ至ルマテ之ヲ中止スルコトヲ得

中止ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ本訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ之ヲ
爲スコトヲ得

決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

中止ヲ命スル決定ニ對シテ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

訴訟中止ノ申請

出心シ

第四章 辯護士會

第十八條 辯護士會ハ其ノ所屬地方裁判所毎ニ辯護士會ヲ設立スベシ

第十九條 辯護士會ハ所屬地方裁判所檢事正ノ監督ヲ受ク

第二十條 辯護士會ニ會長ヲ置ク又副會長ヲ置クコトヲ得
第二十一條 辯護士會ハ毎年定期總會ヲ開ク又臨時總會

申請人	何府何郡何町何番地族籍職業	何	某
被申請人	何府何郡何町何番地族籍職業	何	某
原告(若クハ被告)	何	何	某
被告	何	何	某
判事	何	何	某
何々裁判所	何	何	某
年月日	何	何	某

右當事者間ノ何事(何)第何号何々訴訟事件ニ付何某ヨリ主參加訴訟提起相成候ニ付本件訴訟ハ主參加訴訟ノ確定ニ至ルマテ中止相成度申請仕候也

第五十三條 他人ノ間ニ權利拘束ト爲リタル訴訟ニ於テ其一方ノ勝訴ニ依リ權利上利害ノ關係ヲ有スル者ハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハズ權利拘束ノ繼續スル間ハ其一方ヲ補助(從參加)スル爲メ之ニ附隨スルコトヲ得

第二十二條 辯護士會ハ便宜ニ依リ常議員ヲ置クコトヲ得

第二十三條 辯護士會ハ其ノ會則ヲ定メ檢事正ヲ經由シテ司法大臣ノ認可ヲ受クベシ
辯護士ハ所屬辯護士會ノ會則ヲ遵守スベシ

第二十四條 辯護士ハ辯護士會ニ加入シタル後ニ非ザレバ職務ヲ行フコト

第五十四條 從參加人ハ其附隨スル時ニ於ケル訴訟ノ程度ヲ妨ケサル限リハ其主タル原告若クハ被告ノ爲ニ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ施用シ且總テノ訴訟行爲ヲ有效ニ行ヒ殊ニ主タル原告若クハ被告ノ爲ニ存スル期間内ニ故障支拂命令ニ對スル異議又ハ上訴ヲ爲ス權利ヲ有ス

從參加人ノ陳述及ヒ行爲ト主タル原告若クハ被告ノ陳述及ヒ行爲ト相抵觸スル場合ニ於テハ主タル原告若クハ被告ノ陳述及ヒ行爲ヲ以テ標準ト爲ス但民法ニ於テ此ニ異ナル規定アルトキハ此限ニ在ラス

第五十五條 從參加人ハ訴訟ヨリ脫退シタルトキト雖モ其補助シタル原告若クハ被告トノ關係ニ於テハ其訴訟ノ確定裁判ヲ不當ナリト主張スルコトヲ得ス
從參加人ハ其附隨ノ時ノ訴訟ノ程度ニ因リ又ハ主タル原告若クハ

第二十五條 辯護士
ハ其所屬地方裁判
所管轄外ニ事務所
ヲ設ケ職務ヲ行ハ
ントスルトキハ其
職務ヲ行フベキ地
方裁判所々所在地ノ
辯護士會々則チ遵
守スベシ

第二十六條 辯護士
會々則ニハ會長副
會長常議員ノ選舉
又其職務總會常議
員會及議事ニ關ス
ル規定辯護士ノ風
紀ヲ保持スル規程

被告ノ所爲ニ因リ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ施用スルコトヲ妨ケラル
ルトキ又ハ主タル原告若クハ被告カ從參加人ノ當時知ラザリシ攻
撃及ヒ防禦ノ方法ヲ故意又ハ重過失ニ因リ施用セザリシトキニ限
リ其補助シタル原告若クハ被告カ訴訟ヲ不十分ニ爲シタリト主張
スルコトヲ得

第五十六條 從參加ハ本訴訟ヲ繫屬スル裁判所ニ申請ヲ以テ之ヲ爲
ス可シ

申請ニハ當事者及ヒ訴訟ヲ表示シ又一定ノ利害關係及ヒ附隨セシ
トスル陳述ヲ開示ス可シ

申請ハ當事者ニ之ヲ送達ス可シ

從參加ハ故障異議又ハト訴ト併合シテ之ヲ爲スコトヲ得

從參加ノ申請
何府何市何町何番地族籍職業
何縣何郡何村何番地族籍職業

並ニ謝金及手数料
ニ關スル規程其他
會務ノ處理ニ必要
ナル規程ヲ設クベ
シ

第二十七條 會長副
會長及常議員選舉
ノ結果總會及常議
員會開會ノ日時場
所及議題ハ辯護士
會ヨリ之ヲ檢事正
ニ届出ベシ

第二十八條 辯護士
會ニ於テハ左ノ事
項ノ外議スルコト
ヲ得ズ

第一 法律命令又

從參加人 何 某

原告 何府何市何町何番地族籍職業 何 某

被告 何縣何郡何村何番地族籍職業 何 某

原告人何某ヨリ被告人何某ニ係ル何年(何第何號何々事件)………
………以上ノ如キ理由ナルヲ以テ從參加人トシテ該訴訟ニ附從シ(原
告若クハ被告)ヲ補助スル所以ナリ

右ノ理由ナルヲ以テ(原告)若クハ(被告)ノ勝利ニ歸シ候時ハ不利益ノ
點不少候間茲ニ從參加人ノ申立ヲナシ(原告)若クハ(被告)ヲ補助ノ爲
該訴訟ニ附從仕候也

從參加人
年月日 何 某印

何裁判所長
判事 何 某印

第五十七條 原告若クハ被告カ從參加ニ付キ異議ヲ述フルトキハ當

ハ辯護士會々則
ニ規程シタル事
項

第二 司法大臣又
ハ裁判所ヨリ諮
問シタル事項

第三 司法上若ハ
辯護士ノ利害ニ
關シ司法大臣亦
ハ裁判所ニ建議
スル事項

第二十九條 檢事正
ハ辯護士會ノ會場
ニ臨席スルコトヲ
得又會議ノ結果ヲ
報告セシムルコト
ヲ得

事者及ヒ從參加人審訊シタル後決定ヲ以テ參加ノ許否ヲ裁判ス其
裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

利害關係ノ存否ニ付キ爭アルトキハ從參加人其關係ヲ疏明スルノ
ミヲ以テ參加ヲ許スニ足ル

右ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

參加ヲ許ササル裁判確定セサル間ハ從參加人ヲ本訴訟ニ立會ハシ
ノ殊ニ總テノ期日ニ之ヲ呼出シ又本訴訟ニ關係アル裁判ヲ爲シタ
ルトキハ從參加人ニ其裁判ヲ送達ス可シ

第五十八條 從參加人ハ當事者雙方ノ承諾ヲ得テ其附隨シタル原告
若クハ被告ニ代リ訴訟ヲ擔任スルコトヲ得此場合ニ於テハ其原告
若クハ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ訴訟ヨリ其原告若クハ被告ヲ
脱退セシム可シ

第五十九條 原告若クハ被告若シ敗訴スルトキハ第三者ニ對シ擔保

第三十條 辯護士會

ノ會議ニシテ法律
命令及辯護士會々
則ニ違フモノアル
トキハ司法大臣ハ
其議決ヲ無効トシ
又ハ其ノ議事ヲ停
止スルコトヲ得

第五章 懲戒

第三十一條 辯護士

ニシテ此ノ法律又
ハ辯護士會々則ニ
違背シタル所爲ア
ルトキハ會長ハ常
議員會又ハ總會ノ
決議ニ依リ懲戒ヲ
求ムル爲檢事正ニ

又ハ賠償ノ請求ヲ爲シ得ヘシト信シ又ハ第三者ヨリ請求ヲ受ク可
キコトヲ恐ルル場合ニ於テハ訴訟ノ權利拘束間第三者ニ訴訟ヲ告
知スルコトヲ得

訴訟ノ告知ヲ受ケタル者ハ更ニ訴訟ヲ告知スルコトヲ得

第六十條 訴訟告知ハ訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ其訴訟告知ノ理由及

ヒ訴訟ノ程度ヲ記載シタル書面ヲ提出シテ之ヲ爲ス可シ

此書面ハ第三者ニ送達スルコトヲ要ス又訴訟ヲ告知スル原告若ク

ハ被告ノ相手方ニハ其原本ヲ送付ス可シ

告知參加ノ申請

何府何市何町何番地族籍職業

告知者

某

何府何市何町何番地族籍職業

被告告知者

某

原告人何某ヨリ被告何某ニ對シ何年(何)ノ第何號ヲ以テ何々請求

申告スベシ
檢事正ハ會長ノ申
告ニ依リ又ハ職權
ヲ以テ懲戒訴訟ヲ
檢事長ニ請求スベ
シ

第三十二條 辯護士

ニ對スル懲戒事件
ニ付テハ管轄控訴
院ニ於テ懲戒裁判
所ヲ開クベシ

第三十三條 懲戒罰

ハ左ノ四種トス
第一 譴責
第二 百圓以下ノ
罰金
第三 一年以下ノ

訴訟ヲ提起仕候處本件訴訟ハ其原因被告知人ニ關係有之候間該
被告知人何某ニ告知セザルニ於テハ(敗訴ノ場合ニ於テ擔保又ハ
賠償ノ請求ヲナシ又ハ賠償ノ請求ノ恐レアル)ヲ以テ本件ノ訴訟ヲ
告知仕度依テ茲ニ申請仕候也

年月日 告知人

何裁判所

某印

判事 何 某

第六十一條 訴訟ハ訴訟告知ニ拘ハラス之ヲ續行ス

第三者參加ス可キコトヲ陳述スルトキハ從參加ノ規定ヲ適用ス

第六十二條 第三者ノ名ヲ以テ物ヲ占有スルコトヲ主張スル者其物

ノ占有者トシテ被告ト爲リタルトキハ本案ノ辯論前第三者ヲ指名
シ之ニ陳述ヲ爲サシムル爲メ其呼出ヲ求ムルトキハ第三者ノ陳述
ヲ爲シ又ハ之ヲ爲ス可キ期日マテ本案ノ辯論ヲ拒ムコトヲ得
第三者カ被告ノ主張ヲ争フトキ又ハ陳述ヲ爲ササルトキハ被告ハ

停職

第四 除名

第三十四條 懲戒處
分ニ付テハ判事懲
戒法ノ規定ヲ準用
ス

附則

第三十五條 現在ノ

代理人ハ本法施行
ノ日ヨリ六十日以
内ニ辯護士名簿ニ
登録ヲ請フトキハ
試験ヲ要セズシテ
辯護士タルコトヲ
得
第三十六條 現在ノ
代理人本法施行前

原告ノ申立ニ應スルコトヲ得

第三者カ被告ノ主張ヲ正當ト認ムルトキハ被告ノ承諾ヲ得テ之ニ
代リ訴訟ヲ引受クルコトヲ得

第三者カ訴訟ヲ引受ケタルトキハ裁判所ハ被告ノ申立ニ因リ其被
告ヲ訴訟ヨリ脫退セシム可シ其物ニ付テノ裁判ハ被告ニ對シテモ
効力ヲ有シ且之ヲ執行スルコトヲ得

指示參加ノ申請

指示參加人

何府何市何町何番地族籍職業

何

某

原告人何某ヨリ被告何某間ノ何年何月何日何事何を事件ノ目的物ヲ
ル何々ハ指示參加人何某ノ所有ニシテ被告ハ何某ノ名義ヲ以テ一
時占有仕居候迄ニ付此ノ指示參加人ヲ陳述ノ爲メ相當ノ期日ヲ定
メ御呼出相成度此段申請仕候也

年月日

被告何

何

某印

何裁判所

ニ委任ヲ受ケタル
事件ニ付テハ其ノ
判決ニ至ルマデ財
務ヲ行フコトヲ得
第三十七條 第十二
條ノ規定ハ現在ノ
代言人ニ之ヲ適用
セス
第三十八條 本法ハ
明治廿六年五月一
日ヨリ施行ス
明治十三年司法省甲
第一號布達代言人規
則ハ本法施行ノ日ヨ
リ廢止ス
民事訴訟費用法
(廿四年一月一
日實施)

判事 何 某 段

第四節 訴訟代理人及ヒ輔佐人

第六十三條 原告若クハ被告自ラ訴訟ヲ爲ササルトキハ辯護士ヲ以
テ訴訟代理人トシ之ヲ爲ス
辯護士ノ在ラサル場合ニ於テハ訴訟能力者タル親族若クハ雇人ヲ
以テ訴訟代理人ト爲シ若シ此等ノ者ノ在ラサルトキハ他ノ訴訟能
力者ヲ以テ訴訟代理人ト爲スコトヲ得
區裁判所ニ於テハ辯護士ノ在ルトキト雖モ訴訟能力者タル親族若
クハ雇人ヲ以テ訴訟代理人ト爲スコトヲ得

証券印
紙五厘

訴訟代理委任狀

拙者何府縣市郡何町村何番地(辯護士何某ヲ訴訟代理人ト相定左ノ
專柄ヲ委任ス
一何々

第一條 民事訴訟法

ノ規定ニ於ケル訴
訟費用ハ以下數條
ノ規定ニ從ヒ之ヲ
算定ス

第二條 訴狀其他總
テ書類ノ書記料ハ
半枚十二行二十字
詰ニ付金二錢五厘
トス但半枚ニ滿タ
ザルモノモ亦同シ
圓面ハ一葉ニ付金
十錢トス但別ニ測
量ヲ要シタルトキ
ハ其測量費ハ裁判
所ノ意見ヲ以テ定
ムル所ニ依ル

一何々

右代理ノ委任狀仍テ如件

年月日

何府縣市郡何番地

何

某印

第六十四條 訴訟委任ハ裁判所ノ記錄ニ備フ可キ書面委任ヲ以テ之
ヲ證ス可シ

私署證書ハ相手方ノ求ニ因リ之ヲ認證ス可シ其認證ハ公證人之ヲ
爲シ又相當官吏之ヲ爲スコトヲ得

口頭辯論ノ期日又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ口頭委
任ヲ爲シ其陳述ヲ調書ニ記載セシムルトキハ書面委任ト同一ナリ
トス

第六十五條 訴訟委任ハ反訴主參加故障、假差押若クハ假處分又ハ
強制執行ニ因リ生スル訴訟行爲ヲ併セ訴訟ニ關スル總テノ訴訟行
爲ヲ爲シ及ヒ相手方ヨリ辨濟スル費用ノ領収ヲ爲ス權ヲ授與ス

第三條 翻譯料ハ半枚十二行二十字詰ニ付金五十錢トス但半枚ニ滿サルモノモ亦同シ

第四條 民事訴訟用印紙法ニ從ヒ貼用シタル印紙費額ハ其代價ニ依ル

第五條 執達吏ノ手數料及ヒ立替金ハ執達吏手數料規則ノ規定ニ從フ

第六條 郵便料電信料及ヒ運送料ハ其實費ニ依ル

第七條 官報、公報、

訴訟代理人ハ特別ノ委任ヲ受クルニ非サレハ控訴若クハ上告ヲ爲シ再審ヲ求メ、代人ヲ任シ、和解ヲ爲シ、訴訟物ヲ拋棄シ又ハ相手方ヨリ主張シタル請求ヲ認諾スル權ヲ有セス

第六十六條 訴訟委任ハ法律上ノ範圍(第六十五條第一項)ヲ制限スルモ其制限ハ相手方ニ對シ效力ナシ

然レトモ辯護士ニ依レル代理ヲ除ク外ハ各箇ノ訴訟行爲ニ付キ委任ヲ爲スコトヲ得

第六十七條 訴訟代理人數人アルトキハ共同若クハ各別ニテ代理スルコトヲ得但委任ニ此ト異ナル定アルモ相手方ニ對シ其效力ナシ

第六十八條 訴訟代理人カ委任ノ範圍内ニ於テ爲シタル訴訟上ノ行爲及ヒ不行爲ハ原告若クハ被告ニ對シテハ其本人ノ行爲又ハ不行爲ト同一ナリトス

然レトモ代理人ノ事實上ノ陳述ハ其代理人ト共ニ裁判所ニ出頭シ

及新聞紙ヲ以テ公告シタル公告料ハ各其定價ニ依ル

第八條 民事訴訟法第二百二十七條ノ規定ニ從ヒ辯護士ノ附添ヘテ命シタル所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第九條 當事者ノ日當ハ出頭一度ニ付金五十錢トス但滞在費ヲ給スル場合ニ於テハ此日當ヲ金二十五錢トス

第十條 証人ノ日當

タル原告若クハ被告ヨリ即時ニ之ヲ取消シ又ハ更正シタルトキニ限り其效力ヲ失フ

第六十九條 委任者ノ死亡、訴訟能力若クハ法律上代理ノ變更、委任ノ廢罷及ヒ代理ノ謝絶ニ因ル委任ノ消滅ハ其消滅ヲ通知スルマテ相手方ニ對シ其効力ナシ

此通知書ハ原告若クハ被告ヨリ受訴裁判所ニ之ヲ差出シ裁判所ハ相手方ニ之ヲ送達ス可シ

代理人ハ謝絶ヲ爲スモ委任者他ノ方法ヲ以テ自己ノ權利ノ防衛ヲ爲ササル間ハ其委任者ノ爲ニ行爲ヲ爲スコトヲ得

訴訟代理委任消滅ノ通知申請

何府市町何番地族籍職業
何縣郡何村何 何 某

右何某ヲ以テ原告人何某被告何某間ノ何年何月何日何號何々事件ノ(原告)若クハ被告何某ノ訴訟代理ヲ委任仕候處(委任者)若クハ(受任者)

ハ出頭一度ニ付金五十錢トス但滞在費ニ給スル場合ニ於テハ此ノ日當ヲ給セス

第十一條 鑑定人及ヒ通事ノ日當ハ出頭一度ニ付金五十錢乃至金五圓ノ範圍内ニ於テ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル
鑑定ヲ爲スニ付別ニ支出シタル費用ハ其實費ニ依ル
第十二條 當事者ノ滞在費ハ滿八里以

タル(原告者クハ被告又ハ代理人)(死亡人訴訟能力欠缺法律上代理人ノ變更委任廢罷代理ノ謝絶)ニヨリ訴訟代理委任取消致候間此段及通知候也

年月日

(原告者クハ被告)

某印

何裁判所

判事 何 某段

第七十條 委任ノ欠缺ハ原告若クハ被告ノ爲メ其代理人ナキモノト看做ス
裁判所ハ職權ヲ以テ委任ノ欠缺ヲ調査シ委任ナク又ハ適式ノ委任ナク代理人トシテ出頭スル者ニ事情ニ從ヒ費用及ヒ損害ノ保證ヲ立テシメ又ハ之ヲ立テシメヌシテ假ニ訴訟ヲ爲スヲ許スヲ得

判決ハ欠缺ヲ補正シ又ハ之ヲ補正スル爲メ裁判所ノ適宜ニ定ムル期間ノ滿了後ニ限り之ヲ爲スコトヲ得但欠缺ノ補正ハ判決ニ接着

スル口頭論辯ノ終結マデ之ヲ追完スルコトヲ得

外ノ地ヨリ來リ滞在スルトキハ一日金二十五錢トシ証人、鑑定人及通事ノ滞在費ハ一日金五十錢トス

第十三條 當事者、證人、鑑定人及通事ノ旅費ハ海陸滿一里毎ニ付キ金十錢トス通路兩線以上アルトキハ最近ノ通路ヲ以テ旅費ヲ算定ス

外國ニ在ル當事者ノ旅費ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル

第七十一條 原告若クハ被告ハ辯護士ヲ輔佐人ト爲シ又ハ何時ニテモ裁判所ノ取消シ得ヘキ許可ヲ得テ他ノ訴訟能力者ヲ輔佐人ト爲シテ共ニ出頭スルコトヲ得其輔佐人ハ口頭論辯ニ於テ權利ヲ伸張シ又ハ防禦スル爲メ原告若クハ被告ヲ補助スルモノトス
輔佐人ノ演述ハ原告若クハ被告即時ニ之ヲ取消シ又ハ更正セサルトキニ限り原告若クハ被告自ラ演述シタルモノト看做ス

輔佐人ノ申請

原告人何某ヨリ被告人何某ニ係ル何年(何第何號)ノ何々事件ニ付口頭論辯ニ際シ(權利)ヲ伸張シ若クハ防禦ノ爲(辯護士)何某又ハ親族故(親)ヲ以テ補佐人トシ度候間御許可被下度申請仕候也
但シ(親族)故(何某)ノ補佐ノ必要無之時ハ何時御取消相成候モ決シテ異議申問致候也

年月日

(原告人)若クハ(被告人)

某印

所ニ依ル

第十四條 判事及裁判所書記檢證ノ爲

メ實地臨檢ヲ爲スニ付テノ旅費及滞在費ハ証人ニ準ス

第十五條 本法ニ定メサル必要ノ費用

ハ該實費ニ依ル

第十六條 強制執行及ヒ非訟事件ニ關スル費用ハ執達吏

手敷料規則ニ定メタルモノヲ除ク外前數條ノ規定ニ準用シテ之ヲ算定ス
強制執行又ハ非訟

何々裁判所

判事 何

某段

第五節 訴訟費用

第七十二條 敗訴ノ原告若クハ被告ハ訴訟ノ費用ヲ負擔シ殊ニ訴訟

ニ因リ生シタル費用ヲ相手方ニ辯濟ス可シ但其費用ハ裁判所ノ意

見ニ於テ相當ナル權利伸張又ハ權利防禦ニ必要ナリト認ムルモノ

ニ限ル

訴訟中ニ訴ヲ取下ク請求ヲ拋棄シ又ハ相手方ノ請求ヲ認諾スル原告若クハ被告ハ敗訴ノ原告若クハ被告ニ同シ

訴訟費用確定申請

何府何市何町何番地族籍職業

原告人

何

某

被告人

何

某

右當事者間ノ何年何月何日何號何々事件ノ訴訟費用別紙訴訟費用計算

開書ノ如クニ候間右原告ハ辨濟ス可キ訴訟費用額並ニ確定決定ノ

訴訟費用額御確定相成度此段申請仕候也

(原告若クハ被告)

年月日

何

某印

何々裁判所

判事 何

某段

訴訟費用請求書

右當事者間ノ何年何月何日何號何々事件ノ訴訟費用ハ左ノ如シ

裁判所費用及立替金

一金何圓何拾錢

訴訟印紙料

一金何圓何拾錢

原告出頭日當

一金何拾錢

證人日當旅費

一金何拾錢

鑑定人日當旅費

小計何圓何拾錢

訴訟並ニ附屬書類何枚認料

事件ニ關シテ保管人若クハ管理人ヲ任命シタルトキハ其費用ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

●出版法

法律第十五號

出版法

第一條 凡ソ機械會

密其他何等ノ方法

ヲ以テスルヲ問ハ

ズ文書圖書ヲ印刷

シテ之ヲ發賣シ又

ハ頒布スルヲ出版

ト云ヒ其ノ文書ヲ

著述シ又ハ編纂シ

若ハ圖書ヲ作為スル者ヲ著作者ト云ヒ發賣頒布ヲ擔當スル者ヲ發行者ト云ヒ印刷ヲ擔當スル者ヲ印刷者ト云フ

第二條 新聞紙又ハ定期ニ發行スル雜誌ヲ除クノ外文書圖書ノ出版ハ總テ此ノ法律ニ依ルベシ但シ專ラ學術、技藝、統計、廣告ノ類ヲ記載スル雜誌ハ此ノ法律ニ依リ出版スルコトヲ得

執達吏費用及立替金

一金何拾錢	手 費 料
一金何拾錢	旅 費
小計金何拾錢	
其他費用	
一金何拾錢	和 解 費 用
一金何拾錢	假 差 押 費 用
小計金何何拾錢	
總計金何何拾錢	
右之通りニ御座候也	

年 月 日

何々裁判所 何 某 殿

判 事 何 某 殿

右原告者クハ被告 何 某 印

第七十三條 當事者ノ各方一分ハ勝訴ト爲リ一分ハ敗訴ト爲ルトキハ其費用ヲ相消シ又ハ割合ヲ以テ之ヲ分擔ス可シ第一ノ場合ニ於

第三條 文書圖書ヲ出版スルトキハ發行ノ日ヨリ到達スベキ日數ヲ除キ二日前ニ製本三部ヲ添へ内務省へ届出ベシ

第四條 官廳ニ於テ文書圖書ヲ出版スルトキハ其ノ官廳ヨリ發行前ニ製本三部ヲ内務省ニ送付スベシ

第五條 出版届ハ著作及發行者連印ニテ之ヲ差出スベシ

テハ各當事者ハ其支出シタル費用ヲ自ラ負擔シ他ノ一方ニ對シ辨濟ヲ請求スルコトヲ得ス然レトモ裁判所ハ相手方ノ要求格外ニ過分ナルニ非ス且別段ノ費用ヲ生セサリシトキ又ハ判事ノ意見、鑑定人ノ鑑定若クハ相互ノ計算ニ因リ要求額ヲ定ムルニ非サレハ容易ニ過分ノ要求ヲ避クルコトヲ得サリシトキハ當事者ノ一方ニ訴訟費用ノ全部ヲ負擔セシムルコトヲ得

第七十四條 被告直チニ請求ヲ認諾シ且其作為ニ因リ訴ヲ起スニ至ラシメタルニ非サルトキハ訴訟費用ハ原告ノ勝訴ト爲リタルニ拘ハラヌ其負擔ニ歸ス

第七十五條 期日若クハ期間ヲ懈怠シ又ハ自己ノ過失ニ因リ期日ノ變更、辨論ノ延期辯論續行ノ爲ニスル期日ノ指定期間ノ延長其他訴訟ノ遲滯ヲ生セシメタル原告若クハ被告ハ本案ノ勝訴者ト爲リ

但シ非賣品ハ著作
者又ハ發行者ノミ
ニテ届出ルコトヲ
得

版權ノ保護ナキ文
書圖書ヲ出版スル
トキ若ハ著作又
ハ其ノ相續者ヲ知
ルベカラザルトキ
ハ其ノ理由ヲ記シ
發行者ヨリ差出ス
ベシ

學校、會社、協會等
ニ於テ著作ノ名義
ヲ以テ出版スル文
書圖書ハ其ノ學校
會社、協會等ヲ代

タルニ拘ハラズ又此カ爲ニ生シタル費用ヲ負擔ス可シ

第七十六條 裁判所ハ無益ナル攻撃又ハ防禦ノ方法證據方法ヲ包含
ス)ヲ主張シタル原告若クハ被告ヲシテ本案ノ勝訴者ト爲リタル
ニ拘ハラズ其方法ノ費用ヲ負擔セシムルコトヲ得

第七十七條 無益ナル上訴又ハ取下ケタル上訴ノ費用ハ之ヲ提出シ
タル原告若クハ被告ノ負擔ニ歸ス

第七十八條 上訴ニ因リ裁判ノ全部又ハ一分ヲ廢棄若クハ破毀スル
トキハ訴訟ノ總費用上訴ノ費用ヲ包含ス)ノ裁判ハ本案ノ終局裁
判ト併合シテ更ニ之ヲ爲ス可シ

原告若クハ被告カ前審ニ於テ主張スルコトヲ得ヘカリシ事實又ハ
攻撃若クハ防禦ノ方法ヲ斯ニ提出スルニ因リ勝訴者ト爲ルトキハ
其原告若クハ被告ニ上訴費用ノ全部又ハ一分ヲ負擔セシムルコト
ヲ得

表スルモノ者發行
者ト連印シテ之ヲ
届出ベシ

第六條 文書圖書ノ
發行者ハ文書圖書
ノ販賣ヲ以テ營業
トスル者ニ限ル但
シ著作又ハ相續
者ハ發行者ヲ兼ヌ
ルコトヲ得

第七條 文書圖書ノ
發行者ハ其ノ氏名
住所及發行ノ年月
日ヲ其ノ文書圖書
ノ末尾ニ記載スベ
シ

第八條 文書圖書ノ

第七十九條 當事者カ訴訟物ニ付キ和解ヲ爲ストキハ其訴訟ノ費用
及ヒ和解ノ費用ハ共ニ相消シタルモノト看做ス但當事者別段ノ合
意ヲ爲シタルトキハ此限ニ在ラス

第八十條 法律ノ規定ニ從ヒ費用ニ付キ共同訴訟人ノ連帶義務ノ生
セサルトキニ限リ其共同訴訟人ハ相手方ニ對シ平等ニ費用ヲ負擔
ス然レトモ共同訴訟人ノ訴訟ニ於ケル利害ノ關係著シク相異ナル
トキハ裁判所ハ其利害關係ノ割合ニ從ヒ費用ヲ負擔セシムルコト
ヲ得

共同訴訟人中ノ或ル人カ特別ノ攻撃又ハ防禦ノ方法ヲ主張シタル
トキハ他ノ共同訴訟人ハ此カ爲ニ生シタル費用ヲ負擔セズ

第八十一條 從參加ニ對シ原告若クハ被告カ異議ヲ述フルトキハ其
異議ノ決定ニ於テ從參加人ト其原告若クハ被告トノ中間訴訟ノ費
用ニ付キ第七十二條乃至第七十八條ノ規定ニ從ヒテ裁判ヲ爲ス可

都度第三條ノ手續

ヲ爲スヘシ但シ雜誌類ニ在テハ内務大臣ノ許可ヲ經テ其ノ手續ヲ省略スルコトヲ得

此ノ法律ニ依リ出版スル雜誌ニシテ十二箇月間一回ヲモ發行セザルトキハ廢刊シタモノト看做スベシ

第十一條 一タヒ出版届ヲ爲シタル交書圖書ノ再版ハ出版届ヲ要セズト雖若改正増減シ又ハ

達吏(職業執行ニ際シ(過失若クハ懈怠ニ依リ)云々)ノ手續ヲ爲サント爲メ別紙計算書ノ如ク費用ヲ生シ候ニ付被申請人ニ於テ費用ノ辨濟ヲ負擔ス可キ様決定相成度此段申請仕候也

年月日 申立人

何々裁判所

判事 何々 某 殿

右

某 印

申請ニハ費用計算書相手方ニ付與ス可キ計算書ノ謄本及ヒ各箇費用額ノ疏明ニ必要ナル證書ヲ添附ス可シ

第八十五條 費用額確定ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

裁判所ハ裁判所書記ニ費用計算書ノ計算上之検査ヲ命スルコトヲ得

裁判所ハ費用額確定ノ決定ヲ爲ス前相手方ニ計算書ヲ付與シテ裁判所ノ定ムル期間内ニ陳述ヲ爲ス可キ旨ヲ之ニ催告スルコトヲ得

註解附録繪畫等ヲ加ヘタルトキハ仍

第三條ニ依ルベシ

第十二條 演説若ハ講義ノ筆記ハ演説者若ハ講義者ヲ以テ著作トス但シ筆記者ニ於テ演説者若ハ講義者ノ承諾ヲ得テ自ラ之ヲ出版スルトキハ筆記者ヲ著作ト看做スベシ此ノ場合ニ於テ記載ノ事項

第十六條第十七條第十八條第十九條第二十一條第二十

此決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第八十六條 當事者ハ訴訟費用ノ全部又ハ一分ヲ割合ニ從ヒ負擔ス可キトキハ裁判所ハ費用額確定ノ決定ヲ爲ス前相手方ニ裁判所ノ定ムル期間内ニ其費用ノ計算書ヲ差出ス可キ旨ヲ催告ス可シ此期間ヲ徒過シタル後ハ費用額確定ノ決定ハ相手方ノ費用ヲ願ミス之ヲ爲ス可シ但相手方ハ後ニ自己ノ費用ヲ以テ其費用額確定ノ申請ヲ爲ス妨ト爲ルコト無シ

第六節 保證

第八十七條 訴訟上ノ保證ハ當事者カ別段ノ合意ヲ爲ス場合又ハ此法律ニ於テ保證ヲ定ムルコトヲ裁判所ノ自由ナル意見ニ任スル場合ヲ除ク外裁判所ノ意見ニ於テ擔保ニ十分ナリトスル現金又ハ有價證券ヲ供託シテ之ヲ爲ス

第八十八條 原告又ハ原告ノ從參加人タル外國人ハ被告ニ對シ其求

六條第二十七條ニ觸ル、トキハ演説者若ハ講義者筆記者ト同ク其ノ罪ヲ論ズ

公開ノ席ニ於テ爲シタル演説ヲ新聞紙若ハ雜誌ノ通信者ニ於テ筆記シ其ノ新聞紙若ハ雜誌ニ記載シタルモノ及總テ演説者講義者ノ承諾ヲ經ズシテ其筆記ヲ出版シタルモノニ關シテハ演説者若ハ講義者ハ著作ノ責ニ任

ニ因リ訴訟費用ニ付キ保証ヲ立ツ可シ

左ノ場合ニ於テハ保証ヲ立ツル義務ヲ生セス

第一 國際條約又ハ原告ノ屬スル國ノ法律ニ依リ本邦人カ同一ノ場合ニ於テハ保証ヲ立ツル義務ナキトキ

第二 反訴ノ場合

第三 證書訴訟及ヒ爲替訴訟ノ場合

第四 公示催告ニ基キ起シタル訴ノ場合

第八十九條 裁判所ハ前條第一項ノ場合ニ於テハ保証ヲ立ツ可キ數額ヲ確定ス可シ

此數額ヲ確定スルニハ被告ノ訴ヲ受ケタルカ爲メ各審級ニ於テ支出ス可キ訴訟費用ノ額ヲ標準ト爲ス可シ

訴訟中ニ保証ノ不足ヲ生シ且追増保証ヲ立ツ可キコトヲ被告カ求ムルトキハ前項ト同一ノ手續ニ依ル可シ但爭ナキ請求ノ部分カ擔

セス

公開ノ席ニ於テ爲シタル演説ノ外ハ講義者又ハ演説者ノ許諾ヲ經ルニ非サレハ他人ニ於テ其ノ筆記ヲ出版スルコトヲ得ス

但シ本項ニ違フ者ハ版權法ニ據リ其ノ責ニ任セシム

第十三條 二種以上ノ著作若ハ演説講義ノ筆記ヲ編纂シテ一部ノ書ト爲ストキハ編纂者ヲ著作者ト看做スヘシ

保二十分ナルトキハ此限ニ在ラス

第九十條 裁判所ハ保証ヲ立ツ可キ期間ヲ定ム可シ

此期間ノ經過後裁判アルマテニ保証ヲ立テサル場合ニ於テハ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ訴ヲ取下ケタリト宣言シ又原告カ上訴ヲ爲シタルトキハ其上訴ヲ取下ケタリト宣言ス可シ

第七節 訴訟上ノ救助

第九十一條 何人カ問ハヌ自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害スルニ非サレハ訴訟費用ヲ出タヌコト能ハサル者ハ訴訟上ノ救助ヲ求ムルコトヲ得但其目的トスル權利ノ伸張又ハ防禦ノ輕忽ナラス又ハ見込ナキニ非スト見ユルトキニ限ル

第九十二條 外國人ハ國際條約又ハ其屬スル國ノ法律ニ依リ本邦人カ同一ノ場合ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ求ムルコトヲ得ルトキニ限りハ之ヲ求ムルコトヲ得

前條第一項ノ末段
及第二項第三項ハ
本條ニ適用スヘシ
第十四條 翻譯ハ翻
譯者ヲ以テ著作者
ト看做スヘシ
第十五條 學校、會
社、協會等ニ於テ
著作ノ名義ヲ以テ
出版スル文書圖書
ハ其ノ出版届ニ署
名シタル代表者ヲ
以テ著作者ト看做
スヘシ
第十六條 罪犯ヲ曲
庇シ又ハ刑事ニ觸
レタル者若ハ刑事

第九十三條 訴訟上救助ノ申請ハ訴訟ノ關係ヲ表明シ且證據方法ヲ
開示シテ其救助ヲ求ムル審級ノ裁判所ニ之ヲ提出ス可シ其申請ハ
口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得
原告若クハ被告ハ申請ノ提出ト共ニ管轄市町村長ヨリ發シタル證
書ヲ出ダスコトヲ要ス其證書ニハ原告若クハ被告ノ身分、職業、財
産並ニ家族ノ實況及ヒ其納ム可キ直税ノ額ヲ開示シテ訴訟費用支
拂ノ無資力ヲ證ス可シ
訴訟上救助申請
何府何市何町何番地族籍職業
何縣何郡何村何番地
申請人 何
某
訟訴ノ關係
申請人ハ何(府縣)何(市郡)何(町付)何番地何某ニ對シ何年何月何日辨
濟契約ノ貸金若クハ物品引渡又ハ地所取戻請求ヲナシタルモ何某
ハ其請求ヲ拒絕セリ又ハ請求セラレタルモ之ヲ拒絕スルノ理由ヲ
示シ

裁判中ノ著ヲ救護
シ若ハ賞恤スルノ
文書ヲ出版スルコ
トヲ得ス
第十七條 重罪輕罪
ノ豫審ニ關スル事
項ハ公判ニ付サル
以前ニ於テ之ヲ出
版スルコトヲ得ス
傍聽ヲ禁シタル訴
訟ノ事項ハ之ヲ出
版スルコトヲ得ス
第十八條 外交軍事
其ノ他官廳ノ機密
ニ關シ公ニセサル
官ノ文書及官廳ノ
議事ハ當該官廳ノ

証據方法
一何々(證據物寫ヲ記載ス可シ)
右訴訟關係ノ如ク(原告人何某若クハ被告人何某)ニ對シ(若クハヨリ)
訴訟ヲ提起仕度(若クハ訴訟ヲ提起セラレ候處別紙(市町、村)長證明
ノ如ク亦貧ニシテ訴訟費用ヲ濟シ難ク候間訴訟上ノ救助御許可被
成下度此段申請仕候也
年月日 申請人 何 某 印
何々裁判所 判事 何 某 殿
第九十四條 訴訟上ノ救助ハ各審ニ於テ各別ニ之ヲ付與ス第一審ニ
於テハ強制執行ニ付テモ之ヲ付與スルモノトス
前審ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ受ケタルトキハ上級審ニ於テハ無資力
ヲ證スルコトヲ要セス相手方上訴ヲ提出シタルトキハ上級審ニ於
テハ訴訟上ノ救助ヲ求ムル原告若クハ被告ノ權利ノ伸張又ハ防禦
ノ輕忽ナラス又ハ見込ナキニ非スト見ユルヤチ調査スルコトヲ要

許可ヲ得ルニ非サレハ之ヲ出版スルコトヲ得ス
法律ニ依リ傍聴ヲ禁シタル公會ノ議事ハ之ヲ出版スルコトヲ得ス

第十九條 安寧秩序ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞乱スルモノト認メラル文書圖書ヲ出版シタルトキハ内務大臣ニ於テ其ノ發賣頒布ヲ禁シ其ノ刻版及印本ヲ差押フルコトヲ得
第二十條 外國ニ於

セズ
第九十五條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル條件ノ存セサリシトキ又ハ消滅シタルトキハ何時タリトモ之ヲ取消スコトヲ得
第九十六條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ死亡ト共ニ消滅ス

第九十七條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ爲ニ左ノ効力ヲ生ス

- 第一 裁判費用(國庫ノ立替金ヲ包含ス)ヲ濟済スルコトヲ假免除
 - 第二 訴訟費用ノ保證ヲ立ツルコトノ免除
 - 第三 送達及ヒ執行行爲ヲ爲サシムル爲メ一時無報酬ニテ執達吏ノ附添ヲ求ムル權利
- 受訴裁判所ハ必要ナル場合ニ於テハ訴訟上ノ救助ヲ受ケタル原告

テ印刷シタル文書圖書ニシテ安寧秩序ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞乱スルモノト認ムルトキハ内務大臣ハ其ノ文書圖書ノ内國ニ於ケル發賣頒布ヲ禁シ其ノ印本ヲ差押フルコトヲ得
第二十一條 軍事ノ機密ニ關スル文書圖書ハ當該官廳ノ許可ヲ得ルニ非サルハ之ヲ出版スルコトヲ得ス
第二十二條 第三條

若クハ被告ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ一時無報酬ニテ辯護士ノ附添ヲ命スルコトヲ得
第九十八條 訴訟上ノ救助ハ相手方ニ生シタル費用ヲ辨濟スル義務ニ影響ヲ及ボサス
第九十九條 救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ爲メ假ニ濟済ヲ免除シタル裁判費用ハ訴訟費用ニ付キ確定裁判ヲ受ケタル相手方又ハ訴若クハ上訴ヲ取下抛棄認諾若クハ和解ニ因リ訴訟費用ヲ負擔ス可キ相手方ヨリ之ヲ取立ツルコトヲ得
救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ニ附添ヒタル執達吏又ハ辯護士ハ同一ノ條件アルトキハ亦自己ノ權利ニ依リ費用確定ノ方法ヲ以テ其手數料及ヒ立替金ヲ取立ツルコトヲ得
第一百條 救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ハ自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害セスヲ費用ノ濟済ヲ爲シ得ルニ至ルトキハ假免除ヲ

ノ届出ヲ爲サスシ
テ文書圖書ヲ出版
シタル者ハ五圓以
上五十圓以下ノ罰
金ニ處ス

第二十三條 第六條
ヲ犯ス者ハ十一日
以上三月以下ノ輕
禁錮又ハ五圓以上
五十圓以下ノ罰金
ニ處ス

第二十四條 發行者
自己ノ氏名、住所
又ハ發行ノ年月日
又ハ印刷者ノ氏名
住所又ハ印刷ノ年
月日ヲ其ノ發行ス

ル文書圖書ニ記載
セス其ノ之ヲ記載
スルモ實ヲ以テセ
サル者ハ五圓以上
三十圓以下ノ罰金
ニ處ス
第二十五條 印刷者
自己ノ氏名、住所
又ハ印刷ノ年月日
又ハ印刷スル所
ノ文書圖書ニ記載
セス若ハ之ヲ記載
スルモ實ヲ以テセ
サル者ハ罰前條ニ
同シ
住所ト印刷所ト同
シカラサルトキ及

得タル數額(第九十七條第一號)ヲ直チニ追拂ヒスル義務アリ
第一百一條 裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後訴訟上救助ノ付與並ニ
辯護士附添ノ命令ニ付テノ申請ハ訴訟上救助ノ取消及ヒ數額追拂
ノ義務ニ付キ決定ヲ爲ス

此裁判ハ口頭辯論ヲ經ヌシテ之ヲ爲スコトヲ得
第一百二條 訴訟上ノ救助ヲ付與シ又ハ其取消ヲ拒ミ若クハ費用追拂
ヲ命ズルコトヲ拒ム決定ニ對シテハ檢事ニ限リ抗告ヲ爲スコトヲ
得

辯護士ノ附添ヲ命ズル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス
訴訟上ノ救助ヲ拒ミ若クハ取消シ又ハ辯護士ノ附添ヲ拒ミ又ハ費
用ノ追拂ヲ命ズル決定ニ對シテハ原告若クハ被告ハ抗告ヲ爲スコ
トヲ得

第三章 訴訟手續

第一節 口頭辯論及ヒ準備書面

第二百三條 判決裁判所ニ於ケル訴訟ニ付テノ當事者ノ辯論ハ口頭ナ
リトス但此法律ニ於テ口頭辯論ヲ經ヌシテ裁判ヲ爲スコトヲ定メ
タルトキハ此限ニ在ラス

第二百四條 口頭辯論ハ書面ヲ以テ之ヲ準備ス

第二百五條 準備書面ニハ左ク諸件ヲ掲ク可シ

- 第一 當事者及ヒ其法律上代理人ノ氏名、身分、職業、住所、裁判
所、訴訟物及ヒ附屬書類ノ表示
- 第二 原告若クハ被告カ法廷ニ於テ爲サント欲スル申立
- 第三 申立ノ原因タル事實上ノ關係
- 第四 相手方ノ事實上ノ主張ニ對スル陳述
- 第五 原告若クハ被告カ事實上主張ノ證明又ハ攻撃ノ爲メ用キ
ントスル證據方法及ヒ相手方ノ申出タル證據方法ニ對スル

印刷所ニシテ營業上慣行ノ名稱アルトキ印刷所及名稱ヲ記載セサル者亦前項ニ同シ

第二十六條 政體ヲ變壞シ國憲ヲ紊亂セムトスル又書圖畫ヲ出版シタルトキハ著作者發行者印刷者ヲ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二十七條 風俗ヲ壞亂スル文書書畫

ヲ出版シタルトキハ著作者發行者ヲ十二月以上六月以下ノ輕禁錮又ハ十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十八條 第十六條第十七條第十八條第二十一條ニ觸ル、文書圖畫ヲ出版シタルトキハ著作者、發行者ヲ十日以上二年以下ノ輕禁錮又ハ十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十九條 第二十條

陳述

第六條 原告若クハ被告又ハ其訴訟代理人ノ署名及ヒ捺印

第七條 年月日

第六六條 準備書面ニ於テ提出ス可キ事實ハ、簡明ニ之ヲ記載ス可シ

此他事實上ノ關係ノ説明並ニ法律上ノ討論ハ書面ニ之ヲ掲クルコトヲ得

第七七條 準備書面ニハ訴訟ヲ爲ス可キ資格ニ付テノ證書ノ原本正本又ハ謄本其他總テ原告若クハ被告ノ手中ニ存スル證書ニシテ書面中ニ申立ノ原因トシテ引用シタルモノノ謄本ヲ添附ス可シ

證書ノ一部分ノミヲ要用トスルトキハ其冒頭、事件ニ屬スル部分、終尾、日附署名及ヒ印章ヲ謄寫シタル抄本ヲ添附スルヲ以テ定ル

證書カ既ニ相手方ニ知レタルトキ又ハ大部ナルトキハ其證書ヲ表示シ且相手方ニ之ヲ閱覽セシメント欲スル旨ヲ附記スルヲ以テ足ル

第八八條 當事者ハ準備書面及ヒ其附屬書類並ニ相手方ニ付與スル爲メ必要ナル謄本ヲ裁判所書記課ニ差出ス可シ

第九九條 裁判長ハ口頭辯論ヲ開キ且之ヲ指揮ス

裁判長ハ發言ヲ許シ又其命ニ從ハサル者ニ發言ヲ禁スルヲ得

裁判長ハ事件ニ付キ十分ナル説明ヲ爲サシメ且間斷ナク辯論ノ終了スルコトニ注意ス又必要ナル場合ニ於テハ直チニ辯論續行ノ期日ヲ定ム

裁判所ニ於テ事件ニ付キ十分ナル説明ヲ爲セリト認ムルトキハ裁判長ハ口頭辯論ヲ閉チ及ヒ裁判所判決並ニ決定ヲ言渡ス

第一百十條 口頭辯論ハ當事者ノ申立ヲ爲スニ因リテ始マル

當事者ノ演述ハ事實上及ヒ法律上ノ點ニ於ケル訴訟關係ヲ包括ス

ニ依リ複製頒布ヲ禁セズレタル文書
圖書ヲ複製頒布シタル者罰前項ニ同シ其ノ未ダ複製頒布セサル文書圖書ハ之ヲ没収ス

第二十九條 第二十六條第二十七條第二十八條ノ場合ニ於テ刻版及印本ハ檢事ニ於テ假ニ之ヲ差押フルコトヲ得

第三十條 前條ノ差押ヲ命ズトキハ製本ノ體裁ニヨリ其

可シ

口頭演述ニ換ヘテ書類ヲ授用スルコトヲ許サズ文字上ノ旨趣ヲ要用トスルトキハ其要用ナル部分ニ限り之ヲ朗讀スルコトヲ得

第百十一條 各當事者ハ相手方ノ主張シタル事實ニ對シ陳述ヲ爲ス可シ

明カニ爭ハサル事實ハ原告若クハ被告ノ他ノ陳述ヨリ之ヲ爭ハントスル意思カ顯レサルトキハ各自シテモノト看做ス

不知ノ陳述ハ原告若クハ被告ノ自己ノ行爲ニ非ス又自己ノ實檢シタルモノニ非カル事實ニ限り之ヲ許ス此場合ニ於テ不知ヲ以テ答ヘタル事實ハ爭ヒタルモノト看做ス

第百十二條 裁判長ハ職權上調査ス可キ點ニ關シ相手方ヨリ起ササル疑ノ存スルトキハ其疑ニ付キ注意ヲ爲スコトヲ得
裁判長ハ問ヲ發シテ不明瞭ナル申立ヲ釋明シ主張シタル事實ノ不

ノ差押フベキ部分ト他ノ部分ト分割シ得ルニ於テハ之ヲ分割スルコトアルヘシ

第三十一條 文書圖書ヲ出版シ因テ誹毀ノ訴ヲ受ケタル場合ニ於テ其ノ私行ニ涉ルモノヲ除クノ外裁判所ニ於テ專ラ公益ノ爲ニスルモノト認ムルトキハ被告人ニ事實ノ證明ヲ許スコトヲ得若クハ其ノシタルトキハ其ノ

十分ナル證明ヲ補充シ證據方法ヲ申出テ其他事件ノ關係ヲ定ムルニ必要ナル陳述ヲ爲サシム可シ

陪席判事ハ裁判長ニ告ケテ問ヲ發スルコトヲ得

當事者ハ相手方ニ對シ自ラ問ヲ發スルコトヲ得然レトモ其問ヲ發ス可キ旨ヲ裁判長ニ求ムルコトヲ得

若シ其問ニ對シテ答ヘス又ハ判然答ヘサルトキハ相手方ノ利益ト爲ル可キ答ヲ爲シタルモノト看做スコトヲ得

第百十三條 事件ノ指揮ニ關スル裁判長ノ命又ハ裁判長若クハ陪席判事ノ發シタル問ニ對シ辯論ニ與カル者ヨリ不適法ナリトシテ異議ヲ述ヘタルトキハ裁判所ハ其異議ニ付キ直チニ裁判ヲ爲ス

第百十四條 裁判所ハ事件ノ關係ヲ明瞭ナラシムル爲メ原告若クハ被告ノ自身出頭ヲ命ズルコトヲ得

第百十五條 裁判所ハ原告若クハ被告ノ授用シタル證書ニシテ其手

罪ヲ免ス損害賠償ノ訴ヲ受ケタルトキモ亦同シ

第三十二條 此ノ法律ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ自首、減輕、再犯加重、數罪併發ノ例ヲ用ヒス

第三十三條 此ノ法律ニ關ル公訴ノ時効ハ一年ヲ經過スルニ因テ成就ス

第三十四條 此ノ法律ニ依リ出版スル雜誌ニシテ其ノ記載ノ事項第二條ノ

中ニ存スルモノヲ提出ス可キヲ命スルコトヲ得
裁判所ハ外國語ヲ以テ作りタル證書ニ付テハ其譯書ヲ添附ス可キヲ命スルコトヲ得

第一百十六條 裁判所ハ當事者ノ所持スル訴訟記録ニシテ事件ノ辯論及ヒ裁判ニ關スルモノヲ提出ス可キヲ命スルコトヲ得
第一百七七條 裁判所ハ檢證及ヒ鑑定ヲ命スルコトヲ得

此手續ハ申立ニ因リ命ズル檢證及ヒ鑑定ニ付テノ規定ニ從フ
第一百十八條 裁判所ハ一箇ノ訴ニ於テ爲シタル數箇ノ請求又ハ本訴及ヒ反訴ニ付テノ辯論ヲ分離シテ爲ス可キヲ命スルコトヲ得
第一百十九條 同一ノ請求ニ關シ數箇ノ獨立ナル攻撃及ヒ防禦ノ方法

ヲ提出シタルトキハ裁判所ハ先ツ辯論ヲ其一ニ制限ス可キヲ命スルコトヲ得
第一百二十條 裁判所ハ同一ノ人又ハ別異ノ人ノ數箇ノ訴訟ニシテ其

範圍外ニ涉ルル下キハ内務大臣ハ此ノ法律ニ依リテ出版スルコトヲ差止ムルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ一箇年ヲ經ルニ非サレバ更ニ此ノ法律ニ依リ出版スルコトヲ得ス

第三十五條 文書圖畫ヲ印刷スルトキハ直ニ發賣頒布セスト雖其ノ目的發賣頒布ニ在ルモノハ總テ此ノ法律ニ依ル

裁判所ニ繫屬スルモノノ辯論及ヒ裁判ヲ併合ス可キヲ命スルコトヲ得但其訴訟ノ目的物タル請求ヲ元來一箇ノ訴ニ於テ主張シ得ヘキトキニ限ル

第一百二十一條 裁判所ハ訴訟ノ全部又ハ一分ノ裁判カ他ノ繫屬スル訴訟ニ於テ定マル可キ權利關係ノ成立又ハ不成立ニ繫ルトキハ他ノ訴訟ノ完結ニ至ルマデ辯論ヲ中止ス可シ

第一百二十二條 裁判所ハ民事訴訟中罰ス可キ行爲ノ嫌疑生スルトキハ刑事訴訟手續ノ完結ニ至ルマデ辯論ヲ中止ス可シ但其罰ス可キ行爲カ訴訟ノ裁判ニ影響ヲ及ホストキニ限ル

第一百二十三條 裁判所ハ分離若クハ併合ニ關シ發シタル命ヲ取消ス可トヲ得
第一百二十四條 裁判所ハ閉テタル辯論ノ再開ヲ命スルコトヲ得
第一百二十五條 裁判所ハ辯論ニ與カル者日本語ニ通セサルトキハ通

● 版權法

同法全文在ノ

如シ

法律第十六號

版權法

第一條 凡ソ文書圖書ヲ出版シテ其ノ利益ヲ專有スルノ權ヲ版權ト云ヒ版權所有者ノ承諾ヲ經スシテ其ノ文書圖書ヲ翻刻スルヲ僞版ト云フ

第二條 出版法ニ依リ文書圖書ヲ出版スル者及ヒ出版法又ハ新聞紙法ニ依

事ヲ立會シム但裁判所構成法第五十八條ノ場合ハ此限ニ在ラス

第二百二十六條 裁判所ハ辯論ニ與カル者暨又ハ啞ナルトキ之ニ文字

ヲ以テ理會セシムルコトヲ得サル場合ニ限り通事ヲ立會ハシムル

コトヲ得

第二百二十七條

裁判所ハ相當ノ演述ヲ爲ス能力ノ缺ケタル原告若ク

ハ被告又ハ訴訟代理人若クハ輔佐人ニ其後ノ演述ヲ禁シ且新期日

ヲ定メ辯護士ヲシテ演述セシム可キコトヲ命ス可シ

裁判所ハ裁判所ニ於テ辯論ヲ禁トスル訴訟代理人若クハ輔佐人ヲ

退斥セシムルコトヲ得此場合ニ於テハ新期日ヲ定メ且退斥ノ決定

ヲ原告若クハ被告ニ送達ス可シ

本條ノ規定ニ從ヒ爲シタル命ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得

ス

辯護士ニハ本條ノ規定ヲ適用セズ

リ雜誌ヲ發行スル者ハ總テ此法律ニ依リ其ノ版權ノ保護ヲ受クルコトヲ得

第三條 版權ノ保護

ヲ受ケムト欲スル

者ハ發行前登錄料

トシテ製本六部ノ

定價ヲ添ヘ版權登

録ヲ內務省ニ願出

ヘシ但シ六部ノ定

價合シテ五十錢ニ

滿テサルモノハ五

十錢トシ十圓ヲ超

スルモノハ十圓ト

ス

第二百二十八條 辯論ニ與カル者秩序維持ノ爲メ辯論ノ場所ヨリ退斥

セラレタルトキハ申立ニ因リ本人ノ任意ニ退去シタルト同一ノ方

法ヲ以テ之ヲ取扱フコトヲ得但裁判所構成法第一百條ニ依リ中止

シタル場合ハ此限ニ在ラス

前條ノ場合ニ於テ禁止又ハ退斥ノ命ヲ受ケタル者再ヒ出頭スルト

キハ前項ノ方法ヲ以テ之ヲ取扱フコトヲ得

第二百二十九條 口頭辯論ニ付テハ調書ヲ作ル可シ

調書ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

第一 辯論ノ場所、年月日

第二 判事、裁判所書記及ヒ立會ヒタル檢事若クハ通事ノ氏名

第三 訴訟物及ヒ當事者ノ氏名

第四 出頭シタル當事者、法律上代理人、訴訟代理人、及ヒ輔佐

人ノ氏名若シ原告若クハ被告闕席シタルトキハ其闕席シタル

版權登錄ノ文書圖書ニハ其ノ定價ヲ記載スヘシ版權登錄後定價ヲ増加スルモノハ其ノ未納額ヲ内務省ニ追納スヘシ但シ追納額ハ最初ノ納額ト通算シテ十圓ニ至テ止ム

第四條 官廳ニ於テ文書圖書ヲ出版シ版權ノ登錄ヲ得ムト欲スルトキハ其ノ由テ内務省ニ通知スヘシ

第五條 版權登錄ノ

コト

第五 公ニ辯論ヲ爲シ又ハ公開ヲ禁シタルコト

第二百十條 辯論ノ進行ニ付テハ其要領ノミヲ調書ニ記載ス可シ

調書ニ記載シテ明確ニス可キ諸件ハ左ノ如シ

第一 自白、認諾、抛棄及ヒ和解

第二 明確ニス可キ規定アル申立及ヒ陳述

第三 證人及ヒ鑑定人ノ供述但其供述ハ以前聽カサルモノナルトキ又ハ以前ノ供述ニ異ナルトキニ限ル

第四 檢證ノ結果

第五 書面ニ作り調書ニ添附セサル裁判(判決、決定及ヒ命令)

第六 裁判ノ言渡

附録トシテ調書ニ添附シ且調書ニ附録トシテ表示スル書類ニ於ケル記載ハ調書ニ於ケル記載ニ同シ

文書圖書ニハ其ノ保護年限間ハ版權所有ノ四字ヲ記載スヘシ其ノ記載セサルモノハ登録ノ効ヲ失フモノトス

第六條 内務省ニ於テハ版權登錄簿ヲ備置キ登録ノ願出アル毎ニ之ヲ登録シ登録證書ヲ下付スヘシ

登録ヲ經タル文書圖書ハ内務省ニ於テ時々之ヲ官報ニ揭示スヘシ

第七條 版權ハ著作

第三百二十二條 前條第一號乃至第四號ニ掲ケタル調書ノ部分ハ法廷ニ於テ之ヲ關係人ニ讀聞カセ又ハ閱覽ノ爲メ之ヲ關係人ニ示ス

調書ニハ前項ノ手續ヲ履ミタルコト及ヒ承諾ヲ爲シタルコト又ハ承諾ヲ拒ミタル理由ヲ附記ス可シ

第三百二十二條 調書ニハ裁判長及ヒ裁判所書記署名捺印ス可シ

裁判長差支アルトキハ官等最高陪席判事之ニ代リ署名捺印ス

區裁判所判事差支アルトキハ其裁判所書記ノ署名捺印ヲ以テ足ル

第三百二十三條 受命判事若シハ受託判事又ハ區裁判所判事カ法廷外ニ於テ爲ス審問ニモ亦裁判所書記ヲ立會ハシム

前四條ノ規定ハ右ノ審問調書ニ之ヲ準用ス

第三百二十四條 口頭辯論ノ爲メ規定シタル方式ノ遵守ハ調書ヲ以テノミ之ヲ證スルコトヲ得

第三百二十五條 此法律ニ從ヒ口頭ヲ以テ訴、抗告、申立、申請及ヒ陳

者ニ屬シ著作死
亡後ニ在テハ其ノ
相續者ニ屬スルモ
ノトス講義若ハ演
說ヲ筆記シタルモ
ノ、版權亦同シ但
シ公開ノ席ニ於テ
爲シタル演說ヲ筆
記シテ出版スルモ
ノハ版權侵害ト認
ムルノ限ニ在ラズ
翻譯書ノ版權ハ翻
譯者ニ屬シ翻譯者
死亡後ニ在テハ其
ノ相續者ニ屬スル
モノトス
官廳、學校、會社、

協會等ニ於テ著作
ノ名義ヲ以テ出版
スル文書圖書ノ版
權ハ其ノ官廳、學
校會社、協會等ニ
屬スルモノトス
二種以上ノ著作若
ハ講義演說ノ筆記
ヲ編纂シタル文書
圖書ノ版權ハ編纂
者ニ屬シ編纂者死
亡後ニ在テハ其ノ
相續者ニ屬スルモ
ノトス但シ其ノ原
著作及原筆記ニ別
ニ版權所有ノ者ア
ルトキハ其ノ所有

述ヲ爲シ又ハ證言ヲ拒ム場合ニ於テハ裁判所書記ハ其調書ヲ作ル
可シ

第二節 送達

第三百三十六條 送達ハ裁判所書記職權ヲ以テ之ヲ爲サシム

裁判所書記ハ執達吏ニ送達ノ施行ヲ委任シ又ハ送達ヲ施行ス可キ
地ヲ管轄スル區裁判所ノ書記ニ送達ノ施行ヲ執達吏ニ委任ス可キ
コトヲ囑託ス

裁判所書記ハ郵便ニ依リテモ亦送達ヲ爲サシムルコトヲ得

第二項ノ場合ニ於テハ執達吏又第三項ノ場合ニ於テハ郵便配達人
ヲ以下ニ規定スル送達吏ト爲ス

第三百三十七條 送達ハ其送達ス可キ書類ノ正本又ハ認證シタル謄本
ヲ交付ス可キ規定アルトキハ其正本又ハ其謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ
爲シ其他ノ場合ニ於テハ謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲ス

原告若クハ被告數人ノ代理人ニ爲シ又ハ同一ナル原告若クハ被告
ノ代理人數人中ノ一人ニ爲ス可キ送達ハ謄本又ハ正本ノ一通ヲ交
付スルヲ以テ足ル

第三百三十八條 訴訟能力ヲ有セサル原告若クハ被告ニ對スル送達ハ
其法律上代理人ニ之ヲ爲ス

公又ハ私ノ法人及ヒ其資格ニ於テ訴へ又ハ訴へラルルコトヲ得ル
會社又ハ社團ニ對スル送達ハ其首長又ハ事務擔當者ニ之ヲ爲スヲ
以テ足ル

數人ノ首長若クハ事務擔當者アル場合ニ於テハ送達ハ其一人ニ之
ヲ爲スヲ以テ足ル

第三百二十九條 豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル下士以下ノ軍人軍屬ニ
對スル送達ハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ之ヲ爲ス

第四百十條 囚人ニ對スル送達ハ監獄署ノ首長ニ之ヲ爲ス

主ノ承諾ヲ經タル後ニ非サレハ其ノ部分ニ付本項ヲ適用セズ

書齋ノ版權ハ其ノ原本ノ所有者ニ屬スルモノトス

第八條 版權ハ制限

ヲ附シ若ハ附セスシテ賣渡シ又ハ讓渡スコトヲ得

第九條 版權登錄證

書ヲ毀損又ハ紛失シタルトキハ事由ヲ記シ其ノ再度下付ヲ内務省ニ願出ルコトヲ得但シ手

第四百十一條 送達ハ財産權上ハ訴訟ニ付テハ總理代人ニ之ヲ爲シ

又商業上ヨリ生シタル訴訟ニ付テハ代務人ニ之ヲ爲スヲ以テ原告若クハ被告ノ本人ニ爲シタルト同一ノ効力ヲ有ス

第四百十二條 訴訟代理人アルトキハ送達ハ其代理人委任ノ旨趣ニ依リ原告若クハ被告ノ代理ヲ爲ス權ヲ有スルトキニ限り其代理人ニ之ヲ爲ス

然レトモ原告若クハ被告ノ本人ニ爲シタル送達ハ其訴訟代理人アルトキト雖モ効力ヲ有ス

第四百十三條 受裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有セサル原告若クハ被告ハ其所在地ニ假住所ヲ選定シテ之ヲ届出ツ可シ假住所選定ノ届出ハ通クトモ最近ノ口頭辯論ニ於テ之ヲ爲シ又其前ニ書面ヲ差出ストキハ其書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ前項ノ届出ヲ爲ササルトキハ裁判所書記又ハ其委任ヲ受ケタル吏

敷料トシテ五十錢

ヲ納ムベシ

版權登錄證書ニ誤

謬アリタルトキハ

其ノ理由ヲ記シ其

ノ更正ヲ内務省ニ

願出ルコトヲ得但

シ其ノ誤謬官ニ在

ル場合ノ外ハ手數

料トシテ五十錢ヲ

納ムベシ

第十條 版權保護ノ

年限ハ著作ノ終

身ニ五年ヲ加ヘタ

ルモノトス若版權

登錄ノ月ヨリ死亡

ノ月マテヲ計算シ

員交付ズ可キ書類ヲ原告若クハ被告ノ名宛ニテ郵便ニ付シテ送達

ヲ爲スコトヲ得此送達ハ其書類ノ原告若クハ被告ニ到達スルト否

トヲ問ハス又何時ニ到達スルトヲ問ハス郵便ニ付シタル時ヲ以テ

之ヲ爲シタルモノト看做ス

第四百十四條 送達ハ何レノ地ヲ問ハス送達ヲ受ク可キ人ニ出會ヒ

タル地ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得然レトモ其人カ其地ニ住居又ハ事

務所ヲ有スルトキ其住居又ハ事務所ノ外ニ於テ爲シタル送達ハ其

受取ヲ拒マサリシトキニ限り効力ヲ有ス

第四百十八條第二項ノ場合ニ於テ特別ノ事務所アルトキハ其事務

所ノ外ニ於テ法律上代理人又ハ首長若クハ事務擔當者ニ爲シタル

送達ハ其受取ヲ拒マサリシトキニ限り効力ヲ有ス

第四百十五條 送達ヲ受ク可キ人ニ住居ニ於テ出會ハサルトキハ其

住居ニ於テスル送達ハ成長シタル同居ノ親族又ハ雇人ニ之ヲ爲ス

之ニ五年ヲ加ヘ仍
 三十五年ニ足ラサ
 ル時ハ版權登録ノ
 月ヨリ三十五年ト
 ス數人ノ合著ニ係
 ルモノ、版權年限
 ハ最終ニ死亡シタ
 ル者ニ據リテ計算
 ス
 官廳又ハ學校、會
 社、協會等ニ於テ
 著作ノ名義ヲ以テ
 出版スル文書圖書
 並ニ著作者死亡ノ
 後ニ出版スル文書
 圖書ノ版權年限ハ
 版權登録ノ月ヨリ

コトヲ得
 此規定ニ從ヒ送達ヲ施行スルコトヲ得サルトキハ其送達ハ交付ス
 可キ書類ヲ其地ノ市町村長ニ預置キ送達ノ告知書ヲ作り之ヲ住居
 ノ戸ニ貼附シ且近隣ニ住居スル者二人ニ其旨ヲ口頭ヲ以テ通知シ
 テ之ヲ爲スコトヲ得
 第四百四十六條 住居ノ外ニ事務所ヲ有スル人ニ對スル送達ハ事務所
 ニ於テ之ニ出會ハサルトキハ其事務所ニ在ル營業使用人ニ之ヲ爲
 スコトヲ得此規定ハ辯護士ニモ亦之ヲ適用ス但此場合ニ於ケル送
 達ハ筆生ニモ亦之ヲ爲スコトヲ得
 第四百四十七條 第三百三十八條第二項ノ場合ニ於テ法律上代理人又ハ
 首長若クハ事務擔當者ニ事務所ニ於テ出會ハス又ハ此等ノ者受取
 ニ付キ差支アルトキハ送達ハ事務所ニ在ル他ノ役員又ハ雇人ニ之
 ヲ爲スコトヲ得

計算シ三十五年ト
 ス

第十一條 冊號ヲ逐
 ヒ順次ニ出版スル
 文書圖書ノ版權年
 限ハ每號其ノ出版
 ノ月ヨリ起算ス但
 シ其ノ都度第三條
 ノ手續ヲナスヘシ
 雜誌ノ類ニ在テハ
 內務大臣ノ許可ヲ
 得テ第三條ノ手續
 ヲ省略スルコトヲ
 得
 第十二條 版權ノ保
 護ハ其ノ文書圖書
 ヲ改正増減シ又ハ

第四百四十八條 前二條ノ規定ニ從ヒ送達ヲ施行スルコトヲ得サルト
 キハ第四百四十五條第二項ニ準シ送達ヲ爲スコシ但住居ニ於ケル送
 達ヲ施行スルヲ得サルコトノ明白ナルトキニ限ル
 前項ノ場合ニ於テハ送達告知書ノ貼附ハ事務所又ハ住居ノ戸ニ之
 ヲ爲ス
 第四百四十九條 法律上ノ理由ナクシテ送達ノ受取ヲ拒ムトキハ交付
 ス可キ書類ヲ送達ノ場所ニ差置ク可シ
 第五百十條 日曜日及ヒ一般ノ祝祭日ニハ執達吏ノ爲スコキ送達ハ
 裁判官ノ許可ヲ得ルトキニ限り之ヲ施行スルコトヲ得
 前項ノ規定ハ郵便ニ付シテ爲ス送達ヲ除ク外ハ夜間ニ爲スコキ送
 達ニ之ヲ適用ス夜間トハ日没ヨリ日出マデノ時間ヲ謂フ
 右ノ許可ハ受訴裁判所ノ裁判長又ハ送達ヲ爲スコキ地ヲ管轄スル
 區裁判所ノ判事之ヲ與ヘ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ完結ス可

註解、附録繪畫等ヲ加ヘ又ハ製本ノ式ヲ改メ又ハ冊數ヲ分合スルカ爲變更スルコトナカルヘシ

版權登錄ヲ得タル文書圖書ニ挿入シタル寫眞ニシテ特ニ其ノ文書圖書ノ爲ニ寫シタルモノハ其ノ文書圖書ト共ニ版權ノ保護ヲ受クルモノトス

第十三條 版權年限ヲ經過スルモ版權所有者ノ願出ニ依

キ事件ニ在テハ其判事之ヲ與フ許可ノ命令ハ認證シタル謄本ヲ以テ送達ノ際之ヲ交付ス可シ

本條ノ規定ヲ遵守セサル送達ハ之ヲ受取リタルトキニ限り効力ヲ有ス

第一百五十一條 送達ニ付テハ之ヲ施行スル吏員ハ送達ノ場所、年月日時、方法及ヒ受取人ノ受取證並ニ送達吏ノ署名捺印ヲ具備スル證書ヲ作ルコトヲ要ス

受取人受取ヲ拒ミ若クハ受取證ヲ出タスコトナ拒ミタルトキ又ハ受取證ヲ作ルコト能ハサル旨ヲ述フルトキハ之ヲ送達證書ニ記載ス可シ

第一百四十三條 第三項ノ場合ニ於テハ郵便ニ付シタル吏員ノ報告書ヲ以テ送達ノ證ト爲スニ足ル

第一百五十二條 外國ニ在ル本邦ノ公使及ヒ公使館ノ官吏並ニ其家

リ内務大臣ニ於テ必要ト見做ストキハ仍十年間版權保護ノ期限ヲ延スコトアルヘシ

第十四條 文書圖書ノ版權年限中所有者死亡シ他人ニ於テ其ノ版權相續者ナキコトヲ確信シ之ヲ出版セント欲スルトキハ其ノ由チ官報及東京ノ四社以上ノ重ナル新聞紙並ニ其ノ所有者居住地ノ新聞紙ニ七日以上廣告シ

族、從者ニ對スル送達ハ外務大臣ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第一百五十三條 前條ノ場合ヲ除ク外外國ニ於テ施行ス可キ送達ハ外國ノ管轄官廳又ハ外國ニ駐在スル帝國ノ公使又ハ領事ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第一百五十四條 出陣ノ軍隊又ハ役務ニ服シタル軍艦ノ乗組員ニ屬スル人ニ對スル送達ハ上班司令官廳ニ囑託シテ之ヲ爲スコトヲ得

第一百五十五條 前三條ノ場合ニ於テ必要ナル囑託書ハ受訴裁判所ノ裁判長之ヲ發ス

送達ハ囑託ヲ受ケタル官廳又ハ官吏ノ送達施行濟ノ證書ヲ以テ之ヲ證ス

第一百五十六條 原告若クハ被告ノ現在地知レサルトキ又ハ外國ニ於テ爲ス可キ送達ニ付テハ其規定ニ從フコト能ハズ若クハ之ニ從フモ其效ナキコトヲ豫知スルトキハ其送達ハ公ノ告示ヲ以テ之ヲ爲

最終ノ廣告日ヨリ
六箇月内ニ版權相
續者ノ出テサルト
キハ内務大臣ノ許
可ヲ得テ之ヲ出版
シ版權ヲ繼續スル
コトヲ得

著作者又ハ相續者
ヲ知ルヘカラサル
著作ニシテ未ダ出
版セサルモノ亦前
項ノ手續ニ依リ出
版シ版權ノ保護ヲ
受クルコトヲ得

第十五條 新聞紙ニ
於テ二號以上ニ涉
リ記載シタル論説

スコトヲ得

第五百十七條 公示送達ハ原告若クハ被告ノ申立ニ因リ裁判所ノ命
ヲ以テ裁判所書記之ヲ取扱フ

此送達ハ交付ス可キ書類ヲ裁判所ノ掲示板ニ貼附シテ之ヲ爲ス判
決及ヒ決定ニ在テハ其裁判ノ部分ノミヲ貼附ス可シ

右ノ外裁判所ハ送達ス可キ書類ノ抄本ヲ一箇又ハ數箇ノ新聞紙ニ
一回又ハ數回掲載ス可キヲ命スルコトヲ得其抄本ニハ裁判所、當

事者並ニ訴訟物及ヒ送達ス可キ書類ノ要旨ヲ掲グルコトヲ要ス

公示送達ノ申請

原告人 何府何市何町何番地族籍職業
何縣何郡何村

被告人 何府何市何町何番地族籍職業
何縣何郡何村

右當事者間ノ何年(何)號何々請求ノ訴訟受理相成候處被告人ノ現在

地知レザルニ付(外國ニ於テ爲ス送達ノ規定ニ從フ能ハサルハ又ハ
其効ナキヲ豫知スルル)民事第五百十七條ニ依リ公示送達相成度
此段申請仕候也

年月日 原告人 何 某印
何々裁判所 判事 何 某段

記事又ハ小説及ニ
號以上ニ涉ラスト
雖特ニ一欄ヲ設ケ
冒頭ニ禁轉載ト記
シタルモノハ其ノ
編輯者ノ承諾ヲ得
ルニ非サレハ刊行
ノ月ヨリ二年内ニ
之ヲ他ノ新聞紙若
ハ雜誌ニ轉載シ又
ハ之ヲ編纂シテ出
版スルコトヲ得ス
其ノ二年ヲ經ルト
雖己ニ一部ノ書ト
爲シ版權登錄ヲ經
タルモノハ原文ニ
就テ更ニ編纂スル

第五百十八條 公示送達ハ書類ノ貼附ヨリ十四日ヲ經過シタル日ヲ
以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス然レトモ裁判所ハ公示送達ヲ命ス
ルニ際シ此ヨリ長キ期間ヲ必要トスルトキハ相當ナル期間ヲ定ム
ルコトヲ得

同一ノ事件ニ付キ同一ノ原告若クハ被告ニ對シテ爲ス其後ノ公示
送達ハ貼附ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス

第三節 期日及ヒ期間
第五百十九條 期日ハ裁判長日及ヒ時ヲ以テ之ヲ定ム

第六十條 期日ハ已ムヲ得サル場合ニ限リ日曜日及ヒ一般ノ祝祭

日ニ之ヲ定ムルコトヲ得

第六十一條 期日ニ付テノ呼出ハ裁判長ノ命ニ從ヒ裁判所書記正

本ノ送達ヲ以テ之ヲ爲ス但在廷シタル者ニ期日ヲ定メ出頭ヲ命シ

タルトキハ之ヲ送達スルコトヲ要セス

第六十二條 期日ハ裁判所内ニ於テ之ヲ開ク但臨檢又ハ裁判所ニ

出頭スルニ差支アル人ノ審問其他裁判所内ニ於テ爲スコトヲ得サ

ル行爲ヲ要ストキハ此限ニ在ラス

第六十三條 期日ハ事件ノ呼上ヲ以テ始マル

原告若クハ被告カ期日ノ終ニ至ルマテ辯論ヲ爲ササルトキハ期日

ヲ怠リタルモノト看做ス

第六十四條 裁判所又ハ裁判長ノ定ムル期間ノ進行ハ期間ヲ定メ

タル書類ノ送達ヲ以テ始マリ又其送達ヲ要セサル場合ニ於テハ期

コトヲ得ス

第十六條 版權所有

ノ文書圖書ヲ僞版

シタル者ハ其ノ版

權所有者ニ對シ損

害賠償ノ責ニ任ス

ヘシ其ノ寫本ヲ發

賣シテ版權ヲ犯ス

者亦同シ

第十七條 僞版ノ訴

アリタルトキ裁判

官ハ出訴者ノ情願

アルニ於テハ假ニ

其ノ發賣頒布ヲ差

止ムルコトヲ得但

シ審理ノ末僞版ニ

非スト判決セラレ

間ノ言渡ヲ以テ始マル但期間指定ノ際此ヨリ遅キ起期ヲ定メタル

トキハ此限ニ在ラス

第六十五條 期間ヲ計算スルニ時ヲ以テスルモノハ即時ヨリ起算

シ又日ヲ以テスルモノハ初日ヲ算入セス

第六十六條 一日ノ期間ハ二十四時ヲシ一個月ノ期間ハ三十日

ヲシ一年ノ期間ハ曆ニ從フ

期間ノ終カ日曜日又ハ一般ノ祝祭日ニ當ルトキハ其日ヲ期間ニ算

入セス

第六十七條 法律上ノ期間ハ裁判所ノ所在地ニ住居セサル原告若

クハ被告ノ爲メ其住居地ト裁判所所在地トノ距離ノ割合ニ應シ海

陸路八里毎ニ一日ヲ伸長ス八里以外ノ端數ニ里ヲ超スルトキモ亦

同シ

裁判所ハ外國又ハ島嶼ニ於テ住居ヲ有スル原告若クハ被告ノ爲メ

第十九條 版權所有

者ノ承諾ヲ經スシ

テ版權所有ノ文書

圖書ヲ翻譯シ増減

シ註解、附錄、繪畫

等ヲ加ヘ若ハ其ノ

未タ完結セサル部

分ヲ續成シテ出版

スル者及第十五條

ニ違フ者ハ偽版ヲ以テ論ス他人ノ講義又ハ公開ナラサル席ニ於テ爲シタル他人ノ演説ヲ筆記シ其ノ許諾ヲ經スシテ出版スル者亦前項ニ同シ

第二十條 翻譯書ノ版權ハ其ノ翻譯者ニ屬スト雖其ノ原書ニ就キ別ニ翻譯スル者ニ向ヒ偽版ノ訴ヲ爲スコトヲ得ズ但シ其既ニ出版スル所ノ翻譯ヲ剽竊シタルコトヲ

特ニ附加期間ヲ定ムルコトヲ得

第六十八條 期間ノ進行ハ裁判所ノ休暇ニ依リテ停止ス其期間ノ殘餘ノ部分ハ休暇ノ終ヲ以テ其進行ヲ始ム期間ノ初カ休暇ニ當ルトキハ其期間ノ進行ハ休暇ノ終ヲ以テ始マル

前項ノ規定ハ不變期間及ヒ休暇事件ノ期間ニハ之ヲ適用セズ不變期間ハ此法律ニ於テ不變期間トシテ掲ケタル期間ニ限ル
休暇事件トハ裁判所構成法第二百二十八條第二百二十九條ニ掲ケタル事件ヲ謂フ

第六十九條 期日ノ變更、辯論ノ延期、辯論續行ノ期日ノ指定ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得但申立ニ因レル期日ノ變更ハ合意ノ場合ヲ除ク外顯著ナル理由アルトキニ限り之ヲ許ス
第七十條 期間ハ不變期間ヲ除ク外當事者ノ合意ノ申立ニ因リ之ヲ短縮シ又ハ伸長スルコトヲ得

證明スルモノハ此ノ限ニ在ラス
第二十一條 世人ヲ欺瞞スル爲故ラニ版權所有ノ文書圖書ノ題號ヲ冒シ或ハ模擬シ又ハ氏名社號、屋號、等ノ類似シタルモノヲ湊合シテ他人ノ版權ヲ妨害スル者ハ偽版ヲ以テ論ス

第二十二條 著作者又ハ其ノ相續者ノ承諾ヲ經スシテ未ダ出版セサル文書圖書ヲ出版シ又ハ

裁判所又ハ裁判長ノ定ムル期間及ヒ法律上ノ期間ハ合意ナキモ申立ニ因リ顯著ナル理由アルトキハ之ヲ短縮シ又ハ伸長スルコトヲ得然レトモ法律上ノ期間ノ短縮又ハ伸長ハ此法律ニ特定シタル場合ニ限り之ヲ許ス

伸長ニ係ル新期間ハ前期間ノ満了ヨリ之ヲ起算ス

第七十一條 期日ノ變更又ハ期間ノ短縮若クハ伸長ニ付テノ申請ノ理由ハ之ヲ説明ス可シ其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得申請ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得
同一期日ノ再度ノ變更又ハ同一期間ノ再度ノ伸長ハ相手方ノ承諾書ヲ提出セサルトキハ相手方ヲ審訊シタル後ニ限り之ヲ許スコトヲ得又相手方カ異議ヲ述フルトキハ顯著ナル差支ノ理由及ヒ其差支ヲ除去スルコトノ特別ナル困難ヲ生シタルコトヲ論スルトキニ限り之ヲ許スコトヲ得訴訟代理人ノ差支ニ原因スル期日ノ再度ノ

非賣ノ文書圖書ヲ
翻刻スルモノ亦僞
版ヲ以テ論ス所有
者ノ承諾ヲ經スシ
テ書畫ヲ出版スル
モ亦同シ

第二十三條 文書圖
畫ヲ寫真ト爲シ因
テ其ノ版權ヲ犯ス
モノハ僞版ヲ以テ
論ス

第二十四條 內國ニ
テ版權所有ノ文書
圖書ヲ外國ニ於テ
僞版シタルモノヲ
輸入販賣スルモノ
ハ僞版ヲ以テ論ス

變更又ハ期間ノ再度ノ伸長ハ相手方ノ承諾アルニ非サレバ之ヲ許
サズ
期日ノ變更又ハ期間ノ伸長ニ付テハ申請ヲ却下スル裁判ニ對シテ
ハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

期日變更ノ申請

原告人何某被告何某間ノ何年(何)第何號何々事件ニ付本日口頭辯論
ノ處(別紙醫師診察書ノ如ク病氣(事故)(證據物取調)(証人ニ差支)ニ
テ出頭難致候間口頭辯論ノ期日來ル何月何日何時ニ變更相成度此
段申請仕候也

年月日 原告人 何 某印
被告 何 某印

何々裁判所
判事 何 某段

期間短縮ノ申請

第二十五條 僞版ノ
訴アリテ其ノ僞版
タルヤ否ヲ決シ難
キトキハ其ノ訴ヲ
受ケタル裁判所ニ
於テ三名以上ノ鑑
定者ヲ選ヒ之ヲ鑑
定セシムルコトヲ
ルヘシ

第二十六條 僞版ニ
關ル損害賠償ノ時
効ハ其ノ原書ノ版
權年限終ルノ後三
年ヲ經過スルニ因
テ成就ス

第二十七條 僞版者
及ヒ情ヲ知ルノ印

原告人何某被告何某間ノ何年(何)第何號何々事件ニ付何月何日ヨ
リ何日間内ニ何々證據物差出ス可キ處事故有之容易ニ難差出候間
何月何日口頭辯論ノ處如此長期日ニテハ其間ニ於テ被告人ノ奸策
ヲ施スモ雄計ニ付更ニ何日間(端緒)相成度此段申請仕候也
年月日 原告人 何 某印

何々裁判所
判事 何 某段

第七十二條 本節ニ於テ裁判所及ヒ裁判長ニ與ヘタル權ハ受命判
事又ハ受託判事モ亦其定ム可キ期日及ヒ期間ニ付キ之ヲ行フコト
ヲ得

第四節 懈怠ノ結果及ヒ原狀回復

第七十三條 訴訟行為ヲ怠リタル原告若シハ被告ハ其訴訟行為ヲ
爲ス權利ヲ失フ但此法律ニ於テ追完ヲ許ストキハ此限ニ在ラス
法律上懈怠ノ結果ハ當然生スルモノト爲ス但此法律ニ於テ失權ヲ爲

刷者、販賣者ハ一日以上一年以下ノ重禁錮若ハ三十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス但シ被害者ノ告訴ヲ待テ其ノ罪ヲ論ス
 偽版ニ係ル刻版及印本ハ其ノ何人ノ手ニ在ルヲ問ハズ之ヲ沒收シ其ノ既ニ販賣シタルモノニ其ノ賣得金ヲ沒收シテ併セテ被害者ニ下付ス
 第二十八條 版權ヲ所有セサル文書圖

サシムルコトニ付キ相手方ノ申立ヲ要スルトキハ此限ニ在ラス
 第七十四條 天災其他避ク可カラサル事變ノ爲ニ不續期間ヲ遵守スルヲ得サル原告若クハ被告ニハ申立ニ因リ原狀回復ヲ許ス
 原告若クハ被告カ故障期間ヲ懈怠シタルトキハ其過失ニ非スシテ
 闕席判決ノ送達ヲ知ラサリシ場合ニ於テモ亦之ニ原狀回復ヲ許ス
 第七十五條 原狀回復ハ十四日ノ期間内ニ之ヲ申立ツルコトヲ要ス
 右期間ハ障礙ノ止ミタル日ヲ以テ始マル此期間ハ當事者ノ合意ニ因リ之ヲ伸長スルコトヲ得ス
 懈怠シタル不變期間ノ終ヨリ起算シテ一ノ年ノ滿了後ハ原狀回復ヲ申立ツルコトヲ得ス
 第七十六條 原狀回復ハ追完スル訴訟行爲ニ付キ裁判ヲ爲ス權アル裁判所ニ書面ヲ差出シテ之ヲ申立ツ可シ

畫ト雖之ヲ改竄シテ著作者ノ意ヲ害シ又ハ其ノ表題ヲ改メ又ハ著作者ノ氏名ヲ隱匿シ又ハ他人ノ著作ト詐稱シテ翻刻スルヲ得ヌ違フ者ハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス但シ著作者又ハ發行者ノ告訴ヲ待テ其ノ罪ヲ論ス
 第二十九條 第三條ノ手續ヲ爲サスシテ版權所有ノ字ヲ記載シタル文書圖

此書面ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス
 第一 原狀回復ノ原因タル事實
 第二 原狀回復ノ疏明方法
 第三 懈怠シタル訴訟行爲ノ追完
 即時抗告ノ提出ヲ懈怠シタルトキハ原狀回復ノ申立ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ抗告裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得
 原狀回復申立
 申立人 何府何市何町何番地族籍職業 某
 何縣何郡何村何 何
 被申立人 何府何市何町何番地族籍職業 某
 何縣何郡何村何 何
 事實 右當事間之何年(何)第何號何々事件何年何月何日(終局判決又ハ欠席

第三條 他人ノ書畫ヲ臨寫シ若クハ摹寫シ又ハ他人ノ詩文歌ヲ書寫シテ出版スル者ハ其紙面中ニ臨寫者シハ摹寫者誰又ハ書者誰ト記載スヘシ

第四條 出版法第十條第一項但書ニ依リ許可ヲ得タル雜誌ハ製本中見易キ場所ニ於テ(何年月日内務省許可)ト記載スヘシ但明治二十年十二月勅令第七十六號出版條

承繼人期日ニ出頭セサルトキハ申立ニ因リ相手方ノ主張シタル承繼ヲ自白シタルモノト看做シ且裁判所ハ闕席判決ヲ以テ承繼人訴訟手續ヲ受繼キタリト言渡ス又本案ノ辯論ハ故障期間ノ滿了後始メテ之ヲ爲ス又其期間内ニ故障ヲ申立テタルトキハ其完結後始メテ之ヲ爲ス

訴訟手續受繼ノ申立

原告人 何府何市何町何番地族籍職業 何

被告人 何府何市何町何番地族籍職業 何

右當事者間ノ何年(何)第何號何々事件受理后何年何月何日(原告)(被告)何某死亡シタルニ依リ受繼人カ訴訟手續ヲ受繼マテ該手續中斷相成候處亡何某ノ家督相繼ハ何年何月何日何某カ承繼シタルニ今ニ訴訟ノ手續ヲ爲ササルニ付其受繼及本案辯論ノ爲メ期日ヲ定メ相繼人何某ヲ御呼出相成度此段申請仕候也

年月日 申立人 何 某印

例第九條但書ニ依リ許可ヲ得タルモノ亦同シ

第五條 版權法第十一條第二項ニ依リ版權登錄願ノ手續ヲ省略セント欲スル者ハ豫メ大約一箇年内出版ノ分隨意取束テ版權登錄ヲ願出スルコトヲ得

第六條 外國ノ圖書ヲ翻譯シテ出版スル者ハ原書ノ題名著者ノ氏名出版ノ地名及年號ヲ原字

何裁判所 判事 何 某段

第七十九條 原告若クハ被告ノ財産ニ付キ破産ノ開始シタル場合ニ於テ訴訟手續カ破産財團ニ關スルトキハ破産ニ付テノ規定ニ從ヒ手續ヲ受繼キ又ハ破産手續ヲ解止スルマテ之中斷ス

第八十條 原告若クハ被告カ訴訟能力ヲ失ヒ又ハ其法律上代理人カ死亡シ又ハ其代理權カ原告若クハ被告ノ訴訟能力ヲ得ル前ニ消滅シタルトキハ訴訟手續ハ法律上代理人又ハ新法律上代理人カ其任設テ相手方ニ通知シ又ハ相手方カ訴訟手續ヲ續行セントスルコトヲ其代理人ニ通知スルマテ之中斷ス

法律上代理人任設ノ通知

原告人 何府何市何町何番地族籍職業 何

被告人 何府何市何町何番地族籍職業 何

チ以テ認メ届書ニ添付ス可シ

第七條 出版届ハ第一書式再(三)版届ハ第二書式版権登

録願ハ第三書式雜誌版権登録願ハ第四書式寫真版権登

録願ハ第五書式版權登録證再度下付願ハ第六書式ニ依

ル可シ

第八條 出版法及版權法ニ於テ他人ノ許諾ヲ得ヘキモノ

ニシテ其許諾ヲ得テ出版届出又ハ版

ル可シ

右當事者間ノ何年(何)何號何々事件何々裁判所ニ繫屬中ノ處何年何月何日法律上代理人何某死亡又ハ原被能力ヲ失ヒタルニヨリテ訴訟手續中斷相成候處今度何某ヲ以テ法律上代理人ニ任設候間此段及通知候也

年月日

右原告

某印

法律上代理人

某印

何々裁判所

判事 何 某段

訴訟手續續行ノ通知

原告人

何府何市何町何番地族籍職業

被告人

何

何府何市何町何番地族籍職業

何

右當事者間ノ何年(何)第何號何々事件何々裁判所ニ繫屬中(原被告能

權登録願出ルトキ

ハ其旨ヲ届書又ハ願書ニ記スヘシ

非賣ノ文書圖書ヲ

出版スル者ハ其届

書並製本中ニ非賣

品ト記スヘシ

第九條 専ラ學術技

藝統計廣告ノ類ヲ

記載スル雜誌ニシ

テ出版法第二條但

書ニ從ヒ同法ニ依

ラント欲スル者ハ

第七書式同法第十

條第一項ノ但書ニ

依リ届出ノ手續ヲ

省略セント欲スル

力ヲ失ヒ又ハ法律上代理人死亡又ハ代理權ガ原被告ノ能力ヲ得ル前ニ消滅シタルヲ以テ訴訟手續中斷ノ處今般法律上代理人任設ノ通知ニ依リ訴訟手續ヲ續行致度此段及通知候也

年月日

右原告人

某印

何々裁判所 判事 何 某段

第百八十一條 原告若クハ被告ノ死亡ニ因リ訴訟手續ヲ中斷スル場

合ニ於ケル訴訟手續ノ受繼ニ關シ遺產ニ付キ管理人ヲ任設スルト

キハ前條ノ規定又遺產ニ付キ破産ヲ開始スルトキハ第百七十九條

ノ規定ヲ適用ス

第百八十二條 戰爭其他ノ事故ニ因リ裁判所ノ行務ヲ止メタルトキ

ハ此事情ノ繼續間訴訟手續ヲ中斷ス

第百八十三條 訴訟代理人ヲ以テ訴訟ヲ爲ス場合ニ於テ原告若クハ

被告カ死亡シ又ハ訴訟能力ヲ失ヒ又ハ法律上代理人カ死亡シ又ハ

第五節 訴訟手續ノ中斷及中止

者ハ第八書式ニ依
ル可シ

第十條 版權登錄願

ヲ許可スルトキハ

第十書式寫真版權

登錄願ヲ許可スル

トキハ第十一書式

ノ證書ヲ下付ス可

シ但毀損紛失等ニ

依リ再度下付スル

證書ハ第十一書式

ニ係ル

第十一條 此省令ハ

出版法版權法施行

ノ日ヨリ之ヲ施行

シ明治二十一年一

月 內務省令第一號明

其代理權ヲ消滅スルトキハ委任消滅ノ通知ニ因リ訴訟手續ヲ中斷

ス

訴訟手續ノ受繼ニ付テハ第七十八條第百八十條第百八十一條ノ

規定ニ從フ

第百八十四條

原告若シハ被告カ戰時兵役ニ服スルトキ又ハ官廳ノ

布令、戰爭其他ノ事變ニ因リ受訴裁判所ト交通ノ絶エタル地ニ在

ルトキハ受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ障礙ノ消除スル

マテ訴訟手續ノ中止ヲ命スルコト得

第百八十五條

訴訟手續中止ノ申請ハ受訴裁判所ニ之ヲ提出ス其申

請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

訴訟手續中止ノ申請

何府何市何町何番地族籍職業
原告人 何

某

何府何市何町何番地族籍職業
被告人 何

某

右當事者間ノ何年(何)第何號何々請求事件審理中ノ被告カ戰時兵役

ニ服シ又ハ檢疫條例又ハ戰時暴動ニテ被告ノ住所地ト當裁判所ノ

間交通斷斷候間障礙ノ消除相成候マテ訴訟手續中止相成度此段申

請仕候也

年月日 原告人 何

某印

何々裁判所

判事 何 某段

勅令第八十四號

特許條例

第一條 新規有益ナ

ル工術、機械、製造品

及合成物ヲ發明シ又

ハ工術、機械、製造品

及合成物ノ新規有益

ナル改良ヲ發明シタ

ル者ハ此條例ニ依リ

特許ヲ受クルコトヲ

第百八十六條 訴訟手續ノ中斷及中止ハ各期間ノ進行ヲ止メ及ヒ中

斷又ハ中止ノ終リタル後更ニ全期間ノ進行ヲ始ムル效力ヲ有ス

中斷及ヒ中止ノ間本案ニ付キ爲シタル原告者クハ被告ノ訴訟行爲

ハ他ノ一方ニ對シ其效力ナシ

口頭辯論ノ終結後ニ生シタル中斷ハ其辯論ニ基キテ爲スコキ裁判

ノ言渡ヲ妨グルコト無シ

得

特許トハ發明者ニ
他人ヲシテ其承諾
ヲ經スシテ前項ノ
發明ヲ製作、使用
又ハ販賣セシメサ
ル特權ヲ許スコト
ヲ謂フ

第二條 左ニ掲グル
發明ハ特許ヲ受クル
コトヲ得ザルモノト
ス

- 一 飯食物嗜好物
- 二 醫藥並其調合

法

三 特許出願以前
公ニ用ヒラレ

第百八十七條 中斷シ又ハ中止シタル訴訟手續ノ受繼及ヒ本節ニ定
メタル通知ニ原告若クハ被告ヨリ其書面ヲ受訴裁判所ニ差出シ裁
判所ハ相手方ニ之ヲ送達ス可シ

第百八十八條 當事者ハ訴訟手續ヲ休止ス可キ合意ヲ爲スコトヲ得
其合意ハ不變期間ノ進行ニ影響ヲ及ホサス

口頭辯論ノ期日ニ於テ當事者雙方出頭セサルトキハ訴訟手續ハ其
一方ヨリ更ニ口頭辯論ノ期日ヲ定ム可キコトヲ申立ツルマテ之ヲ
休止ス

一個年內ニ前項ノ申立ヲ爲ササルトキハ本訴及ヒ反訴ヲ取下ケタ
ルモノト看做ス

訴訟手續ノ休止申立

原告人何某ヨリ被告人何某ニ係ル何年(何)何月何日何事件ハ當事者
双方ノ合意ヲ以テ一時訴訟手續ヲ休止致候間此段連署ヲ以テ及申
立候也

年月日

原告人

何

某印

被告人

何

某印

何々裁判所

判事

何

某印

タルモノ但試
驗ノ爲メ公ニ
知ラレタルト
三年以内ノモ
ノハ此限ニア
ラズ

第三條 特許ヲ受ケ
シト欲スル者ハ一發
明毎ニ發明ノ明細書
及必要ノ圖面ヲ添へ
農商務大臣ニ出願ス
ヘシ但其願書明細書
及圖面ハ特許局ニ差
出スベシ

第四條 特許ヲ出願
スル者アルトキハ特
許局長ハ特許局審査

第百八十九條 本節ノ規定其他此法律ノ規定ニ基キ訴訟手續ノ中止
ヲ命スル裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得又其中止ヲ拒ム裁判
ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二編 第一審ノ訴訟手續
第一章 地方裁判所ノ訴訟手續

第一節 判決前ノ訴訟手續

第百九十條 訴ノ提起ハ訴狀ヲ裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス
此訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

- 第一 當事者及ヒ裁判所ノ表示
- 第二 起シタル請求ノ一定ノ目的物及ヒ其請求ノ一定ノ原因

官ヲシテ其發明ヲ審
 査セシメ特許ヲ與フ
 ヘシト査定シタルモ
 ノハ農商務大臣ノ認
 可ヲ經テ特許原簿ニ
 登録シ特許證下付ノ
 手續ヲ爲スヘシ

第五條 特許證ハ農
 商務大臣之ニ署名シ
 特許局長之ニ副署シ
 明細書及必要ノ圖面
 ヲ添ヘ之ヲ下付スル
 者トス

第六條 特許ノ年限
 ハ五年十年及十五年
 ノ三種ト爲シ原簿登
 録ノ日ヨリ起算ス

第三 一定ノ申立

此他訴狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒ之ヲ作り且裁判所
 ノ管轄カ訴訟物ノ價額ニ依リ定マル場合ニ於テ訴訟物カ一定ノ金
 額ニ非サルトキハ其價額ヲ掲ク可シ

訴 狀

原告 何府何市何町何番地族籍職業
 何

被告 何

代理人 何

請求ノ目的

一何々(例ヘバ)元金何百圓何十錢)
 一何々(例ヘバ)利子金何何十錢)
 合計何々(例ヘバ)金何百圓何十錢)

第七條 公益ノ爲メ
 普及ヲ要スルモノ又
 ハ軍事上必要ナルモ
 ノ若クハ秘密ヲ要ス
 ルモノト認メタル發
 明ニハ農商務大臣ハ
 特許ニ制限ヲ附シ若
 シハ特許ヲ與ヘス又
 ハ既ニ與ヘタル特許
 ナ制限シ若クハ之ヲ
 取消スコトアルヘシ

前項ノ場合ニ於テ
 農商務大臣ハ相當
 ト認ムル報酬ヲ發
 明者又ハ特許證主
 ニ與フルモノトス

第八條 他人ノ特許

請求ノ原因

何々(例ヘバ)何年何月日被告ニ金何圓ヲ貸與シ其利子ハ百圓ニ付月
 何錢返濟期限ハ何年何月何日ト定メタリ然ルニ被告ハ返濟期日ヲ
 經過スルモ其義務ヲ盡サズ)

一定ノ申立

右次第ナルヲ以テ被告ハ原告ニ對シ何々(例ヘバ)金何百圓ヲ返濟シ
 且ツ訴訟費用ヲ負担スベシトノ判決相成度候也)

證據方法

何々(例ヘバ)貸金証書)

附屬書類ノ表示

- 一 訴訟代理委任狀
- 一 法律上代理受權ノ証
- 一 證書ノ原本若クハ抄本

年月日

(右原告) 何

何

某印

何々裁判所

判事 何

某段

第九十二條 同一ノ被告ニ對スル原告ノ請求數箇アル場合ニ於テ

發明ヲ改良シ其改良發明ノ特許ヲ受ケント欲スル者ハ其特許證主ニ協議シ原發明ニ改良發明ヲ合セテ使用スルノ承諾ヲ經第三條ニ依リ出願スヘシ

特許證主其承諾ヲ拒ミタルトキハ其旨ヲ願書ニ記載シテ出願スルコトヲ得此場合ニ於テハ農商務大臣ハ原發明ヲ改良發明ニ合セテ使用スルノ特許ヲ改良發明者ニ

與フルコトヲ得改良發明者前項ノ特許ヲ受ケタルトキハ原特許證主ニ農商務大臣ノ相當ト認ムル報酬ヲ與フル義務アルモノトス
第九條 特許ヲ受ケタル者又ハ之ヲ受ケントスル者死亡シタルトキハ其權利ハ相續者ニ屬スルモノトス
第十條 特許ヲ受ケタル發明ト雖トモ左ニ掲クルモノハ其特

其各請求ニ付キ受訴裁判所カ管轄權ヲ有シ且法律ニ於テ同一種類ヲ得訴訟手續ヲ許ストキハ原告ハ其請求ヲ一箇ノ訴ニ併合スルコトヲ得但民法ノ規定ニ反スルトキハ此限ニ在ラス

第九十二條 訴狀カ第九十條第一號乃至第三號ノ規定ニ適セサルトキハ相當ノ期間ヲ定メ裁判長ノ命令ヲ以テ其期間内ニ欠缺ヲ補正ス可キコトヲ命ス若シ原告此命ニ從ハサルトキハ其期間ノ滿了後訴狀ヲ差戻ス可シ

此差戻ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得
第九十三條 訴狀カ第九十條第一號乃至第三號ノ規定ニ適スルトキハ口頭辯論ノ期日ヲ定メテ之ヲ被告ニ送達ス可シ

第九十四條 訴狀ノ送達ト口頭辯論ノ期日トノ間ニハ少ナクモ二十日ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス
外國ニ於テ送達ヲ施行ス可キトキハ裁判長相當ノ時間ヲ定ム

第九十五條 訴訟物ノ權利拘束ハ訴狀ノ送達ニ因リテ生ス權利拘束ハ左ノ效力ヲ有ス

- 第一 權利拘束ノ繼續中原告若クハ被告ヨリ同一ノ訴訟物ニ付キ他ノ裁判所ニ於テ本訴又ハ反訴ヲ以テ請求ヲ爲シタルトキハ相手方ハ權利拘束ノ抗辯ヲ爲スコトヲ得
 - 第二 受訴裁判所ノ管轄ハ訴訟物ノ價額ノ増減住所ノ變更其他管轄ヲ定ムル事情ノ變更ニ因リテ變換スルコト無シ
 - 第三 原告ハ訴ノ原因ヲ變更スル權利ナシ但變更シタル訴ニ對シ本案ノ口頭辯論前被告カ異議ヲ述ヘサルトキハ此限ニ在ラス
- 第九十六條 原告カ訴ノ原因ヲ變更セシテ左ノ諸件ヲ爲ストキハ被告ハ異議ヲ述フルコトヲ得ス
- 第一 事實上又ハ法律上ノ申述ヲ補充シ又ハ更正スルコト

許テ無効トス

一 新規又ハ有益

ナラザリシコ

トヲ發見セラ

レタルモノ

二 第二條ニ該ル

コトヲ發見セ

ラレタルモノ

三 發明ヲ實施ス

ルニ必要ナル

事實ヲ故意ニ

明細書ニ記載

セザリシコト

ヲ發見セラレ

タルモノ

四 發見ヲ實施ス

ルニ必要ナラ

第二 本案又ハ附帶請求ニ付キ訴ノ申立ヲ擴張シ又ハ減縮スル

コト

第三 最初求メタル物ノ滅盡又ハ變更ニ因リ賠償ヲ求ムルコト

第百九十七條 訴ノ原因ニ變更ナシトスル裁判ニ對シテハ不服ヲ申

立ツルコトヲ得ス

第百九十八條 訴ノ全部又ハ一分ハ本案ニ付キ被告ノ第一口頭辯論

ノ始マルマテハ被告ノ承諾ナクシテ之ヲ取下ケ又其後口頭辯論ノ

終結ニ至ルマテハ被告ノ承諾ヲ得テ之ヲ取下クルコトヲ得

訴ノ取下ハ口頭辯論ニ於テ之ヲ爲ササルトキハ書面ヲ以テ之ヲ爲

ス可シ

訴狀ヲ既ニ送達シタル場合ニ於テハ訴取下ノ書面ハ之ヲ被告ニ送

達ス可シ

適法ナル取下ケハ權利拘束ノ總テノ效力ヲ消滅セシムル結果ヲ生

サル事實ヲ故

意ニ明細書ニ

記載セシコト

ヲ發見セラレ

タルモノ

第十一條 特許局審

査官特許出願ノ發明

ヲ審査シ特許ヲ與フ

ハカラスト査定シタ

ルトキハ特許局長ハ

其査定書ヲ出願人ニ

送付スヘシ

第十二條 前條ノ査

定ニ服セサル者ハ特

許局ニ不服理由書ヲ

差出シ再審査ヲ請求

スルコトヲ得

ス

取下ケタル訴ヲ再ヒ起シタルトキハ被告ハ前訴訟費用ノ辨濟ヲ受

クルマテ應訴ヲ拒ムコトヲ得

何々請求ノ訴訟取下願

原告人

何府何市何町何番地族籍職業

某

原告人

何府何市何町何番地族籍職業

某

被告人

何府何市何町何番地族籍職業

某

右當事者間ノ何年(何)第何號何々請求事件事實(原因)ニ錯誤有之候間
訴訟ノ(全部又ハ一部)取下ケ相成度此段原被告兩造連署ヲ以テ奉願候也

年月日

原告人

何

某印

被告人

何

某印

何々裁判所

判事 何

某 殿

第百九十九條 訴狀送達ノ際十四日ノ期間内ニ答辯書ヲ差出ス可キ

再審査ヲ請求スル者アルトキハ特許局長ハ特許局審査官ヲシテ更ニ之ヲ審査セシムヘシ審査官其不服理由ヲ不當ト査定シタルトキハ其査定書ヲ不服者ニ送付スヘシ

第十三條 特許局審査官特許出願ノ發明他人ノ特許出願中ノ發明ト抵觸シ又ハ他人ノ特許發明ト抵觸スト査定シタルトキハ特許局長ハ其抵觸

ノ箇所ヲ關係人ニ告知シ其發明ニ關スル始末書ヲ差出サシムヘシ
關係人始末書ヲ差出シタルトキハ特許局長ハ之ヲ特許局審査官ニ付シテ發明ノ先後ヲ審査セシメ其査定書ヲ關係人ニ送付スヘシ
第十四條 前條ノ場合ニ於テ既ニ與ヘタル特許證ヲ取消シ出願ノ發明ニ特許ヲ與フルトキハ其ノ特許

コトヲ被告ニ催告ス可シ
答辯書ニハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ヲ適用ス

答辯書	
原告	何府何市何町何番地族籍職業 何
代理人	全 何
被告	全 何
代理人	何
何々事件ノ答辯	
事實	
一何々	一定ノ申立 右事件ノ如キ理由ナルヲ以テ原告ノ請求ハ速ニ御裁知シ且訴訟費

用キ原告ニ於テ負担スヘシトノ判決相成度候也

證據方法

一何々(例ヘハ乙第何號證ヲ以テ證明ス)

附屬書類ノ表示

一訴訟代理委任狀

一法律上代理受任ノ證

一證書ノ原本若クハ抄本

年月日

何々裁判所 (右被(被告)若クハ代理人)

何

某印

第二百條 訴カ管轄裁判所ニ於テ權利拘束ト爲リタルトキハ被告ハ原告ニ對シ其裁判所ニ反訴ヲ起スコトヲ得然レトモ財産權上ノ請求ニ非サル請求ニ係ル反訴又ハ目的物ニ付キ專屬管轄ノ規定アル反訴ハ若シ其反訴ガ本訴ナルトキ其裁判所ニ於テ管轄權ヲ有ス可キ場合ニ限り之ヲ爲スコトヲ許ス

年限ハ前特許證登錄ノ日ヨリ起算シ其ノ年限ニ超ルコトヲ得

第十五條 第十二條

ノ再査定及第十三條ノ査定ニ服セサル者ハ特許局ニ審判ヲ請求スルコトヲ得

第十六條 特許證主其權利ノ他特許證主

ノ權利ト擅着スルコトヲ發見シタルトキハ其權利ヲ確定スル爲メ特許局ニ審判ヲ請求スルコトヲ得
第十七條 特許ヲ受

反訴ニ對シテハ更ニ反訴ヲ爲スコトヲ得ス

第二百一條 反訴ハ答辯書若クハ特別ノ書面ヲ以テ又ハ口頭辯論中相手方ノ面前ニ於テ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得然レトモ答辯書差出ノ期間内ニ差出シタル書面ヲ以テ起ササル反訴ハ被告ノ請求ノ全部又ハ一分ト相殺ヲ爲スコキ場合ニ於テ同時ニ被告カ自己ノ過失ニ因ラスシテ其以前反訴ヲ起スヲ得サリシコトヲ疏明スルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ許ス

何々訴訟ニ對スル反訴

原告人

何府何市何町何番地族籍職業
何府何市何町何番地族籍職業

某

被告

一 金何百圓

何年月日(貸付)(預金)(勞働賃金)

事實

被告人ハ原告人へ何年何月日金何百圓(貸金)(預金)(勞働賃金)有之ヲ以テ原告人ノ請求ト差引スルトキハ還済ス可キモノ無之ノミナラズ何圓ノ過利アレハ更ニ之ヲ請求スル事實ナリ云々

立証

一 乙何何號証(貸金証)

一 乙何何號証(預金証)(勞働受領証書)

一定ノ申立

原告人ハ被告人ニ對シ金何百圓ノ請求有之モ被告人ヨリ(貸金)(預金)(勞働賃)金何百圓ト相殺スル時ハ差引殘金何圓過剩有之ヲ以テ該金額ヲ辨済ス可キ據御裁判相成度併テ訴訟費用モ請求仕候也

年月日

被告人

何

某印

何々裁判所

判事

何

某段

第十九條 特許局ノ審判ニ對シテハ不服ヲ申立又ハ裁判所ニ訴ルコトヲ得ス
第二十條 第十三條

第二百二條 訴ニ關スル此法律ノ規定ハ反訴ニ之ヲ適用ス但其規定ニ因リ差異ノ生ス可キトキハ此限ニ在ラス

ノ審査及特許局ノ審判ニ關シ關係人ニ於テ證據ヲ要スルトキハ其請求ニ依リ特許局長ハ其集取ヲ治安裁判所ニ囑託スルコトヲ得

第二十一條 第十六條第十七條ニ係ル費用ハ民事訴訟入費ノ例ニ依リ負擔スヘキモノトス

第二十二條 特許ハ制限ヲ附シ若シハ附セシメテ賣與讓與シ若シハ共有トナシ又ハ書入トナスヲ得

第二百三條 裁判長ハ申立ニ因リ其命令ヲ以テ第九十九條ニ定メタル期間ヲ相當ニ短縮若シハ伸長シ又第九十四條ニ定メタル時間ヲ切迫ナル危險ノ場合ニ限り二十四時マテニ短縮スルヲ得前項時間ノ短縮ハ此カ爲メ答辯書ヲ差出スコトヲ得サルトキト雖モ亦之ヲ爲スコトヲ得

本條ノ規定ハ第六十七條ニ掲ケタル規定ヲ妨ケス

第二百四條 各當事者ハ訴狀又ハ答辯書ニ掲ケサリシ事實上ノ主張若シハ證據方法又ハ申立ニ付キ相手方カ豫メ穿鑿ヲ爲スニ非サレハ陳述ヲ爲ス能ハスト豫知スル事項アルトキハ口頭辯論ノ前ニ書面ニテ差出ス可シ但其書面ヲ相手方ニ送達スル時間及ヒ相手方ヲシテ必要ナル穿鑿ヲ爲ス時間ヲ得セシム可シ
口頭辯論ノ延期ヲ爲ストキハ裁判所ハ爾後必要ナル準備書面ヲ差出ス可キ期間ヲ定ムルコトヲ得

第二百五條 口頭辯論ハ一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス

第二百六條 妨訴ノ抗辯ハ本案ニ付テノ被告ノ辯論前同時ニ之ヲ提出ス可シ

左ニ掲ケルモノヲ妨訴ノ抗辯トス

- 第一 無訴權ノ抗辯
 - 第二 裁判所管轄違ノ抗辯
 - 第三 權利拘束ノ抗辯
 - 第四 訴訟能力ノ欠缺又ハ法律上代理ノ欠缺ノ抗辯
 - 第五 訴訟費用保證ノ欠缺ノ抗辯
 - 第六 再訴ニ付キ前訴訟費用未濟ノ抗辯
 - 第七 延期ノ抗辯
- 本案ニ付キ被告ノ口頭辯論ノ始マリタル後ハ妨訴ノ抗辯ハ被告ノ有效ニ拋棄スルコトヲ得サルモノナルトモ又ハ被告ノ過失ニ非ス

此場合ニ於テハ特許局ニ請求シ契約ハ登錄ヲ受ケル契約ハ第三者ニ對シ法律上其効ナキモノトス
第二十三條 特許局ノ官吏ハ在職中特許ヲ出願シ又ハ特許ヲ新ニ有スルコトヲ得ス但相續ニ由リ特許ヲ新ニ有スルハ此限ニ在ラス
第二十四條 特許ハ左ノ場合ニ於テ其効ヲ失フ者トス
一 特許主相當ノ

事故ナクシテ
特許證ノ日附
ヨリ三日ヲ經
テ其發明ヲ實
施公行セサル
トキ

二 特許證主相當
ノ事故ナクシ
テ其發明ノ實
施公行チ三年
間中止シタル
モノ

三 特許證主其特
許品ヲ外國ヨ
リ輸入シテ之
ヲ販賣シ又ハ
自己ノ權利ヲ

シテ本案ノ辯論前ニ其抗辯ヲ主張スル能ハサリシコトヲ疎明スル
トキニ限り之ヲ主張スルコトヲ得

何々請求ニ對スル妨訴ノ抗辯

何府何市何町何番地族籍職業
何縣何郡何村何番地族籍職業
何

何府何市何町何番地族籍職業
何縣何郡何村何番地族籍職業
何

何々々……ニテ(訴訟能力ナキカ)(訴權ナキカ)ノ事實ヲ記載ス
一定ノ申立

(行政裁判所ニ出訴スベキモノカ)又ハ(訴訟能力ノナキ云々タルヲ以テ)
本案訴訟ヲ棄却シランコトヲ請求ス

年月日 被告人 何 某

何々裁判所 判事 何 某

第二百七條 被告カ妨訴ノ抗辯ニ基キ本案ノ辯論ヲ拒ムトキ又ハ裁

侵スベキ物品
ヲ外國ヨリ輸
入シテ販賣ス
ル者アルコト
ヲ知リテ之ヲ
默許シタルト
キ

第二十五條 特許證
主特許證ヲ毀損若ク
ハ亡失シタルトキハ
事由ヲ具シ再下付ヲ
出願スルコトヲ得

第二十六條 特許證
主其明細書若クハ圖
面ノ不完全ナルトキ
發見シタルトキハ特
許ノ効力ヲ全スル爲

判所カ申立ニ因リ若クハ職權ヲ以テ別ニ辯論ヲ命スルトキハ其抗
辯ニ付キ別ニ辯論ヲ爲シ及ビ判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

妨訴ノ抗辯ヲ棄却スル判決ハ上訴ニ關シテハ終局判決ト看做ス但
裁判所ハ申立ニ因リ本案ニ付キ辯論ヲ爲ス可キヲ命スルコトヲ得

第二百八條 裁判所ハ計算事件財產分別及ヒ此ニ類スル訴訟ニ於テ
ハ口頭辯論ヲ延期シ準備手續ヲ命スルコトヲ得但妨訴ノ抗辯アリ
タルトキハ其完結後之ヲ爲ス

第二百九條 攻撃及ヒ防禦ノ方法(反訴、抗辯、再抗辯等)ハ第二百一
條ニ規定スル制限ヲ以テ判決ニ據著スル口頭辯論ヲ結終ニ至ルマ
テ之ヲ提出スルコトヲ得

第二百十條 被告ヨリ時機ニ後レテ提出シタル防禦ノ方法ハ裁判所
カ若シ之ヲ許スニ於テハ訴訟ヲ遅延ス可ク且被告ハ訴訟ヲ遅延セ
シメントスル故意ヲ以テ又ハ甚シキ怠慢ニ因リ早ク之ヲ提出セザ

改訂明細書若クハ
圖面ヲ添ヘ特許證ノ
改訂ヲ出願スルコトヲ
得但其發明ノ要部ニ
變更ヲ生スルモノハ
此限ニ在ラス

第二十七條 特許證
主其明細書中ニ自己
ノ發明ニアラサル事
項ヲ誤テ自己ノ發明
トシテ記載セシコト
ヲ發見シタルトキハ
其削除ヲ出願スルコ
トヲ得

第二十八條 第二十
六條第二十七條ニ依
リ出願スルモノアル

リシコトノ心證ヲ得タルトキハ申立ニ因リ之ヲ却下スルコトヲ得
第二百十二條 訴訟ノ進行中ニ爭ト爲リタル權利關係ノ成立又ハ不
成立ガ訴訟ノ裁判ノ全部又ハ一分ニ影響ヲ及ホストキハ判決ニ接
著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ原告ハ訴ノ申立ノ擴張ニ依リ又
被告ハ反訴ノ提起ニ依リ判決ヲ以テ其權利關係ヲ確定センコトヲ
申立ツルコトヲ得

第二百十二條 訴狀其他ノ準備書面ニ於テ主張セサル請求ノ權利拘
束ハ口頭辯論ニ於テ其請求ヲ主張シタル時夫以テ始マル

第二百十三條 各當事者ハ事實上ノ主張ヲ證明シ又ハ之ヲ辯駁セン
爲ニ用キントスル證據方法ヲ開示シ且相手方ヨリ開示スル證據
方法ニ付キ陳述ス可シ
各箇ノ證據方法ニ付テノ證據申出及ヒ之ニ關スル陳述ハ第六節乃
至第十節之規定ニ從フ

トキハ特許局長ハ其
ノ願書ヲ特許局審査
官ニ付シテ審査セシ
ムヘシ

前項ノ場合ニ於テ
特許局審査官ノ查
定ニ服セサル者ト
第十二條ニ依リ再
審査ヲ請求スルコ
トヲ得

第二十九條 特許證
主ハ其物品ニ農商務
大臣ノ定メタル特許
標記ヲ爲スヘシ

第三十條 特許ニ關
シ出願又ハ請求スル
者ハ左ノ手数料ヲ納

第二百十四條 證據方法及ヒ證據抗辯ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ
終結ニ至ルマテ之ヲ主張スルコトヲ得

證據方法及ヒ證據抗辯ノ時機ニ後レタル提出ニ付テハ第二十條
ノ規定ヲ準用ス
第二百十五條 證據調並ニ證據決定ヲ以テスル特別ノ證據調手續ノ
命令ハ第五節乃至第十節ノ規定ニ從フ

第二百十六條 當事者ハ訴訟ノ關係ヲ表明シ證據調ノ結果ニ付キ辯
論ヲ爲ス可シ
受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調ヲ爲シタルトキハ當事
者ハ證據調ニ關スル審問調書ニ基キ其結果ヲ陳述ス可シ

第二百十七條 裁判所ハ民法又ハ此法律ノ規定ニ反セサル限りハ辯
論ノ全旨趣及ヒ或ル證據調ノ結果ヲ斟酌シ事實上ノ主張ヲ眞實ナ
リト認ム可キヤ否ヤヲ自由ナル心證ヲ以テ判斷ス可シ

- ムヘシ
- 一 特許ヲ出願ス
ルトキ
- 一 發明毎ニ金五圓
- 二 特許ノ賣與讓
與共有又ハ書
入契約ノ登録
ヲ請求スルト
キ
- 一 發明毎ニ金三圓
- 三 特許證ノ再下
付ヲ出願スル
トキ
- 證書一枚毎ニ金
一圓

第二百十八條 裁判所ニ於テ顯著ナル事實ハ之ヲ證スルコトヲ要セ
ス

第二百十九條 地方慣習法、商慣習及ヒ規約又ハ外國ノ現行法ハ之
ヲ證ス可シ裁判所ハ當事者カ其證明ヲ爲スト否トニ拘ハラズ職權
ヲ以テ必要ナル取調ヲ爲スコトヲ得

第二百二十條 此法律ノ規定ニ依リ事實上ノ主張ヲ疏明ス可キトキ
ハ裁判官ヲシテ其主張ヲ眞實ナリト認メシム可キ證據方法ヲ申出
ツルヲ以テ足ル但即時ニ爲スコトヲ得サル證據調ハ疏明ノ方法ト
シテハ之ヲ許サス

第二百二十一條 裁判所ハ事件ノ如何ナル程度ニ在ルチ間ハス自ラ
又ハ受命判事若クハ受託判事ニ依リ訴訟又ハ或ル争點ノ和解ヲ試
ムル權アリ和解ヲ試ムル爲ニハ當事者ノ自身出頭ヲ命スルヲ得

第二百二十二條 判決ヲ受ク可キ事項ノ申立ハ書面ニ基キ之ヲ爲ス

- 四 特許證ノ改訂
又ハ明細書中
ノ削除ヲ出願
スルトキ
- 一 發明毎ニ金
五圓
- 五 審判ヲ請求ス
ルトキ
- 一 事件毎ニ金
七圓
- 第三十一條 特許又
ハ改訂特許證ヲ受ク
ル者ハ一證書毎ニ左
ノ區別ニ從ヒ特許料
ヲ納ムベシ
- 一 五年ノ特許
金十圓

コトヲ要ス

書面ニ掲ケサル申立アルトキハ調書ニ附録トシテ添附ス可キ書面
ヲ差出シテ之ヲ爲スコトヲ要ス

重要ノ點ニ於テ以前申立テタル者ト異ナル申立ニ付テモ亦同シ

本條ノ規定ヲ遵守セサルトキハ申立ナキモノト看做ス

第二百二十三條 前條ノ申立ヲ除外書面ニ掲ケサル重要ナル陳述
又ハ其書面ノ旨趣ト重要ノ點ニ於テ差異ノ存スル事項ハ其差異カ
附加、削除其他ノ變更ニ係ルチ間ハス申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ
調書若クハ其附録トシテ添附ス可キ爲メ差出シタル書面ニ依リテ
之ヲ明確ニス可シ

第二百二十四條 當事者ハ訴訟記録ヲ閱覽シ且裁判所書記ヲシテ其
正本、抄本及ヒ謄本ヲ付與セシムルコトヲ得

裁判長ハ第三者カ權利上ノ利害ヲ疏明スルトキニ限り當事者ノ承

二十年ノ特許

金十五圓

三十五年ノ特許

金二十圓

第三十二條 特許局ハ時々特許發明ノ明細書及特許公報ヲ印刷シ衆庶ノ縦覽ニ供スヘシ其ノ請求者アルトキハ相當代價ヲ以テ之ヲ抛下シルヲ得

第三十三條 特許ニ關スル書類ノ謄本又ハ圖面ノ調製ヲ要スル者ハ特許局ニ之ヲ請求スルコトヲ得此

諸ナクシテ訴訟記録ノ閱覽及ヒ其抄本並ニ謄本ノ付與ヲ許スコトヲ得

判決、決定、命令ノ草案及ヒ其準備ニ供シタル書類並ニ評議又ハ處

罰ニ關スル書類ハ其原本ナルト謄本ナルトヲ問ハズ之ヲ閱覽スルコトヲ許サス

訴訟記録閱覽ノ申立

原告人何某ヨリ被告人何某ニ係ル何年(何)第何號何々事件ノ訴訟記録閱覽致度候也

年 月 日 (原告人) 何 (被告人) 何

何々裁判所 判事 何 某段 某印

(正本)(抄本)(謄本)付與ノ申立

原告人何某ヨリ被告人何某ニ係ル何年(何)第何號何々事件ノ(証人)問調書(鑑定人)調書又ハ(口頭辯論調書)ノ(謄本)又ハ(抄本)付與被下成度此段申立候也

年 月 日 (原告人) 何 (被告人) 何

何々裁判所 判事 何 某段 某印

原告人何某ヨリ被告人何某ニ係ル何年(何)第何號何々事件ノ(証人)問調書(鑑定人)調書又ハ(口頭辯論調書)ノ(謄本)又ハ(抄本)付與被下成度此段申立候也

場合ニ於テハ相當ノ手数料ヲ納ムヘシ

第三十四條 特許ヲ侵シタル者ハ其特許證主ニ對シ損害賠償ノ責ニ任スヘシ

第三十五條 前項損害賠償ノ責ハ三年ヲ以テ期滿免除ノ期トス

第三十六條 他人ノ特許品ヲ偽造シテ使用若クハ販賣シタル者又ハ情ヲ知り偽造品ヲ使用若クハ受托販賣シタル者又ハ他人ノ特許工術ヲ竊用

第二節 判決

第二百二十五條 訴訟カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ裁判所ハ終局判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス

同時ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス爲メ併合シタル數箇ノ訴訟中ノ一ノミ裁判ヲ爲スニ熟スルトキモ亦同シ

第二百二十六條 一ノ訴ヲ以テ起シタル數箇ノ請求中ノ一箇又ハ一箇ノ請求中ノ一分又ハ反訴ヲ起シタル場合ニ於テハ本訴若クハ反訴ノミ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ裁判所ハ終局判決(一分判決)ヲ以テ裁判ヲ爲ス

然レトモ裁判所ハ事件ノ事情ニ從ヒテ一分判決ヲ相當トセサル

第二節 判決

第二百二十五條 訴訟カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ裁判所ハ終局判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス

同時ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス爲メ併合シタル數箇ノ訴訟中ノ一ノミ裁判ヲ爲スニ熟スルトキモ亦同シ

第二百二十六條 一ノ訴ヲ以テ起シタル數箇ノ請求中ノ一箇又ハ一箇ノ請求中ノ一分又ハ反訴ヲ起シタル場合ニ於テハ本訴若クハ反訴ノミ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ裁判所ハ終局判決(一分判決)ヲ以テ裁判ヲ爲ス

然レトモ裁判所ハ事件ノ事情ニ從ヒテ一分判決ヲ相當トセサル

シタル者ハ一月以上
 一年以下ノ重禁錮又
 ハ二十圓以上二百圓
 以下ノ罰金ニ處ス
 特許證主ノ權利ヲ
 侵スヘキ物品ナル
 コトヲ知りテテ外
 國ヨリ輸入シテ使
 用若シハ販賣シタ
 ル者又ハ情ヲ知り
 其輸入シタル物品
 ヲ使用若シハ受託
 販賣シタル者ハ罰
 前項ニ同シ
 第三十七條 前條ノ
 場合ニ於テハ其犯罪
 ノ物件ヲ沒收シテ特

キハ之ヲ爲ササルコトヲ得
 第二百二十七條 各箇ノ獨立ナル攻撃若シハ防禦ノ方法又ハ中間ノ
 争カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ中間判決ヲ以テ裁判ヲ爲スコトヲ
 得

第二百二十八條 請求ノ原因及ヒ數額ニ付キ争アルトキハ裁判所ハ
 先ッ其原因ニ付キ裁判ヲ爲スコトヲ得

請求ノ原因ヲ正當ナリトスル判決ハ上訴ニ關シテハ終局判決ト看
 做シ其判決確定ニ至ルマデ爾後ノ手續ヲ中止ス然レトモ裁判所ハ
 申立ニ因リ其數額ニ付キ辯論ヲ爲スコキヲ命スルコトヲ得

第二百二十九條 口頭辯論ノ際原告其訴ヘタル請求ヲ拋棄シ又ハ被
 告之ヲ認諾スルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ其拋棄又ハ認諾ニ基キ
 判決ヲ以テ却下又ハ敗訴ノ言渡ヲ爲スコシ

第二百三十條 判決ハ辯論ヲ經タル總テノ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ包

括ス

許證主ニ給付シ其既
 ニ賣捌キタルモノハ
 代價ヲ追徴シテ之ヲ
 給付ス

第三十八條 詐偽ノ
 所爲ヲ以テ特許證ヲ
 受ケタル者又ハ特許
 ヲ受ケサル物品ニ特
 許標記若シハ之ニ類
 似シタル標記ヲ爲シ
 テ販賣シタル者又ハ
 情ヲ知りテ其物品ヲ
 受託販賣シタル者ハ
 十五日以上六月以下
 ノ重禁錮又ハ十圓以
 上一百圓以下ノ罰金
 ニ處ス

然レトモ數箇ノ獨立ナル攻撃又ハ防禦ノ方法中其一箇ヲ適切ナリ

トスルトキハ裁判所ハ他ノ方法ニ付キ判斷スル義務ナシ

第二百三十一條 裁判所ハ申立テサル事物ヲ原告若クハ被告ニ歸セ
 シムル權ナシ

裁判所ハ終局判決ヲ爲ス場合ニ於テハ訴訟費用ノ負擔ニ限り申立
 アラサルモ判決ヲ爲スコシ然レトモ一分判決ヲ爲ス場合ニ於テハ
 費用ノ裁判ヲ後ノ判決ニ讓ルコトヲ得

第二百三十二條 判決ハ其基本タル口頭辯論ニ臨席シタル判事ニ限
 リ之ヲ爲ス

第二百三十三條 判決ハ口頭辯論ノ終結スル期日又ハ直チニ指定ス
 ル期日ニ於テ之ヲ言渡ス但其期日ハ七日ヲ過クルコトヲ得ス

第二百三十四條 判決ノ言渡ハ判決主又ハ朗讀ニ因リ之ヲ爲ス朗讀

第三十九條 第三十六條ノ犯罪ハ被害者ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

前項ノ場合ニ於テ告訴人ノ請求ニ依リ裁判官ハ假ニ其告訴ニ係ル物品ノ使用若クハ販賣ヲ差止ムルコトヲ得
第四十條 特許證主其特許品ニ第二十九條ノ特許標記ヲ爲スコトヲ怠リタルトキハ告訴又ハ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス
第四十一條 被告人

判決ノ言渡ハ其主文ヲ作ラサル前ト雖モ之ヲ爲スコトヲ得
裁判ノ理由ヲ言渡スコトヲ至當ト認ムルトキハ判決ノ言渡ト同時ニ其理由ヲ朗讀シ又ハ口頭ニテ其要領ヲ告ク可シ

第二百三十五條 判決ノ言渡ハ當事者又ハ其一方ノ在廷スルト否トニ拘ハラ其效力ヲ有ス

言渡アリタル判決ニ基キ訴訟手續ヲ續行シ又ハ他ニ其判決ヲ使用スル原告若クハ被告ノ權ハ此法律ニ特定シタル場合ヲ除ク外相手方ニ其判決ヲ送達スルト否トニ拘ハラサルモノトス

第二百三十六條 判決ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

- 第一 當事者及ヒ其法律上代理人ノ氏名、身分、職業及ヒ住所
- 第二 事實及ヒ爭點ノ摘示但其摘示ハ當事者ノ口頭演述ニ基キ殊ニ其提出シタル申立ヲ表示シテ之ヲ爲ス
- 第三 裁判ノ理由

第四 判決主文

第五 裁判所ノ名稱、裁判爲シタル判事ノ官氏名

第二百三十七條 判決ノ原本ニハ裁判ヲ爲シタル判事署名捺印ス若シ陪席判事署名捺印スルニ差支アルトキハ其理由ヲ開示シテ裁判長其旨ヲ附記シ裁判長差支アルトキハ官等最モ高キ陪席判事之ヲ附記ス

判決ノ原本ハ言渡ノ日ヨリ起算シテ七日内ニ裁判所書記ニ之ヲ交付ス可シ

裁判所書記ハ言渡ノ日及ヒ原本領收ノ日ヲ原本ニ附記シ且其附記ニ署名捺印ス可シ

第二百三十八條 各當事者ハ判決ノ送達アラノコトヲ申立ツルコトヲ得其申立アリタルトキハ判決ノ正本ヲ送達ス可シ

判決正本送達ノ申請

特許ノ無効タルコトヲ以テ答辯シント欲スルトキハ其旨ヲ裁判所ニ申告シ其日ヨリ三十日以内ニ特許局ニ第十七條ノ審判ヲ請求スヘシ此場合ニ於テ裁判所ハ特許局ノ審判終結マテ其裁判ヲ中止スヘシ
第四十二條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑罰ノ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス
第四十三條 此條例施行ノ細則ハ農商務大臣之ヲ定ム

第四十四條 此條例ハ明治二十二年二月一日ヨリ施行ス

第四十五條 明治十八年四月第七號布告專賣特許條例ハ此條例施行ノ日ヨリ廢止ス但專賣特許條例ニ依テ受ケタル專賣特許ハ此條例ニ依テ受ケタル特許ト同一効アルモノトス

專賣特許出願ノ此條例施行ノ日ニ於テ處分ヲ終ラサルモノハ此條例ニ依リ處分ス

原告人(控訴人若クハ上告人)何某ヨリ被告人(被控訴人若クハ被上告人)何某ニ係ル明治何年(何)ノ第何号何々事件ニ付何月何日裁判言渡相成候間該判決正本當事者双方ヘ送達相成度此段申請仕候也

年月日 原告人(控訴上告) 何 某印
訴訟代理人 何

何々裁判所 判事 何 某段

第二百三十九條 未タ判決ヲ言渡サス又ハ未タ判決ノ原本ニ署名捺印セサル間ハ裁判所書記ハ其正本抄本及ヒ謄本ヲ付與スルコトヲ得ス

裁判所書記ハ判決ノ正本、抄本及ヒ謄本ニ署名捺印シ且裁判所ノ印ヲ捺シテ之ヲ認證ス可シ

第二百四十條 裁判所ハ其言渡シタル終局判決及ヒ中間判決ノ中ニ包含シタル裁判ニ羈束セラル

第二百四十一條 裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ判

勅令第八十五號

意匠條例

第一條 工業上ノ物品ニ應用スヘキ形狀模様若クハ色彩ニ係ル新規ノ意匠ヲ提出シタル者ハ此條ニ依リ其意匠ノ登録ヲ受ケ之ヲ專用スルコトヲ得

第二條 左ニ掲クル意匠ハ登録ヲ受クルコトヲ得サルモノトス

- 一 風俗ヲ害スヘキモノ
- 二 登録出願以前

決中ノ違算、書損及ヒ此ニ類スル著シキ誤謬ヲ更正ス

此更正ニ付テハ口頭辯論ヲ經スシテ裁判ヲ爲スコトヲ得

右更正ノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス更正ヲ宣言スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

判決正本更正ノ申請

原告人 何 某
何府何市何町何番地族籍職業

被告人 何 某
何府何市何町何番地族籍職業

右當事者間ノ何年(何)第何号何々事件何月何日判決言渡相成候處判決主文中(金何圓ハ金何十圓)又ハ(原告若クハ被告人ノ姓氏ニ誤リアル事)ハ何々ノ誤謬ト確信候間判決正本御更正被成下度此段申請仕候也

年月日 原告人 何 某印
何々裁判所 判事 何 某段

公ニ知ラレ又
ハ公ニ用ヒシ
レタルモノ

第三條 意匠ノ登録
ヲ受ケント欲スル者
ハ一意匠毎ニ明細書
及圖面ヲ添ヘ農商務
大臣ニ出願スヘシ但
其願書明細書及圖面
ハ特許局ニ差出スヘ
シ

第四條 意匠ノ登録
ヲ出願スル者アルト
キハ特許局長ハ特許
局審査官ヲシテ其意
匠ヲ審査セシメ登録
ヲ許スヘシト査定シ

第二百四十二條 主タル請求若シハ附帶ノ請求又ハ費用ノ全部若シ
ハ一分ノ裁判ヲ爲スニ際シ脱漏シタルトキハ申立ニ因リ追加ノ裁
判ヲ以テ判決ヲ補充ス可シ

判決ノ言渡後直チニ追加裁判ノ申立ヲ爲ササルトキハ遅シトモ判
決ノ正本ヲ送達シタル日ヨリ起算シテ七日ノ期間内ニ之ヲ爲スコ
トヲ要ス

追加裁判ノ申立アルトキハ即時ニ又ハ新期日ヲ定メテ口頭辯論ヲ
爲サシム可シ其辯論ハ訴訟ノ完結セサル部分ニ限り之ヲ爲ス

追加判決ノ申請

原告人 何府市何町何番地族籍職業 何 某
何縣何郡何村何番地族籍職業 何 某

被告人 何 某

右當事者ノ何年(何)第何号何々事件ニ付何月何日言渡ノ判決ニ依レ

ナルモノハ農商務
大臣ノ認可ヲ經テ意
匠原簿ニ登録シ其登
録證下付ノ手續ヲ爲
スヘシ

第五條 登録證ハ農
務大臣之ニ署名シ
特許局長之ニ副署シ
明細書及圖面ヲ添ヘ
之ヲ下付スルモノト
ス

第六條 意匠専用ノ
年限ハ三年五年七年
及十年ノ四種ト爲シ
原簿登録ノ日ヨリ起
算ス

第七條 意匠ノ専用

ハ(家屋明渡家賃ノ請求ナルニ家賃ナク又(訴訟費用ノ言渡ナク(又假
執行ノ言渡ナキ)云々ナルハ全ク脱漏ト確信仕候間追加ノ判決ヲ以
テ該判決ヲ補充被成下度此段申請候也

年月日 原告人 何 某印

何々裁判所 判事 何 某殿

第二百四十三條 判決ヲ更正シ又ハ補充スル裁判ハ判決ノ原本及ヒ
正本ニ之ヲ追加シ若シ正本ニ之ヲ追加スルコトヲ得サルトキハ更
正又ハ補充ノ裁判ノ正本ヲ作ル可シ

第二百四十四條 判決ハ其主文ニ包含スルモノニ限り確定力ヲ有ス

第二百四十五條 口頭辯論ニ基キ爲ス裁判所ノ決定ハ之ヲ言渡スコ
トヲ要ス

第二百三十三條、第二百三十四條ノ規定ハ裁判所ノ決定ニ之ヲ準
用シ又第二百三十五條、第二百三十九條及ヒ第二百四十條ノ規定

ハ農商務大臣ノ定ムル物品類別ニ於テ出願人ノ指定シタル物品ニ限ルモノトス

第八條 二人以上同一又ハ類似意匠ノ登録ヲ出願スル者アルトキハ願書日附ノ先ナルモノヲ登録ス其日附同キモノハ其ニ之ヲ登録セサルモノトス但出願人協議ノ上連名ニテ其登録ヲ出願スルトキ又ハ其出願ヲ取消ス者アリテ出願人一人トナリタルトキハ此限ニ在

ハ裁判所ノ決定及ヒ裁判長並ニ受命判事又ハ受託判事ノ命令ニ之ヲ準用ス

言渡ヲ爲ササル裁判所ノ決定及ヒ言渡ヲ爲ササル裁判長並ニ受命判事又ハ受託判事ノ命令ハ職權ヲ以テ之ヲ當事者ニ送達ス可シ

第三節 調停判決

第二百四十六條 原告若クハ被告口頭辯論ノ期日ニ出頭セサル場合ニ於テハ出頭シタル相手方ノ申立ニ因リ調停判決ヲ爲ス

第二百四十七條 出頭セサル一方カ原告ナルトキハ裁判所ハ調停判決ヲ以テ其訴ノ却下ヲ言渡ス可シ

第二百四十八條 出頭セサル一方カ被告ナルトキハ裁判所ハ被告カ原告ノ事實上ノ口頭供述ヲ自白シタルモノト看做シ原告ノ請求ヲ正當ト爲ストキハ調停判決ヲ以テ被告ノ敗訴ヲ言渡シ又其請求ヲ正當ト爲ササルトキハ其訴ノ却下ヲ言渡ス可シ

第九條 意匠ノ登録ヲ受ケタル者又ハ之ヲ受ケントスル者死亡シタルトキハ其權利ハ相續者ニ屬スルモノトス

第十條 他人ノ委託又ハ雇主ノ費用ヲ以テ按出シタル意匠ノ登録出願ノ權利ハ其委託者若クハ雇主ニ屬ス但別ニ契約アル場合ニ於テハ此限ニ在ラス

第十一條 登録ヲ受ケタル意匠ト雖モ第

第二百四十九條 延期シタル口頭辯論ノ期日又ハ口頭辯論ヲ續行スル爲ニ定ムル期日モ亦第二百四十六條ノ辯論期日ニ同シ

第二百五十條 原告若クハ被告出頭スルモ辯論ヲ爲ササルトキ又ハ辯論ヲ爲サスシテ任意ニ退廷シタルトキハ出頭セサルモノト看做ス

第二百五十一條 原告若クハ被告カ本案ノ辯論ヲ爲シタルトキハ各箇ノ事實證書又ハ發問ニ付キ陳述ヲ爲サス又ハ任意ニ退廷スルモ本節ノ規定ヲ適用セス

第二百五十二條 左ノ場合ニ於テハ調停判決ノ申立ヲ却下ス然レトモ出頭シタル原告若クハ被告ハ口頭辯論ノ延期ヲ申立ツルコトヲ得

第一 出頭シタル原告若クハ被告カ裁判所ノ職權上調査ス可キ事情ニ付キ必要ナル證明ヲ爲ス能ハサルトキ

二條ニ該ルコトヲ發見
セラレタルモノ又ハ
第八條第十條ニ違ヒ
登錄ヲ受ケタルコトヲ
發見セラレタルモノ
ハ其登錄ヲ無効トス
第十二條 意匠ノ審
査査定ニ關スル事項
ハ總テ特許條例ヲ適
用ス
第十三條 意匠専用
權ハ制限ヲ附シ若シ
ハ附セスシテ賣與讓
與シ若シハ共有トナ
シ又ハ書入ト爲スコ
トヲ得此場合ニ於テ
ハ特許局ニ請求シ契

第二 出頭セサル原告若シハ被告ニ口頭上事實ノ供述又ハ申立
ヲ適當ナル時期ニ書面ヲ以テ通知セサルトキ
辯論ヲ延期シタルトキハ出頭セサル原告若シハ被告ヲ新期日ニ呼
出ス可シ
第二百五十三條 闕席判決ノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ即時抗
告ヲ爲スコトヲ得又其決定ヲ取消シタルトキハ出頭セサリテ原告
若シハ被告ヲ新期日ニ呼出サスシテ闕席判決ヲ爲ス
第二百五十四條 裁判所ハ左ノ場合ニ於テハ職權ヲ以テ闕席判決ノ
申立ニ付テノ辯論ヲ延期スルコトヲ得
第一 出頭セサル原告若シハ被告カ命式ニ呼出サレザリシトキ
第二 出頭セサル原告若シハ被告カ天災其他避ク可カラサル事
變ノ爲ニ出頭スル能ハサルコトノ眞實ヲ認め可キ事情アルト
キ

約ノ登錄ヲ受ケヘシ
登錄ヲ受ケサル契約
ハ第三者ニ對シ法律
上無効ナキモノトス
第十四條 特許局ノ
官吏ハ在職中意匠ノ
登錄ヲ出願シ又ハ意
匠専用權ヲ新ニ有ス
ルコトヲ得ズ但相續
ニ由リ意匠専用權ヲ新
ニ有スルハ此限ニ在
ラス
第十五條 登錄意匠
主其ノ登錄證ヲ毀損
若シハ亡失シタルト
キハ事由ヲ具シ再下
付ヲ出願スルコトヲ

出頭セサリシ原告若シハ被告ハ新期日ニ之ヲ呼出ス可シ
第二百五十五條 闕席判決ヲ受ケタル原告若シハ被告ハ其判決ニ對
シ故障ヲ申立ツルコトヲ得
故障申立ノ期間ハ十四日トス此期間ハ不變期間ニシテ闕席判決ノ
送達ヲ以テ始マル
故障申立ハ判決ノ送達前ト雖モ之ヲ爲スコトヲ得
外國ニ於テ送達ヲ爲スコキトキ又ハ公ノ告示ヲ以テ之ヲ爲スコキ
トキハ裁判所ハ闕席判決ニ於テ故障期間ヲ定メ又ハ後日決定ヲ以
テ之ヲ定ム此決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ爲スコトヲ得
第二百五十六條 故障申立ハ闕席判決ヲ爲シタル裁判所ニ書面ヲ差
出シテ之ヲ爲ス
此書面ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス
第一 故障ヲ申立テラレタル闕席判決ノ表示

得

第十六條 登錄意匠主其明細書若シハ圖面ノ不完全ナルコトヲ發見シタルトキハ登錄ノ効力ヲ全クスル爲メ改訂明細書若シハ圖面ヲ添へ登錄證ノ改訂ヲ出願スルコトヲ得但其他意匠ニ變更ヲ生スルモノハ此限ニ在ラス

第十七條 登錄意匠主ハ其意匠ヲ應用シタル物品ニ農商務大臣ノ定メタル登錄標記ヲ爲スヘシ

第二 其判決ニ對スル故障ノ申立
此書面ニハ本案ニ付テノ口頭辯論準備ノ爲ニ必要ナル事項アルトキモ亦之ヲ掲ク可シ

關席判決ニ對スル故障申立

原告人

何府何市何町何番地族籍職業

何

某

被告人

何府何市何町何番地族籍職業

何

某

欠席判決ノ表示

何年(何)第何号何々事件何月何日何々ト言渡サレタリ
一定ノ申立

何々ノ事實ナルヲ以テ何々ノ手續ヲナシタルニ之等有効ノ手續ヲナシタルニ關セズ欠席判決ヲナシタルハ不審ニ付故障ノ申立ヲナシ候間欠席前ノ程度ニ訴訟ヲ御服シ相成度此段申請仕候也

年月日

(原告人)

何

某

何々裁判所

何

某

第十八條 意匠ニ關シ出願又ハ請求スル者ハ左ノ手数料ヲ納ムヘシ

- 一 意匠ノ登録ヲ出願スルトキ
- 一 意匠ニ付物品一類毎ニ 金五十錢
- 二 登録意匠ノ賣與讓與共有又ハ書入契約ノ登録ヲ請求スルトキ
- 一 意匠ニ付物品一類毎ニ 金三圓

第二百五十七條 判然許ス可カラサル故障又ハ判然法律上ノ方式ニ適セス若シハ其期間ノ經過後ニ起シタル故障ハ裁判長ノ命令ヲ以テ之ヲ却下ス可シ

此却下ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百五十八條 前條ノ場合ヲ除ク外裁判所ハ故障申立ノ書面ヲ相手方ニ送達シ且故障ニ付キ日頭辯論ノ新期日ヲ定メ當事者ノ雙方ヲ呼出ス可シ

第二百五十九條 裁判所ハ職權ヲ以テ故障ヲ許ス可キヤ否ヤ又法律上ノ方式ニ從ヒ若シハ其期間ニ於テ故障ヲ申立テタルヤ否ヤヲ調査ス可シ

若シ此要件ノ一ヲ缺クトキハ判決ヲ以テ故障ヲ不道法トシテ棄却ス

第二百六十條 故障ヲ道法トスルトキハ訴訟ハ關席前ノ程度ニ復ス

- 三 登録證ノ再下付チ出願スルトキ
證書一枚毎ニ
金一圓
- 四 登録證ノ改訂チ出願スルトキ
一 意匠ニ付物品 一類毎ニ
金貳圓
- 五 審判ヲ請求スルトキ
一 事件毎ニ
金七圓

第二百六十一條 新辯論ニ基キ爲スコキ判決カ闕席判決ト算合スル
トキハ闕席判決ヲ維持スルコトヲ言渡シ其符合セサル場合ニ於テハ新判決ニ於テ闕席判決ヲ廢棄ス

第二百六十二條 法律ニ從ヒ闕席判決ヲ爲シタルトキ闕席ニ因リテ生シタル費用ハ相手方ノ不當ナル異議ニ因リ生セサルモノニ限リ故障ノ爲メ闕席判決ヲ變更スル場合ニ於テモ其闕席シタル原告若クハ被告ニ之ヲ負擔セシム

第二百六十三條 故障ヲ申立テタル原告若クハ被告口頭辯論ノ期日又ハ辯論延期ノ期日ニ出頭ゼサルトキハ第二百五十三條及ヒ第二百五十四條ニ規定シタル場合ヲ除ク外出頭シタル相手方ノ申立ニ因リ故障ヲ棄却スル新闕席判決ヲ言渡ス

新闕席判決ニ對シテハ故障ヲ申立ツルコトヲ得ス

第二百六十四條 故障ノ拋棄及ヒ其取下ニ付テハ控訴ノ拋棄及ヒ其

- 一 三年ノ専用 金一圓
 - 二 五年ノ専用 金二圓
 - 三 七年ノ専用 金四圓
 - 四 十年ノ専用 金八圓
- 第二十條 登録意匠ニ關スル書類ノ謄本若クハ圖面ノ調製ヲ要スル者ハ特許局ニ之ヲ請求スルコトヲ

取下一ニ付テノ規定ヲ準用ス

第二百六十五條 本節ノ規定ハ反訴又ハ既ニ原因ノ確定シタル請求ノ數額ノ定テ目的物トスル訴訟手續ニ之ヲ準用ス

中間訴訟ノ辯論ノ爲メ期日ヲ定メタルトキハ其闕席訴訟手續及ヒ闕席判決ハ其中間訴訟ヲ完結スルニ止マリ本節ノ規定ヲ之ニ準用ス

第四節 計算事件、財産分別及ヒ此ニ類スル訴訟ノ準備手續

第二百六十六條 計算ノ當否財産ノ分別又ハ此ニ類スル關係ヲ目的トスル訴訟ニ於テ計算書又ハ財産目錄ニ對シ許多ノ爭アル請求ノ生シ又ハ許多ノ爭アル異議ノ生シタルトキハ受訴裁判所ハ受命判事ノ面前ニ於ケル準備手續ヲ命スルコトヲ得

第二百六十七條 準備手續ヲ命スル決定ヲ言渡スニ際シ裁判長ハ受命判事ヲ指定シ決定旅行ノ期日ヲ定ム可シ若シ裁判長此期日ヲ定

第四節 計算事件、財産分別及ヒ此ニ類スル訴訟ノ準備手續

得此場合ニ於テハ相當ノ手数料ヲ納ムハシ

第二十一條 登録意匠ノ專用權ヲ侵シタル者ハ其意匠主ニ對シ損害賠償ノ責ニ任スヘシ

第二十二條 前條損害賠償ノ責ハ三年ヲ以テ期滿免除ノ期トス

第二十三條 他人ノ登録意匠ナルコトヲ知リ之ヲ同一物品ニ應用シテ之ヲ販賣シタル者又ハ情ヲ知り

テ其物品ヲ受託販賣シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮又ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

登録意匠主ノ權利ヲ侵スヘキ物品ナルコトヲ知り之ヲ外國ヨリ輸入シテ販賣シタル者又ハ情ヲ知り其物品ヲ受託販賣シタル者ハ罰前項ニ同シ

詐僞ノ所爲ヲ以テ登録證ヲ受ケタル者又ハ登録ヲ受タル意匠ヲ應用シタル

メサルトキハ受命判事之ヲ定ム又受命判事其委任ヲ施行スルニ差支アルトキハ裁判長更ニ他ノ判事ヲ任ス

第二百六十八條 準備手續ニ於テハ調書ヲ以テ左ノ諸件ヲ明確ニス可シ

第一 如何ナル請求ヲ爲スヤ及ヒ如何ナル攻撃、防禦ノ方法ヲ主張スルヤ

第二 如何ナル請求及ヒ如何ナル攻撃、防禦ノ方法ヲ争フヤ又ハ之ヲ争ハサルヤ

第三 争ト爲リタル請求及ヒ争ト爲リタル攻撃防禦ノ方法ニ付テハ其事實上ノ關係及ヒ當事者ノ表示シタル證據方法、主張シタル證據抗辯、證據方法並ニ證據抗辯ニ關シテ爲シタル陳述及ヒ提出シタル申立

此手續ハ受訴裁判所ニ於テ訴訟又ハ中間訴訟カ判決又ハ證據決定

ヲ爲スニ熟スルマテ之ヲ續行ス可シ

第二百六十九條 原告若クハ被告カ期日ニ於テ受命判事ノ面前ニ出願セサルトキハ受命判事ハ前條ノ規定ニ依リ調書ヲ以テ出頭シタル原告若クハ被告ノ提供ヲ明確ニシ且新期日ヲ定メ出頭シタル原告若クハ被告ニハ調書ノ謄本ヲ付與シテ新期日ニ之レヲ呼出ス可シ

原告若クハ被告カ新期日ニモ亦出頭セサルトキハ送達セシ調書ニ掲ケタル相手方ノ事實上ノ主張ヲ自白シタルト看做シ其主張ニ付テノ準備手續ハ完結シタルモノトス

第二百七十條 受訴裁判所ハ準備手續ノ終結後ニ口頭辯論ノ期日ヲ定メ之ヲ當事者ニ通知ス可シ

第二百七十一條 當事者ハ口頭辯論ニ於テ準備手續ノ結果ヲ調書ニ基キ演述ス可シ

ル物品ニ登録標記
若シハ類似ノ標記
ヲ爲シテ販賣シタ
ル者又ハ情ヲ知リ
其物品ヲ受託販賣
シタル者ハ罰第一
項ニ同シ

第二十四條 前條第
一項第二項ノ場合ニ
於テハ其犯罪ノ物件
ヲ没收シテ登録意匠
主ニ給付シ其既ニ賣
捌キタルモノハ代價
ヲ追徴シテ之ヲ給付
ス

第二十五條 第二十
三條第一項第二項ノ

原告若シハ被告カ出頭セサルトキハ準備手續ニ於テ争ハサル請求
ハ一分判決ヲ以テ之ヲ完結ス其他ニ付テハ申立ニ因リテ闕席判決
ヲ爲ス可シ

第二百七十二條 受命判事ノ調書ヲ以テ明確ニス可キ事實又ハ證書
ニ付キ陳述ヲ爲サヌ又ハ之ヲ拒ミタルトキハ口頭辯論ニ於テ之ヲ
追完スルコトヲ得ス

請求、攻撃若クハ防禦ノ方法、證據方法及ヒ證據抗辯ニシテ受命判
事ノ調書ヲ以テ之ヲ明確ニセサルモノニ付テハ後日ニ至リ始メテ
生シ又ハ後日ニ至リ始メテ原告若クハ被告ノ知リタルコトヲ疏明
スルトキニ限リ口頭辯論ニ於テ之ヲ主張スルコトヲ得

第五節 證據調ノ總則

第二百七十三條 證據調ハ受訴裁判所ニ於テ之ヲ爲スヲ以テ通例ト
ス

犯罪ハ被害者ノ告訴
ヲ待テ其罪ヲ論ス

前項ノ場合ニ於テ
告訴人ノ請求ニ依
リ裁判官ハ假ニ其
告訴ニ係ル物品ノ
販賣ヲ差止ムルコ
トヲ得

第二十六條 登録意
匠主第十七條ノ登録
標記ヲ爲スヲ怠リ
タルトキハ告訴又ハ
要償ノ訴ヲ爲スヲ
得ス

第二十七條 此條例
ヲ犯シタル者ニハ刑
法ノ數罪併發ノ例ヲ

證據調ハ此法律ニ定メタル場合ニ限リ受訴裁判所ノ部員一名ニ之
ヲ命ジ又ハ區裁判所ニ之ヲ囑託スルコトヲ得

此證據調ヲ命スル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第二百七十四條 當事者ノ申立テタル數多ノ證據中其調フ可キ限度
ハ裁判所之ヲ定ム

當事者ノ演述ニ引續キ直チニ證據調ヲ爲サヌシテ受訴裁判所ニ於
テ新期日ニ之ヲ爲シ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ之
ヲ爲ス可キトキハ證據決定ニ因リ之ヲ命ス可シ

第二百七十五條 證據調ニ付キ不定時間ノ障礙アルトキハ申立ニ因
リ相當ノ期間ヲ定ム可シ此期間ノ滿了後ト雖モ訴訟手續ヲ遲滯セ
シメサル限リハ其證據方法ヲ用ザルコトヲ得

第二百七十六條 證據決定ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

第一 證ス可キ係爭事實ノ表示

用ヒス

第二十八條 此條例施行ノ細則ハ農商務大臣之ヲ定ム

第二十九條 此條例ハ明治二十二年二月一日ヨリ施行ス
勅令第八十六號

商標條例

第一條 自己ノ商品ヲ表彰スル爲メ商標ヲ使用セシムル欲スル者ハ此條例ニ依リ其商標ノ登録ヲ受ケ之ヲ專用スルコトヲ得
商標ハ特別著明ナル圖形字體又ハ其

第二 證據方法ノ表示殊ニ證人又ハ鑑定人ヲ訊問ス可キトキハ其表示

第三 證據方法ヲ申出テタル原告若シハ被告ノ表示

第二百七十七條 證據決定ノ變更ハ其決定ノ施行完結前ニ在リテ新ナル辯論ニ基クトキニ限り之ヲ申立ツルコトヲ得
證據決定ノ施行ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス

第二百七十八條 受訴裁判所ノ部員カ證據調ヲ爲ス可キトキハ裁判長證據決定ノ言渡ノ際受命判事ヲ指名シ日證據調ノ期日ヲ定ム若其期日ヲ定メサルトキハ受命判事之ヲ定ム

受命判事其命ヲ施行スルニ差支アルトキハ裁判長更ニ他ノ部員ヲ命ス

第二百七十九條 他ノ裁判所ニ於テ證據調ヲ爲ス可キトキハ裁判長ハ其囑託書ヲ發ス可シ

結合ヲ以テ要部ト爲スヘシ

第二條 左ニ掲グル商標ハ登録ヲ受クルコトヲ得サルモノトス

一 風俗ヲ害スヘキモノ

二 商品普通ノ名稱若シハ内外國ノ國旗章ノ

ミヲ以テ要部ト爲スモノ

三 他人ノ登録商標又ハ登録出願以前ヨリ他人ノ使用スル商標ト同一若

證據調ニ關スル書類ハ原本ヲ以テ受託判事ヨリ受訴裁判所書記ニ之ヲ送致シ其書記ハ之ヲ受領シタルコトヲ當事者ニ通知ス可シ

第二百八十條 受命判事又ハ受託判事カ證據調ノ期日ヲ定メタルトキハ其期日及ヒ場所ヲ當事者ニ通知ス可シ

第二百八十一條 外國ニ於テ爲ス可キ證據調ハ外國ノ管轄官廳又ハ其國駐在ノ帝國ノ公使若シハ領事ニ囑託シテ之ヲ爲ス其囑託ニ付テハ第五百五十二條及ヒ第五百五十五條ノ規定ヲ準用ス

第二百八十二條 受命判事又ハ受託判事ハ他ノ裁判所ニ於テ證據調ヲ爲ス可キコトノ至當ナル原因ノ爾後ニ生シタルトキハ其裁判所ニ證據調ヲ囑託スルコトヲ得此囑託ヲ爲シタルトキハ當事者ニ之ヲ通知ス可シ

第二百八十三條 受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調ノ際ニ爭チ生シ其爭ノ完結スルニ非サレハ證據調ヲ續行スルコトヲ得ス

クハ類似ニシテ同一商品ニ使用セントスルモノ

第三條 商標ノ登録ヲ受ケント欲スル者ハ一商標毎ニ明細書及見本ヲ添ヘ農商務大臣ニ出願スヘシ但其願書明細及見本ハ特許局ニ差出スヘシ
第四條 商標ノ登録ヲ出願スル者アルトキハ特許局長ハ特許局審査官ヲシテ其商標ヲ審査セシメ登録ヲ許スヘシト査定シ

且其判事之ヲ裁判スル權ナキトキハ其完結ハ受訴裁判所之ヲ爲ス
第二百八十四條 當事者ノ一方又ハ雙方證據調ノ期日ニ出頭セサルトキハ事件ノ程度ニ因リ爲シ得ヘキ限リハ證據調ヲ爲ス可シ
原告若クハ被告ノ出頭セサルカ爲ニ證據調ノ全部又ハ一分ヲ爲スコトヲ得サル場合ニ於テハ其退完又ハ補充ハ此カ爲メ訴訟手續ノ遲滯セサルトキ又ハ舉證者其過失ニ非スシテ前期日ニ出頭スル能ハサリシコトヲ疏明スルトキニ限り判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至マテ申立ニ因リ之ヲ命ス
第二百八十五條 裁判所ハ事件ノ未タ判決ヲ爲スニ熟ゼスト認ムルトキハ證據調ノ補充ヲ決定スルコトヲ得
第二百八十六條 證據調又ハ其續行ノ爲メ新期日ヲ定ムル必要アルトキハ舉證者又ハ當事者雙方前期日ニ出頭セサリシトキト雖モ職權ヲ以テ之ヲ定ム

タルモノハ農商務大臣ノ認可ヲ經テ商標原簿ニ登録シ其登録証下付ノ手續ヲナスヘシ

第五條 登録証ハ農商務大臣之ニ署名シ特許局長之ニ副署シ明細書及見本ヲ添ヘ之ヲ下付スルモノトス
第六條 商標專用ノ年限ハ二十年ト爲シ原簿登録ノ日ヨリ起算ス

第七條 商標ノ專用ハ農商務大臣ノ定ム

第二百八十七條 受訴裁判所ニ於テ證據調ヲ爲ストキハ其期日ハ同時ニ口頭辯論ヲ續行スル期日ナリトス
受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調ヲ爲ス可キコトヲ命シタルトキハ受訴裁判所ハ證據決定中ニ併セテ口頭辯論續行ノ期日ヲ定ムルコトヲ得若シ之ヲ定メサルトキハ證據調ノ終結後職權ヲ以テ其期日ヲ定メ之ヲ當事者ニ通知ス可シ
第二百八十八條 舉證者ハ裁判所ノ定ムル期間内ニ證據調ノ費用ヲ豫納ス可シ若シ其期間内ニ豫納セサルトキハ證據調ヲ爲サス但期間ノ滿了後ト雖モ豫納シタルトキハ訴訟手續ノ遲滯ヲ生ゼサル場合ニ限り證據調ヲ許ス

第六節 人証

第二百八十九條 何人ヲ問ハス法律ニ別段ノ規定ナキ限リハ民事訴訟ニ關シ裁判所ニ於テ証言スル義務アリ

第十二條 登錄商標
 主其營業ヲ賣與讓與
 シ又ハ他人ト其營業
 チ共ニスル場合ニ限
 リ其商標專用權ヲ賣
 與讓與シ若クハ共有
 トナスコトヲ得此場
 合ニ於テハ特許局ニ
 請求シ契約ノ登錄ヲ
 受クヘシ登錄ヲ受ケ
 サル契約ハ第三者ニ
 對シ法律上其效ナキ
 モノトス

テ呼出スニハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス其長官又
 ハ隊長ハ期日ヲ遵守セシムル爲ニ其呼出ヲ受ケタル者ノ闕勤ヲ許
 ス可シ若シ軍務上之ヲ許ス能ハサルトキハ其旨ヲ裁判所ニ通知シ
 且他ノ期日ヲ定ムル求ヲ爲ス義務アリ

**第二百九十四條 合式ニ呼出サレタル證人ニシテ正當ノ理由ナク出
 頭セサル者ニ對シテハ申立チシト雖モ決定ヲ以テ其不參ニ因リ生
 シタル費用ノ賠償及ヒ二十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ**

證人カ再度出頭セサル場合ニ於テハ更ニ費用ノ賠償及ヒ罰金ヲ言
 渡ス可シ又其勾引ヲ命スルコトヲ得

證人ハ右ノ決定ニ對シテ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止
 スル效力ヲ有ス

豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執
 行ハ軍事裁判所又ハ所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス其勾

一 登錄商標主相
 當ノ事故ナク
 シテ登錄ノ日
 附ヨリ六箇月
 ヲ經テ其商標
 ヲ使用セサル
 トキ

二 登錄商標主相
 當ノ事故ナク
 シテ其商標ノ
 使用チ一箇年
 間中止シタル
 トキ

三 登錄商標主其
 商標ヲ使用ス
 ル營業ヲ廢止
 シタルトキ

引ニ付テモ亦同シ

**第二百九十五條 證人其出頭セサリシコトヲ後日ニ正當ノ理由ヲ以
 テ辯解スルトキハ罰金及ヒ賠償ノ決定ヲ取消ス可シ**

證人ノ不參届及ヒ決定取消ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲ス
 コトヲ得

**第二百九十六條 皇族證人ナルトキハ受命判事又ハ受託判事其所在
 ニ就キ訊問ヲ爲ス**

各大臣ニ付テハ其官廳ノ所在地ニ於テ之ヲ訊問ス若シ其所在地外
 ニ滞在スルトキハ其現在地ニ於テ之ヲ訊問ス

帝國議會ノ議員ニ付テハ開會期間其議會ノ所在地ニ滞在中ハ其所
 在地ニ於テ之ヲ訊問ス

第二百九十七條 左ニ掲グル者ハ證言ヲ拒ムコトヲ得

第一 原告若シハ被告又ハ其配偶者ト親族ナルトキ但姻族ニ付

四 登録商標主其商標ヲ使用スル商品ノ數量産地品質等ニ關シ不實ノ事項ヲ附記シタルキ

五 登録商標主磨滅若シハ缺損シタル商標ヲ使用シタルトキ

第十四條 登録商標主其専用年限満期ノ後其商標ヲ續用セシムト欲スル者ハ更ニ其登録ヲ出願スルコトヲ得

テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ

第二 原告若シハ被告ノ後見ヲ受ケル者

第三 原告若シハ被告ト同居スル者又ハ雇人トシテ之ニ仕フル者

裁判長ハ訊問前ニ前項ノ者ニ證言ヲ拒ム權利アル旨ヲ告グ可シ

第二百九十八條 左ノ場合ニ於テハ證言ヲ拒ムコトヲ得

第一 官吏、公吏又ハ官吏、公吏トシテシ者カ其職務上默秘ス可キ義務事情ニ關スルトキ

第二 醫師、藥商、穩婆、辯護士、公證人、神職及ヒ僧侶カ其身分又ハ職業ノ爲メ委託ヲ受ケタルニ因リテ知リタル事實ニシテ默秘ス可キモノニ關スルトキ

第三 問ニ付テノ答辯カ證人又ハ前條ニ掲ケタル者ノ耻辱ニ歸スルカ又ハ其刑事上ノ誹謗ヲ招ク恐アルトキ

第十五條 登録商標主其登録商標ヲ毀損若シハ亡失シタルトキハ事由ヲ具シ再下付ヲ出願スルコトヲ得

第十六條 登録商標主其明細書若シハ見本ノ不完全ナルコトヲ發見シタルトキハ登録ノ効力ヲ全クスル爲メ改訂明細書若シハ見本ヲ添へ登録證ノ改訂ヲ出願スルコトヲ得但其商標ノ要部ニ變更ヲ生ズルモ

第四 問ニ付テノ答辯カ證人又ハ前條ニ掲ケタル者ノ爲メ直接ニ財產權上ノ損害ヲ生ゼシム可キトキ

第五 證人カ其技術又ハ職業ノ秘密ヲ公ニスルニ非サレハ答辯スルコト能ハサルトキ

証言拒絶ノ申立

何縣何郡何村何番地族籍職業

原告人何某ヨリ被告人何某トノ何年(何)第何號事件ノ証人トシテ御呼出相成候處本件訴訟ハ民事訴訟法第二百九十七條若クハ第二百九十八條(第何項)ニ該當スル關係有之ニ付民事訴訟法第二百九十七條若クハ第二百九十八條ニ依リ証言拒絶仕候也

年月日

何々裁判所

判事 何 某 殿

右

某 印

ノハ此限ニ在ラス
第十七條 商標ニ關シ出願又ハ請求スル者ハ左ノ手数料ヲ納ムヘシ

- 一 商標ノ登録ヲ出願スルトキ
- 一 商標ニ付商品一類毎ニ
- 金一圓
- 二 登録商標ノ賣與讓與又ハ共有契約ノ登録ヲ請求スルトキ
- 一 商標ニ付商品一類毎ニ

第二百九十九條 證人ハ第二百九十七條第一號及ヒ第二百九十八條

第四號ノ場合ニ於テ左ノ事項ニ付キ證言ヲ拒ムコトヲ得ス

第一 家族ノ出產婚姻又ハ死亡

第二 家族ノ關係ニ因リ生スル財產事件ニ關スル事實

第三 證人トシテ立會ヒタル場合ニ於ケル權利行為ノ成立及ヒ旨趣

旨趣

第四 原告若クハ被告ノ前主又ハ代理人トシテ係争ノ權利關係ニ關シ爲シタル行為

ニ關シ爲シタル行為

前條第一號、第二號ニ掲ケタル者其默秘ス可キ義務ヲ免除セラレタルトキハ證言ヲ拒ムコトヲ得ス

第三百條 證言ヲ拒ム證人ハ其訊問ノ期日前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ

又ハ期日ニ於テ其拒絕ノ原因タル事實ヲ開示シ且ツ之ヲ説明ス可シ

期日前ニ證言ヲ拒ミタル證人ハ期日ニ出頭スル義務ナシ

裁判所書記ハ拒絕ノ書面ヲ受領シ又ハ其陳述ニ付キ調書ヲ作りタルトキハ之ヲ當事者ニ通知ス可シ

第三百一條 拒絕ノ當否ニ付テハ受訴裁判所當事者ヲ審訊シタル後

決定ヲ以テ其裁判ヲ爲ス但第二百九十八條第一號ノ場合ニ於テ爲

シタル拒絕ノ當否ニ付テハ所屬廳又ハ最後ノ所屬廳ノ裁定ニ任ス

原告若クハ被告ガ出頭セザルトキハ出頭シタル者ノ申述ヲ斟酌シ

テ決定ヲ爲ス

右決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止ス

ル效力ヲ有ス

第三百二條 原因ヲ開示セスシテ證言ヲ拒ミ又ハ開示シタル原因ノ

棄却確定シタル後ニ之ヲ拒ミタルトキハ申立ヲ要セスシテ決定ヲ

以テ證人ニ對シ其拒絕ニ因リテ生シタル費用ノ賠償及ヒ四十圓以

- 三 登録證ノ再下付ヲ出願スルトキ
- 證書一枚毎ニ
- 金一圓
- 四 登録證ノ改訂ヲ出願スルトキ
- 一 商標ニ付商品一類毎ニ
- 金二圓
- 五 審判ヲ請求スルトキ
- 一 事件毎ニ
- 金七圓

第十八條 商標登録

又ハ其改訂登録證又ハ其續用登録證ヲ受ケル者ハ其商標ヲ使用スル物品一類毎ニ登録料金十圓ヲ納ムヘシ

第十九條 特許局ハ時々商標公報ヲ印刷シ衆庶ノ縦覽ニ供スヘシ其請求者アルトキハ相當代價ヲ以テ之ヲ拂下シルコトヲ得

第二十條 登録商標ニ關スル書類ノ謄本ヲ要スル者ハ特許局ニ之ヲ請求スルコト

ヲ得此場合ニ於テハ相當ノ手数料ヲ納ムヘシ

第二十一條 登録商標ノ專用權ヲ侵シタル者ハ其商標主ニ對シ損害賠償ノ責ニ任スヘシ

第二十二條 前條損害賠償ノ責ハ三年ヲ以テ期滿免除ノ期トス

第二十三條 他人ノ登録商標ナルコトヲ知リ之下同一又ハ類似ノ商標ヲ同一商品ニ使用シテ之ヲ販賣

下ノ罰金ヲ言渡ス

證人ハ費用ノ賠償及ヒ罰金ノ言渡ニ對シ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第二百三條 原告若クハ被告ハ相手方ト相手方ノ證人トノ間ニ第二百九十七條第一號乃至第三號ノ關係アルトキハ其證人ヲ忌避スルコトヲ得

第二百四條 忌避ノ申請ハ證人ノ訊問前ニ之ヲ爲スコシ此期限後ハ其前ニ忌避ノ原因ヲ主張スルヲ得サリシコトヲ疎明スルトキニ限り其證人ヲ忌避スルコトヲ得
忌避ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得
忌避ノ原因ハ之ヲ疎明ス可シ

証人忌避ノ申請

何府何市何町何番地族籍職業

証人

何

某

右何某ヲ原告人何某ト被告人何某間ノ何年(何)第何號何々請求事件ニ付(原告又ハ被告)ノ申請ニ依リ御呼出相成候處証人何某ハ(民事訴訟法第二百九十七條一號乃至三號)何々タルニ依リ民事訴訟法第二百三條ニ依リ忌避相成度此段申請仕候也

年月日

(原告人)

何

某印

何々裁判所

判事 何

某段

第二百五條 忌避ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

忌避ノ原因アリト宣言スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス
忌避ノ原因ナシト宣言スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

シタル者又ハ借ヲ知
 リ其商品ヲ受託販賣
 シタル者ハ十五日以
 上六月以上ノ重禁錮
 又ハ十圓以上百圓以
 下ノ罰金ニ處ス
 詐僞ノ所爲ヲ以テ
 登録ヲ受ケタル者
 又ハ登録ヲ受ケサ
 ル商標ニ登録ノ文
 字ヲ記シタル者又
 ハ情ヲ知り其商品
 ヲ受託販賣シタル
 者ハ罰前項ニ同シ
 第二十四條 前條ノ
 場合ニ於テハ違犯ノ
 商標ヲ沒收ス
 其商品ト分離スヘ

第三百六條 各證人ニハ其携帶ス可キ呼出狀其他適當ノ方法ヲ以テ
 人違ナラサルコトヲ判然ナラシメタル後訊問前各別ニ宣誓ヲ爲サ
 シム可シ
 然レトモ宣誓ハ特別ノ原因アルトキ殊ニ之ヲ爲サシム可キヤ否ヤ
 ニ付キ疑ノ存スルトキハ訊問ノ終ルマテ之ヲ延フルコトヲ得
 第三百七條 證人ハ訊問前ニ宣誓ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ良心ニ從
 ヒ眞實ヲ述ベ何事ヲモ黙秘セス又何事ヲモ附加セサル旨ノ誓ヲ宣
 フ可シ
 又訊問後ニ宣誓ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ベ何
 事ヲモ黙秘セス又何事ヲモ附加セサル旨ノ誓ヲ宣フ可シ
 第三百八條 判事ハ宣誓前ニ相當ナル方法ヲ以テ宣誓者ニ僞證ノ罰
 ヲ論示ス可シ
 第三百九條 宣誓ヲ拒ム證人ニ付テハ第三百條乃至第三百二條ノ規

カラサルモノハ商
 品ヲ破毀セシム

第二十五條 第二十
 三條第一項ノ犯罪ハ
 被害者ノ告訴ヲ待テ
 其罪ヲ論ス
 前項ノ場合ニ於テ
 告訴人ノ請求ニ依
 リ裁判官ハ假ニ其
 告訴ニ係ル物品ノ
 販賣ヲ差止ムルコ
 トヲ得
 第二十六條 此條例
 ナ犯シタル者ニハ刑
 法ノ數罪俱發ノ例ヲ
 用ヒス
 第二十七條 此條例

定テ適用ス

第三百十條 左ノ者ハ宣誓ヲ爲サシメヌシテ參考ノ爲メ之ヲ訊問ス
 ルコトヲ得
 第一 訊問ノ未時ヲ滿十六歳ニ達セサル者
 第二 宣誓ノ何物タルヤヲ了解スルニ必要ナル精神上ノ發達ノ
 缺クル者
 第三 刑事上ノ判決ニ因リ公權ヲ剝奪又ハ停止セラレタル者
 第四 第二百九十七條及ヒ第二百九十八條第三號並ニ第四號ノ
 規定ニ依リ證言ヲ拒絕スル權利アリテ之ヲ行使セサル者但第
 二百九十八條第三號並ニ第四號ノ場合ニ於テハ拒絕ノ權利ニ
 關スル事實ニ付キ證言ヲ爲ス可キコトヲ申立テラレタルトキ
 ニ限ル
 第五 訴訟ノ成績ニ直接ノ利害關係ヲ有スル者

施行ノ細則ハ農商務大臣之ヲ定ム

第二十八條 此條例

ハ明治廿二年二月一

日ヨリ施行ス

農商務省令

第一號別冊

特許條例施行細則

第一條 特許條例ニ

依リ差出ス願書ハ第

一號ヨリ第八號ニ至

ル書式ニ從ヒ之ヲ認

メ同條例第三十條ノ

手数料金額ニ相當ス

ル登記印紙ヲ貼用ス

ヘシ

第二條 明細書ニハ

第三百十一條 證人訊問ハ後ニ訊問ス可キ證人ノ在ラサル場所ニ於

テ各別ニ之ヲ爲ス

證人ノ供述互ニ齟齬シタルトキハ之ヲ對質セシムルコトヲ得

第三百十二條 證人訊問ハ證人ニ其氏名年齢身分職業及ヒ住居ヲ問

フヲ以テ始マル又必要ナル場合ニ於テハ其事件ニ於テ證言ノ信用

ニ關スル事情殊ニ當事者トノ關係ニ付テノ問ヲ爲ス可シ

第三百十三條 證人ニハ其訊問事項ニ付キ知リタルモノヲ牽連シテ

供述セシム可シ

證人ノ供述ヲ明白及ヒ完全ナラシメ且其知り得タル原因ヲ穿鑿ス

ル爲メ必要ナル場合ニ於テハ尙ホ他ノ問ヲ發ス可シ

第二百十四條 證人ハ其供述ニ換ヘテ書類ヲ朗讀シ其他覺書ヲ用非

ルコトヲ得ス但算數ノ關係ニ限リ覺書ヲ用ルコトヲ得

第二百十五條 陪席判事ハ裁判長ニ告ケテ證人ニ問ヲ發スルコトヲ

明細書文例ニ準シ左

ノ諸件ヲ記載スヘシ

一 發明ノ名稱

二 發明ノ目的及

性質ノ要領

三 圖面アルトキ

ハ其略解

四 發明ノ詳細說

明

五 改良發明ニ係

ルトキハ其原

發明トノ區別

六 特許請求ノ區

域

第三條 圖面ニハ製

圖例ニ準シ特許請求

ノ區域ヲ明了ナラシ

得

當事者ハ證人ニ對シ自ラ問ヲ發スルコトヲ得ス然レトモ當事者ハ

證人ノ供述ヲ明白ナラシムル爲メ其必要ナリトスル問ヲ發セシム

コトヲ裁判長ニ申立ツルコトヲ得

發問ノ許否ニ付キ異議アルトキハ裁判所ハ直チニ之ヲ裁判ス

第三百十六條 調書ニハ證人カ其訊問ノ前若クハ後ニ宣誓シタルヤ

又ハ宣誓セシメテ訊問ヲ受ケタルヤヲ記載ス可シ

第二百十七條 受訴裁判所ハ左ノ場合ニ於テ證人ノ再訊問ヲ命スル

コトヲ得

第一 證人訊問カ法律上ノ規定ニ違ヒタルトキ

第二 證人訊問ノ完全ナラサルトキ

第三 證人ノ供述カ明白ナラズ又ハ兩義ニ涉ルトキ

第四 證人カ其供述ノ補充又ハ更正ヲ申立ツルトキ

ムルニ必要ナル發明ノ部分ヲ示シ改良發明ニ係ルトキハ更ニ原發明ノ改良發明ト結合スヘキ部分ヲ示スヘシ

第四條 特許願書及明細書圖面ヲ同時ニ差出シ難キトキハ願書ノミチ差出シ置キ明細書圖面ハ願書ノ日附ヨリ三十日以内ニ之ヲ差出スコトヲ得此期限内ニ差出サレトキハ出願ヲ無効トス

前項期限内ニ明細

第五 此他裁判所カ再訊問ヲ必要トスルトキ

第三百十八條 左ノ場合ニ於テ證人ニ依レル證據調ハ受訴裁判所ノ部員一名ニ之ヲ命シ又ハ區裁判所ニ之ヲ囑託スルコトヲ得

第一 眞實ヲ探知スル爲メ現場ニ就キ證人ヲ訊問スルノ必要ナルトキ

第二 證人カ疾病其他ノ事由ノ爲メ受訴裁判所ニ出頭スル能ハサルトキ

第三 證人カ受訴裁判所ノ所在地ヨリ遠隔ノ地ニ在リテ其裁判所ニ出頭スルニ付キ不相應ノ時日及ヒ費用ヲ要スルトキ

第三百十九條 第二百九十四條、第二百九十五條、第三百二條及ヒ第三百九條ニ掲ケタル證人ニ對スル受訴裁判所ノ權ハ受命判事又ハ受託判事ニモ屬ス

證人カ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ理由ヲ開示シテ證言ヲ

書圖面ヲ差出ストキハ何年何月何日附何發明ノ願書ニ添フヘキモノナル

イチ記シタル書面ヲ添フヘシ

第五條 特許條例第八條ニ依リ改良發明ノ特許ヲ願出ルトキハ願書ニ特許證主承諾若シ承諾ヲ經ル能ハサルトキハ其事由書ヲ添ヘテ差出スヘシ

第六條 特許條例第二十六條ニ依リ特許證ノ改訂ヲ願出ルト

拒ミ又ハ宣誓ヲ拒ミ又ハ職權若クハ申立ニ因リ發シタル問ニ答ザルコトヲ拒ムトキハ此拒絕ノ常否ニ付キ裁判ヲ爲ス權ハ受訴裁判所ニ屬ス

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告若クハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得

證人ノ再訊問ハ受命判事又ハ受託判事ノ意見ヲ以テ之ヲ命スルコトヲ得

第三百二十條 證人ヲ申出テタル原告若クハ被告ハ其訊問ノ開始マテニ限り之ヲ拋棄スルコトヲ得

第三百二十一條 各證人ハ日當ノ辨濟及ヒ其出頭ノ爲ニ旅行ヲ要スルトキハ旅費ノ辨濟ヲ請求スルコトヲ得

此金額ノ拂渡ハ訊問期日ノ終リタル後直チニ之ヲ求ムルヲ得

キハ其事由ヲ記載シ
タル願書ニ改訂明細
書若クハ圖面ヲ添へ
現特許證並ニ附屬ノ
明細書圖面ト共ニ差
出スヘシ

前項ノ出願ヲ許可
スルトキハ特許局
長ハ此細則第三十
八條及第三十九條
ノ手續ニ依リ改訂
特許證ヲ送付スヘ
シ

第七條 特許條例第
二十七條ニ依リ明細
書ノ削除ヲ願出ルト
キハ其願書ニ明細書

ノ請求區域中削除ス
ル等部分ヲ記載シテ
差出スヘシ

前項出願ヲ許可
スルトキハ特許局
長ハ其證明書ヲ出
願人ニ送付スヘシ

第八條 願書ニ不完
全ノ廉アリト認メタ
ルトキハ特許局長ハ
其訂正ヲ出願人ニ通
知シ通知書ノ日附ヨ

リ三十日以内ニ之ヲ
訂正セシムヘシ此期
限内ニ訂正ヲ爲ササ
ルトキハ出願ヲ無効
トス

舉證者ノ豫納シタル金額不足スルトキハ職權ヲ以テ其不足額ヲ取
立ツ可シ

證入費用辨濟ノ請求書

一金 何圓 錢

日 當

一金 何圓 錢

旅 費

右原告人何某ト被告人何某間ノ何年(何)第何號何々事件ニ付証人ト

シ出頭シタル手當旅費日當辨濟相成度此段請求仕候也

年月日 証人

何

某印

何々裁判所

判事 何

某段

第七節 鑑定

第三百二十二條 鑑定ニ付テハ以下數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケサ
ル限リハ八證ニ付テノ規定ヲ準用ス

第三百二十三條 鑑定ノ申出ハ鑑定ス可キ事項ヲ表示シテ之ヲ爲ス

鑑定請求ノ申請

原告人何某ト被告人何某間ノ何年(何)第何號何々事件ニ付鑑定ヲ命

セラル可キ事項左ノ如シ

一 甲第何號ノ筆跡若クハ印影ハ第何號ト同筆跡印影ナルヤ

一 請求物件ノ何々ハ全ク腐敗シテ何々ノ用ニ足ラサルヤ否ヤ

右事項ニ付鑑定人ヲ鑑定シ鑑定ヲ命セラレ度此段申請仕候也

年月日

(原告人)

何

某印

何々裁判所

判事 何

某段

第三百二十四條 立會フ可キ鑑定人ノ選定及ヒ其員數ノ指定ハ受訴
裁判所之ヲ爲ス其裁判所ハ鑑定人ノ任命ヲ一名マテニ制限シ又ハ
何時ニテモ既ニ任命シタル者ニ代ヘ他ノ鑑定人ヲ任命スルコトヲ
得

裁判所ハ鑑定人トシテ訊問ヲ受クルニ適當ナル者ヲ指名ス可キ旨
ヲ當事者ニ催告スルコトヲ得

第九條 特許願書及
 明細書圖面ノ完備シ
 タルトキハ特許局長
 ハ其願書ニ順號ヲ附
 シ之ヲ出願人ニ通知
 スヘシ
 出願人前項ノ通知
 ヲ受ケタル後其出
 願ニ關シ書面ヲ差
 出ストキハ之ニ願
 書ノ順號ヲ記入ス
 ヘシ

當事者カ一定ノ者ヲ鑑定人ニ爲スコトヲ合意シタルトキハ裁判所
 ハ其合意ニ從テ可シ然レトモ裁判所ハ當事者ノ爲スコキ選定ヲ一
 定ノ員數ニ制限スルコトヲ得
 第三百二十五條 外國ノ書類又ハ產物ノ審査ヲ要スル場合ニ於テ必
 要ナル能力ヲ有スル本邦人ノ在ラサルトキハ裁判所ハ外國人ヲ鑑
 定人ニ任命スルコトヲ得
 第三百二十六條 左ニ掲グル者鑑定ヲ命セラレタルトキハ之ヲ爲ス
 義務アリ
 第一 必要ナル種類ノ鑑定ヲ爲ス爲ニ公ニ任命セラレタル者
 第二 鑑定ヲ爲スニ必要ナル學術、技藝若シハ職業ニ常ニ從事
 スル者又ハ學術、技藝若シハ職業ニ從事スル爲ニ公ニ任命セ
 ラレ若シハ授權セラレタル者
 右ノ外鑑定ヲ爲スコキ旨ヲ裁判所ニ於テ述ヘタル者ハ鑑定人タル

審査部ニ於テハ發
 明ノ種類ニ從ヒ各
 審査官ノ擔當ヲ定
 メ置キ願書ノ順號
 ニ從ヒ其審査ニ着
 手スヘキモノトス
 第十一條 左ノ願書
 ハ他ノ特許願書ニ先
 ナ處分ニ着手スヘキ
 モノトス
 一 特許條例第十
 二條ノ再審査
 請求ニ係ル特
 許願書
 二 同條例第二十
 六條ノ改訂願
 書及第二十七

義務ナキトキト雖モ鑑定ヲ爲ス義務アリ
 第三百二十七條 鑑定人ハ證人カ證言ヲ拒ムコトヲ得ルト同一ノ原
 因ニ依リ鑑定ヲ拒ム權利アリ
 官吏、公吏ハ其所屬廳ニ於テ異議アルトキハ之ヲ鑑定人トシテ訊
 問スルコトヲ得ス
 第三百二十八條 鑑定ヲ爲ス義務アル鑑定人出頭セズ又ハ鑑定ヲ拒
 ミタル場合ニ於テハ其者ニ對シ此カ爲ニ生シタル費用ノ賠償及ヒ
 罰金ヲ言渡スコシ但其鑑定人ヲ勾引スルコトヲ得ス
 第三百二十九條 鑑定人ハ其鑑定ヲ爲ス前ニ其鑑定人タル義務ヲ公
 平且誠實ニ履行ス可キ旨ノ誓ヲ宣フ可シ
 第三百三十條 受訴裁判所ハ其意見ヲ以テ左ノ諸件ヲ定ム可シ
 第一 鑑定人ノ意見ハ口頭又ハ書面ニテ之ヲ述ヘシム可キヤ
 第二 數名ノ鑑定人ヲ訊問ス可キ場合ニ於テ各意見カ異ナルト

條ノ削除願書

三 此細則第十二條ノ通知ニ依

テ明細書圖面以訂正ヲ終ル

タル特許願書

第十二條 審査官ニ於テ明細書圖面ニ不

完全ニ廉アリト認メ

タルトキハ特許局長

ハ其旨ヲ出願人ニ通

知シ通知書ヲ日附ヨ

リ六十日以内ニ訂正

書又ハ訂正圖面ヲ差

出サシムルハ此期限

内ニ差出サシムル

ルトキハ出願ヲ無効

キハ共同ニテ鑑定書ヲ作ラシム可キヤ又ハ各別ニ之ヲ作ラシム可キヤ

第三 口頭辯論ノ際鑑定人ノ總員又ハ其一名ヲシテ鑑定書ヲ説明セシム可キヤ

第四 鑑定ノ結果カ不十分ナルトキハ同一又ハ他人ノ鑑定人ヲ再ヒ鑑定ヲ爲サシム可キヤ

第三百三十二條 受訴裁判所ハ鑑定人ノ任命ヲ受命判事又ハ受託判事ニ委任スルコトヲ得

第三百二十四條及ヒ第三百三十條第一號並ニ第二號ノ規定ニ依リ受訴裁判所ニ屬スル權利有ス

第三百三十二條 鑑定人ハ日當旅費及ヒ立替金ノ辨濟ヲ請求スルコトヲ得

此場合ニ於テハ第三百二十一條ノ規定ヲ準用ス

鑑定人日當旅費ノ文例ハ第三百二十一條ヲ參觀スベシ

第三百三十三條 特別ノ智識ヲ要セシ過去ノ事實又ハ事情ニシテ其實驗アル者ノ訊問ニ因リテ確定ス可キトキハ人證ニ付テノ規定ヲ適用ス

第八節 書證

第三百三十四條 書證ノ申出ハ證書ヲ提出シテ之ヲ爲ス

第三百三十五條 舉證者其使用セントスル證書カ相手方ノ手ニ存スル旨ヲ主張スルトキハ書證ノ申出ハ相手方ニ其證書ヲ提出シ命セ

ノコトヲ申立テ之ヲ爲ス可シ

第三百三十六條 相手方ハ左ノ場合ニ於テ證書ヲ提出スル義務アリ

第一 舉證者カ民法ノ規定ニ從ヒ訴訟外ニ於テモ證書ノ引渡又

トス

第十三條 審査官ニ於テ發明ノ雛形若クハ見本ヲ必要ト認メ然レトキハ特許局長ハ其旨ヲ其願人ニ通知シ通知ノ日附ヨリ十九日以内ニ適當ノ雛形又ハ見本ヲ差出サシムルハ此期限内ニ差出サシムルハ出願ヲ無効トス

第十四條 出願人其出願申ニ係ル願書明細書圖面及ハ雛形見本等ニ過誤アルコトヲ發見シタルトキ發

明ノ要部ニ變更ヲ生
セサルモノニ限リ其
改訂又ハ改造ヲ請求
スルコトヲ得但查定
書若クハ特許通知書
ヲ發シタル後及審判
中ニ係ルモノ、訂正
又ハ改訂特許局長ニ
於テ必要ト認メタル
モノ、外之ヲ許サス
第十五條 特許例第
十三條ノ抵觸ハ左ノ
場合ニ於テ特許請求
區域ノ全部若クハ一
部擅着スルトキニ限
リ生スルモノトス
一 二箇以上ノ特

ハ提出ヲ求ムルコトヲ得ルトキ
第二 證書カ其旨趣ニ因リ舉證者及ヒ相手方ニ共通ナルトキ
第三百三十七條 相手方ハ其手ニ存スル證書ニシテ其訴訟ニ於テ舉
證ノ爲メ引用シタルモノヲ提出スル義務アリ準備書面中ニクミ引
用シタルトキト雖亦同シ
第三百三十八條 證書ノ提出ヲ命ゼシコトノ申立ニハ左ノ諸件ヲ揭
ク可シ
第一 證書ノ表示
第二 證書ニ依リ證ス可キ事實ノ表示
第三 證書ノ旨趣
第四 證書カ相手方ノ手ニ存スル旨ヲ主張スル理由タル事情
第五 證書ヲ提出ス可キ義務ノ原因ノ表示
證書提出ノ申請

許出願ノ發明
五ニ抵觸スル
トキ
二 特許出願ノ發
明及特許發明
日ニ於テ又ハ改訂出願
ニ係ル發明互
ニ抵觸スルト
キ
三 二箇以上ノ改
訂出願ニ發ル
發明互ニ抵觸
スルトキ
四 改訂出願ニ係
ル發明及特許
發明互ニ抵觸
スルトキ

原告人何某ト被告何某間ノ何年(何)第何號何々事件ニ付(原告若ク
ハ被告ヲシテ)左ノ證書ヲ提出ス可キトヲ申請ス
一 原告若クハ被告カ所有スル何年何月何某ヨリ何某ニ宛テタル何々ノ證書
二 前項ノ證書ハ本件ノ何々ヲ証スヘキモノナリ
三 項提出ス可キ證書ノ旨趣ニ何々トナリ
四 前項ノ證書ハ本件成立ノ當時原告若クハ被告ノ爲メ後日本件ニ關シ紛訟ヲ妨
止スル爲メ原告若クハ被告ノ手ニ在リシメタリ
五 前項ノ證書ハ本件ノ何々ヲ證スヘキ爲メ原告若クハ被告ノ手ニ存セシメタル
モノナレバ本件ニ關シテハ原告若クハ被告之ヲ提出スルノ義務アルモノトス
右事項ニ關シ原告若クハ被告ニ證書ヲ提出セシメラレシトテ申請ス
(原告人) 何 某 印
何々裁判所 何 某 段
第三百二十九條 裁判所ハ證書ニ依リ證ス可キ事實ノ重要ニシテ且
申立テ正當ナリト認ムル場合ニ於テ相手方カ證書ノ其手ニ存スル
コトヲ自白スルトキ又ハ申立ニ對シ陳述セサルトキハ證據決定ヲ

第十六條 牴觸之處
分ハ審査官ニ於テ其
牴觸ニ係ル發明ヲ特
許スヘキモノト査定
シタル後之ニ着手ス
ヘシ

第十七條 特許條例
第十三條ノ始末書ニ
ハ發明ヲ考案及完成

シタル年月日並ニ發
明ヲ圖面雛形又ハ見
本等ニ作リタル年月
日ヲ記載シテ其發明
ヲ附シ必要ノ證據ヲ
添フヘキモノトス

第十八條 前條ノ始
末書ヲ差出サシムル

以テ證書提出ヲ命ス

第三百四十條 相手方カ證書ヲ所持セサル旨ヲ申立ツルトキハ此申

立ノ眞實ナルヤ否ヤヲ定ムル爲メ又ハ證書ノ所在ヲ穿鑿スル爲メ

又ハ舉證者ノ使用ヲ妨グル目的ヲ以テ故意ニ證書ヲ隱匿シ若クハ

使用ニ耐ヘサラシメタルヤ否ヤヲ穿鑿スル爲メ本章第十節ノ規定

ニ從ヒテ相手方本人ヲ訊問ス可シ

相手方カ官廳ナルトキハ證書カ其官廳ノ保藏ニ係ラス又ハ其所在

ヲ開示スルコトヲ得サル旨ノ長官ノ證明書ヲ以テ訊問ニ換フ裁判

所ハ此證明書ヲ差出サシムル爲メ相當ノ期間ヲ定ム可シ

第三百四十一條 證書ヲ所持スルコトヲ自白シ又ハ之ヲ所持セスト

申立テサル相手方カ其證書ヲ提出ス可シトノ命ニ從ハス又ハ相手

方カ所持セスト申立テタル證書ニ付キ訊問ヲ受ケテ共述ヲ爲スコ

トヲ拒ミタルトキ又ハ舉證者ノ使用ヲ妨グル目的ヲ以テ故意ニ證

トキハ特許局長ハ相

當ノ期限ヲ定メ之ヲ

關係人ニ通知スヘシ

關係人前項ノ期限

内ニ始末書ヲ差出

サシムルトキハ其發

明ヲ特許願書ノ日

附ヨリ以前ニ完成

シタル旨ヲ以テ發

明ノ先後ヲ爭フコ

トヲ得ス

第十九條 關係人始

末書ヲ差出シタルト

キハ特許局長ハ之ヲ

對手人ニ送付シ相當

ノ期限ヲ定メ答辯書

ニ其事實ヲ證明スル

書ヲ隱匿シ若クハ使用ニ耐ヘサラシメタルコトノ明確ナルトキハ

舉證者ノ差出シタル證書ノ謄本ヲ正當ナルモノト看做ス若シ謄本

ニ差出ササルトキハ裁判所ハ其意見ヲ以テ證書ノ性質及ヒ旨趣ニ

付キ舉證者ノ主張ヲ正當ナリト認ムルコトヲ得

前條第二項ニ掲ケタル證明書ヲ裁判所ノ定メタル期間内ニ差出サ

サルトキハ相手方タル官廳ニ對シ前項ト同一ノ結果ヲ生ズル旨

第三百四十二條 舉證者其使用セントスル證書カ第三者ノ手ニ存ス

ル旨ヲ主張スルトキハ書證ノ申出ハ其證書ヲ取寄スル爲メ期間ヲ

定メシコトヲ申立テテ之ヲ爲ス

第三百四十三條 第三者ハ舉證者ノ相手方ニ於ケルト同一ナル理由

ニ因リ證書ヲ提出スル義務アリ然レトモ強テ證書ヲ提出セシムル

コトハ訴夫以テノミ之ヲ爲スコトヲ得

第三百四十四條 第三百四十二條ニ從ヒ申立ヲ爲スニハ第三百三十三

ニ必要ノ證據ニ添ヘテ差出サシムヘシ
 對手人答辯書ヲ差出シタル後審査官
 ニ於テ對手人ノ一方又ハ雙方ヲシテ
 尙ホ答辯ヲ爲サシムルコトヲ必要ト
 認メタルトキハ特許局長ハ亦前項ノ手續ヲ爲スヘシ
 第三十條 關係人始末書又ハ答辯書ニ過誤アルコトヲ發見シタルトキハ訂正書ヲ添ヘ其訂正ヲ請求スルコトヲ得但對手人答辯

八條第一號乃至第三號及ヒ第五號ノ要件ヲ履ミ且證據カ第三者ノ手ニ存スルコトヲ疏明ス可シ
 第三百四十五條 證書ニ依リ證ス可キ事實ノ重要ニシテ且其申立カ前條ノ規定ニ適スルトキハ裁判所ハ證書提出ノ期間ヲ定ム可シ
 第三者ニ對スル訴訟ノ完結シタルトキ又ハ舉證者カ訴ノ提起、訴訟ノ繼續又ハ強制執行ヲ遲延シタルトキハ相手方ハ前項ノ期間ヲ滿了前ト雖モ訴訟手續ノ繼續ヲ申立ツルコトヲ得
 第三百四十六條 舉證者其使用セントスル證書カ官廳又ハ公吏ノ手ニ存スル旨ヲ主張スルトキハ書證ノ申出ハ證書ノ送付ヲ官廳又ハ公吏ニ囑託セラレシコトヲ申立テテ之ヲ爲ス
 此規定ハ當事者カ法律上ノ規定ニ從ヒ裁判所ノ助力ナクシテ取寄スルコトヲ得ヘキ證書ニハ之ヲ適用セス
 官廳又ハ公吏カ第三百三十六條ノ規定ニ基キ證書ヲ提出スル義務

書ヲ差出シタル後ハ特許局長ニ於テ必要ト認メタルモノ、外其請求ヲ許サス
 第三十二條 審査官ニ於テ始末書又ハ答辯書ニ不明瞭ノ處アリ或認メタルトキハ特許局長ハ其旨ヲ差出人ニ通知シ相當ノ期限ヲ定メ訂正ヲ差出カシ得ヘシ
 第三十三條 前二條ニ依リ始末書又ハ答辯書ニ訂正ヲ加ヘタルトキハ特許局長ハ其訂正書ヲ對手ニ送

アル場合ニ於テ其送付ヲ拒ムトキハ第三百四十二條乃至第三百四十五條ノ規定ヲ適用ス
 第三百四十七條 證據決定ヲ爲シタル後第三百四十二條及ヒ第三百四十六條ノ規定ニ從ヒ證書ヲ申出テタル場合ニ於テ證書取寄ノ手續ニ爲ニ訴訟ノ完結ヲ遲延スルニ至ル可ク且裁判所ニ於テ原告若クハ被告カ訴訟ヲ遲延スル故意ヲ以テ又ハ甚シキ怠慢ニ因リ書證ヲ早く申出テサリシコトノ心證ヲ得タルトキハ申立ニ因リ其書證ノ申出ヲ却下スルコトヲ得
 第三百四十八條 口頭辯論ノ際證書ヲ提出スルニ於テハ其毀損若クハ紛失ノ恐アリ又ハ他ノ顯著ナル障礙アルトキハ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ證書ヲ提出ス可キ旨ヲ命ズルコトヲ得
 受命判事又ハ受託判事ハ證書ノ明細書及ヒ其原本ヲ調書ニ添附シ又證書ノ一分ノミ必要ナルトキハ第一百七條第二項ノ規定ニ從ヒテ

付スルハシ
第二十三條 發明ノ
 牴觸ヲ解除セントス
 ル者ハ査定前ニ其特
 許願書又ハ特許證書
 ハ改訂願書ノ取消又
 ハ其發明ノ牴觸部分
 ノ削除ヲ請求スヘシ
 前項ノ請求ヲ爲ス
 者アルトキハ特許
 局長ハ其牴觸ヲ解
 除シ之ヲ關係人ニ
 通知スヘシ
第二十四條 發明牴
 觸ノ審査ヲ受ケタル
 者ハ其審査ヲ受ケタ
 ル發明ト同一ノ發明

作リタル抄本チ之ニ添附ス可シ
第三百四十九條 公正證書ハ正本又ハ認證ヲ受ケタル謄本ヲ以テ之
 チ提出スルコトヲ得然レトモ裁判所ハ舉證者ニ正本ノ提出ヲ命ス
 ルコトヲ得
 私署證書ハ原本ヲ以テ之ヲ提出ス可シ若シ當事者カ未ダ提出セザ
 ル原本ノ真正ニ付キ一致シ只其證書ノ効力又ハ解釋ニ付テノミ爭
 チ爲ストキハ謄本ヲ提出スルヲ以テ足ル然レトモ裁判所ハ職權ヲ
 以テ舉證者ニ謄本ノ提出ヲ命スルコトヲ得
 提出シタル謄本ニ換ヘテ正本又ハ原本ヲ提出ス可キ旨ノ命ニ從ハ
 サルトキハ裁判所ハ心證ヲ以テ謄本ニ如何ナル證據力ヲ付ス可キ
 ヤヲ裁判ス
第三百五十條 舉證者ハ證書ヲ提出シタル後ハ相手方ノ承諾ヲ得ル
 トキニ限り此證據方法ヲ拋棄スルコトヲ得

ニ就キ先ニ牴觸シタ
 ル特許願書又ハ特許
 証若クハ改訂願書ニ
 對シテ再ヒ牴觸ノ審
 査ヲ受ケルコトヲ得
第二十五條 審判ハ
 書類及口頭ノ二種ト
 シ特許條例第十八條
 ニ依リ審判長及二人
 以上ノ審判官合議ヲ
 以テ之ヲ爲スヘシ
 口頭審判ハ關係人
 ノ一方又ハ雙方ニ
 於テ請求シ若クハ
 審判長ニ於テ必要
 ト認メタルトキ公

第三百五十一條 公正證書又ハ檢眞ヲ經タル私署證書ヲ偽造若クハ
 變造ナリト主張スル者ハ其證書ノ眞否ヲ確定センコトノ申立ヲ爲
 ス可シ
 此場合ニ於テハ裁判所ハ其證書ノ眞否ニ付キ中間判決ヲ以テ裁判
 チ爲ス可シ
第三百五十二條 私署證書ノ眞否ニ付キ爭アルトキハ裁判所ハ舉證
 者ノ申立ニ因リ檢眞ヲ爲スコトヲ得
 私証官檢眞ノ申請
 原告何某ト被告何某間ノ何年(何)第何號何々事件ニ付檢眞ヲ求ムル
 事項左ノ如シ
 一原告若クハ被告ヨリ提出ノ證書ハ偽證ナリト信スルヲ以テ其筆跡又印影ニ付
 檢眞ヲ求ム
 右證書ノ檢眞相成候也
 年月日 (原告人) 何 某印
 (被告人)

開シテ之ヲ爲スハ

第二十六條 審判ヲ

請求スル者ハ其請求ノ要點、理由及發明方法ヲ記載シタル請求書ヲ認メ特許條例第三十條ノ手数料金額ニ相當スル登記印紙ヲ貼用シテ差出ス

第二十七條 審判請

求書ヲ差出シタル者アルトキハ許特局長ハ之ヲ審判部ニ配付シ審判長ハ其請求書ヲ對手人ニ送付シ相

何々裁判所 判事 何 某段

第三百五十三條

私署證書ノ檢真ハ總テノ證據方法及ヒ手跡若シハ印章ノ對照ニ因リテ之ヲ爲ス

證書ノ眞否ヲ證セントスル當事者ハ裁判所ノ定ムル期間内ニ手跡若シハ印章ヲ對照スル爲ニ適當ナル書類ヲ提出ス可シ

眞正ナリト自白又ハ證明シタル適當ノ對照書類ナキトキハ對照ノ爲メ原告若シハ被告ニ對シ裁判所ニ於テ一定ノ語辭ノ手記ヲ命ス

ルコトヲ得其手記シタル語辭ハ調書ノ附録トシテ之ニ添附ス可シ
裁判所ハ手跡若シハ印章ヲ對照シタル結果ニ付キ自由ナル心證ヲ以テ裁判ヲ爲シ又必要ナル場合ニ於テハ鑑定ヲ爲サシメタル後之ヲ爲ス
原告若シハ被告カ裁判所ノ定メタル期間内ニ對照書類ヲ提出セザ

當ノ期限ヲ定メ答辯書ヲ差出サシムヘシ

對手人答辯書ヲ差出シタル後尙ホ對

手人ノ一方又ハ雙方ヲシテ答辯ヲ爲

サシムルコトヲ必要ト認メタルトキ

ハ審判長ハ亦前項ノ手續ヲ爲スヘシ

第二十八條 審判請

求書又ハ答辯書ヲ差出ストキハ其記載ノ事實ヲ發明スルニ必

要ノ證據ヲ添フヘシ

第二十九條 審判請

求書又ハ答辯書ヲ差

ルトキ又ハ對照ス可キ語辭ヲ手記ス可キ裁判所ノ命ニ對シ十分ナル辯解ヲ爲サシテ之ニ從ハサルトキ又ハ書據ヲ變シテ手記シタルトキハ證書ノ眞否ニ付テノ相手方ノ主張ハ其他ノ證據ヲ要セス
シテ之ヲ眞正ナリト看做スコトヲ得

第三百五十四條 提出シタル證書ハ直チニ之ヲ還付シ又適當ナル場合ニ於テハ其謄本ヲ記錄ニ留メテ之ヲ還付ス可シ

然レトモ證書ノ偽造又ハ變造ナリト爭フトキハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後ニ非サレハ之ヲ還付スルコトヲ得ス

第三百五十五條 公正證書ノ偽造若シハ變造ナルコトヲ眞實ニ反キテ主張シタル原告若シハ被告ニ惡意若シハ重過失ノ責アルトキハ五十圓以下ノ過料ヲ言渡ス

又私書證書ノ眞正ナルコトヲ眞實ニ反キテ爭フトキハ前項ト同一ナル條件ヲ以テ二十圓以下ノ過料ヲ言渡ス

出シタル者其請求
又ハ答辯書ニ過誤
アルコトヲ發見シ
タルトキハ訂正書
ヲ添ヘ其訂正ヲ請
求スルコトヲ得但
對手人答辯書ヲ差
出シタル後ハ審判
長ニ於テ必要ト認
メタルモノ、外其
請求ヲ許サズ

第三百五十六條 本節ノ規定ハ事件ノ性質ニ於テ許ス限リハ事跡ノ
紀念又ハ權利ノ證徴ノ爲メ作りタル劃符界標等ノ如キモノニモ之
ヲ準用ス

第九節 檢證

第三百五十七條 檢證ノ申出ハ檢證物ヲ表示シ及ヒ證ス可キ事實ヲ
開示シテ之ヲ爲ス

檢證ノ申請

原告何某ト被告何某間ノ何年(何)第何號事件ニ付檢證申立ヲナス

一何々ノ物件ハ何々ナルヤ又何々境界ハ何レヲ以テ境界トスルヤ(例之強物ニ付

テノ爭ナレハ其強物ノ比較若クハ境界ノ爭ナレハ其境界ノ臨檢ノ如キ)

一本件請求事件ニア原告若クハ被告ハ何レヲ何々ト云フモ何々ハ何々事實ナル

一又原告若クハ被告ハ何々ヨリ境界ナリト云フモ何々ト信ズル事

右物件ニ付檢證相成度此段請求仕候也

年月日

(原告人)

何

某印

何々裁判所

何

某段

某印

正書ヲ差出サシムハ

第三十一條 審判請

求書又ハ答辯書ニ訂

正ヲ加ヘタルトキハ

審判長ハ其訂正書ヲ

對手人ニ送付スヘシ

第三十二條 審判請

求書始末書及紙觸又

ハ審判ニ關スル答辯

書並ニ訂正書ハ審判

長又ハ特許局長ノ定

メタル期限内ニ差出

スニアラサレハ之ヲ

受理セス

第三十三條 口頭審

判ヲ爲ストキハ審判

第三百五十八條 受訴裁判所ハ檢證ヲ爲スニ際シ鑑定人ノ立會ヲ命

スルコトヲ得

受訴裁判所ハ檢證及ヒ鑑定人ノ任命ヲ其部員一名ニ命シ又ハ區裁

判所ニ囑託スルコトヲ得

第三百五十九條 檢證ヲ爲ス際發見シタル事項ハ調書ニ記載シテ之

ヲ明確ナラシメ又必要ナル場合ニ於テハ調書ノ附録トシテ添附ス

可キ圖面ヲ作り之ヲ明確ナラシム可シ

若シ既ニ記録ニ圖面ノ存スルトキハ之ヲ檢證物ニ對照シ必要ナル

場合ニ於テハ之ヲ更正ス可シ

第十節 當事者本人ノ訊問

第十節 當事者本人ノ訊問

第三百六十條 當事者ノ提出シタル許ス可キ證據ヲ調ヘタル結果ニ

因リ證ス可キ事實ノ眞否ニ付キ裁判所カ心證ヲ得ルニ足ラサルト

キハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ原告若クハ被告ノ本人ヲ訊問スル

長ハ其期日ヲ定メ之
ヲ關係人ニ通知スヘ

關係人前項ノ通知
ヲ受ケ其期日ニ出
頭セサルトキハ欠
席ノ儘口頭審判ヲ

終結スルモノトス

第三十四條 審判ヲ

終結シタルトキハ審
判長ハ其審決書ヲ關
係人ニ送付スヘシ口
頭審判ノ場合ニ在テ
ハ尙ホ之ヲ言渡スヘ
キモノトス

第三十五條 審判ヲ

請求シタル者其請求

コトヲ得

當事者本人ノ訊問申請

何年(何)第何號何々事件代理人ノ陳述又ハ代理人ハ何々事項ノ證明
ヲナシ得サルニ依リ如斯ニテハ充分ナル心證ヲ得サルヲ以テ當事
者本人ヲ御訊問被成下度此段申請仕候也

年 月 日 (原告人)

何

某印

何々裁判所

判事 何

某印

第三百六十二條 裁判所ハ原告若クハ被告ヲ訊問スルコトヲ決定シ

且原告若クハ被告ノ自身カ決定言渡ノ際在廷スルトキハ直ニ其
訊問ヲ爲シ以テ通例トス

第三百六十三條 訊問ヲ受クル原告若クハ被告ハ供述ニ換ヘテ書類

ヲ朗讀シ其他覺書ヲ用サルコトヲ得且但算數ノ關係ニ限リ覺書ヲ
用サルコトヲ得

第三百六十三條 原告若クハ被告カ十分ナル理由ナクシテ供述スル

ヲ取消サント欲スル
トキハ審判終結前ニ
其旨ヲ申出シヘシ

第三十六條 審判ノ

請求ヲ取消シ又ハ之
ヲ放棄シタル者ハ審
判上敗者ト見做スヘ
シ但對手人ノ承諾ヲ
經テ取消シタル者ハ
此限ニアラス

第三十七條 特許條

例第十二條ノ再審査
及同條例第十五條ノ
審判請求期限ハ査定
書ノ日附ヨリ起算シ
九十日トス此期限ヲ
經過スルトキハ再審

コトヲ拒ミ又ハ訊問期日ニ出頭セサルトキハ裁判所ハ其意見ヲ以
テ訊問ニ因リテ舉證ス可キ相手方ノ主張ヲ正當ナリト認ムルコト
ヲ得

第三百六十四條 訴訟無能力者ノ法律上代理人カ訴訟ヲ爲ストキハ
法律上代理人若クハ訴訟無能力者ヲ訊問ス可キヤ又ハ此等ノ者ヲ
共ニ訊問ス可キヤ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ決定ス

法律上代理人數人アルトキハ其一人ヲ訊問ス可キヤ又ハ數人ヲ訊
問ス可キヤモ亦前項ニ同シ

第十二節 證據保全

第三百六十五條 證據ヲ紛失スル恐アリ又ハ之ヲ使用シ難キ恐アル

トキハ證據保全ヲ爲シ證人若クハ鑑定人ヲ訊問又ハ檢證ヲ申立ツ
ルコトヲ得

第三百六十六條 訴訟カ既ニ繫屬シタルトキハ此申請ハ受訴裁判所

查又ハ審判ヲ請求スルコトヲ得ス
 第三十八條 特許ナ
 與フルトキハ特許局
 長ハ特許料納付用紙
 ナ添ヘテ特許通知書
 ナ出願人ニ送付スハ
 出願人前項ノ通知
 書ヲ受ケタルトキハ
 特許料納付用紙ニ
 特許條例第三十二
 條ノ特許料金額ニ
 相當スル登記印紙
 ナ貼用シ通知書ノ
 日附ヨリ六十日以
 内ニ差出スヘシ此

ニ之ヲ爲ス可キ
 切迫ナル危險ノ場合ニ於テハ訊問ヲ受ク可キ者ノ現在地又ハ檢證
 ス可キ物ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所ニ申請ヲ爲スコトヲ得
 訴訟ノ未タ繫屬セサルトキハ前項ニ記載シタル區裁判所ニ申請ヲ
 爲スコトヲ要ス
 右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得
 第三百六十七條 申請ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス
 第一 相手方ノ表示
 第二 證據調ヲ爲スコキ事實ノ表示
 第三 證據方法殊ニ證人若クハ鑑定人ノ訊問ヲ爲スコキトキハ
 其表示
 第四 證據ヲ紛失スル恐アリ又ハ之ヲ使用シ難キ恐アル理由此
 理由ハ之ヲ説明ス可シ

證據保全ノ申請

期限内ニ差出サ
 ルトキハ出願ヲ無
 効トス

第三十九條 出願人
 特許料ヲ納付シタル
 トキハ特許局長ハ其
 納付ノ日ヲ以テ特許
 原簿ニ登録シ其旨ヲ
 出願人ニ通知シ三十
 日以内ニ特許證ヲ送
 付スヘシ
 第四十條 特許條例
 第八條第二項ノ場合
 ニ於テ特許證主ノ承
 諾ヲ經ル能ハスシテ
 出願シタル者ニ特許
 ナ與フルトキハ特許

何府何市何町何番地族籍職業
 何縣何郡何村何番地族籍職業
 何府何市何町何番地族籍職業
 何縣何郡何村何番地族籍職業
 被告
 何府何市何町何番地族籍職業
 何縣何郡何村何番地族籍職業
 原告
 何府何市何町何番地族籍職業
 何縣何郡何村何番地族籍職業
 一 本件ニ付キ原告若クハ被告ハ何々々々請求スルモノ何々ナルヲ以テ何々(例之證人
 ナ調ル)ノ證據ヲ調査スベキ
 一 前事實ニ關シ何某ハ必用ノ證人ナルニ他ニ逃シ若クハ病氣危篤ナルヲ以テ證
 人ヲ訊問スルノ物件ノ滅盡スルノ又ハ變性スルノ有之ハ證據調ニ關シ願ル
 困難ノ事實アルヲ以テ之ヲ鑑定テ命スル
 右ノ理由ニヨリ証人ノ訊問又ハ鑑定人ヲ御命ノ上證據保全被下度
 此段申請仕候也
 月 日 (原告人) 何 某印
 被告(人) 何 某印
 何々裁判所 判事 何 某印

局長ハ其旨ヲ特許證主ニ通知シ報酬ニ就キ協議ヲ爲サシムルニ必要ノ手續ヲ爲スヘシ

其協議整ハサルトキハ特許局長ハ農商務大臣ノ相當ト認ムル報酬ノ種類數額方法等ヲ特許通知ト同時ニ出願人ニ通知シ特許原簿登錄ト同時ニ之ヲ特許證主ニ通知スヘシ

第四十一條 特許證ハ第九號書式ニ依リ

第三百六十八條 申請ニ付テノ決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

申請ヲ許容スル決定ニハ證據調ヲ爲ス可キ事實及ヒ證據方法殊ニ訊問ス可キ證人若クハ鑑定人ノ氏名ヲ記載ス可シ此決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第三百六十九條 證據調ノ期日ニハ申立人ヲ呼出シ又決定及ヒ申請ノ廢本ヲ送達シテ其權利防衛ノ爲ニ相手方ヲモ呼出ス可シ切迫ナル危險ノ場合ニ於テハ適當ナル時間ニ相手方ヲ呼出スコトヲ得サリシトキト雖モ證據調ヲ妨クルコト無シ

第三百七十條 證據調ハ本章第六節、第七節及ヒ第九節ノ規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス

證據調ノ調査ハ證據調ヲ命シタル裁判所ニ之ヲ保存ス可シ各當事者ハ證據調ノ調査ヲ訴訟ニ於テ使用スル權利アリ

調製シ特許原簿登錄ノ日ヲ以テ其日附ト爲ス

特許條例第二十五條又ハ第二十六條

ハ場合ニ於テ特許證ヲ下付スルトキ

ハ特許局長ハ其事由並ニ下付ノ年月

日ヲ稟書シ之ニ署名スヘシ

第四十二條 出願人他人ノ記名又ハ他人

ト連名ニテ特許證ヲ受ケント欲スルトキ

ハ特許簿登錄ノ日マテニ其旨ヲ申出ツヘ

受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ再度ノ證據調ヲ命シ又ハ既ニ調ヘタル證據ノ補充ヲ命スルコトヲ得

第三百七十一條 證據調ハ第三百六十五條ノ條件ナキトキト雖モ相手方ノ承諾ニ因リ之ヲ許スコトヲ得

第三百七十二條 申立人カ相手方ヲ指定セサルトキハ申立人自己ノ過失ニ非スシテ相手方ヲ指定シ能ハサルコトヲ證明スル場合ニ限リ其申請ヲ許ス

申請ヲ許容シタルトキハ裁判所ハ其知レサル相手方ノ權利防衛ノ爲ニ臨時代理人ヲ任スルコトヲ得

第二章 區裁判所ノ訴訟手續

第一節 通常ノ訴訟手續

第三百七十三條 區裁判所ノ通常ノ訴訟手續ニ付テハ區裁判所ノ構成又ハ第一編及ヒ本節ノ規定ニ依リ差異ノ生セサル限りハ地方裁

シ
 第四十三條 特許條例第二十二條ニ依リ賣與、讓與、共有又ハ書入ノ登録ヲ請求スルトキハ第二十號及第十一號書式ニ從ヒ請求書ヲ認メ同條例第三十條ノ手数料金額ニ相當スル登記印紙ヲ貼用シ約定書ヲ添ヘテ差出スヘシ
 前項ノ請求アルトキハ特許局長ハ其約定書ヲ契約原簿ニ登録シ約定書ニ登録簿ノ證明ヲ捺

判所ノ訴訟手續ニ付テノ規定ヲ適用ス
 第三百七十四條 訴ハ書面又ハ口頭ヲ以テ裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得
 第三百七十五條 起訴アリタルトキハ裁判所書記ハ訴狀ヲ被告ニ送達スル手續ヲ爲ス
 準備書面ノ交換ハ之ヲ爲スコトヲ要セス
 第三百七十六條 原告若シハ被告ハ其申立及ヒ事實上ノ主張ニシテ豫メ通知スルニ非サレハ相手方ニ於テ之ニ對シ陳述ヲ爲シ得ヘカ
 ラサルモノヲ口頭辯論ノ前直接ニ相手方ニ通知スルコトヲ得
 第三百七十七條 口頭辯論ノ期日ト訴狀送達トノ間ニ少ナクトモ三日ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス急迫ナル場合ニ於テハ此時間ヲ二十四時マテニ短縮スルコトヲ得
 送達ヲ外國ニ於テ爲スコキトキハ事情ニ應ジテ時間ヲ定ム可シ

シテ之ヲ請求人ニ送付スヘシ
 第四十四條 特許局ニ差出ス書類ハ一事件毎ニ一通宛認メ之ニ差出ノ年月日及差出人ノ住所、氏名、明細書及圖面ニハ差出人ノ氏名ヲミテ記載シテ捺印スヘシ
 審判請求書、始末書及牴觸又ハ審判ニ關スル答辯書及訂正書ニハ對手人ノ住所ノ氏名ヲモ記載シ正本一通ノ外對手人ノ員數ニ

第三百七十八條 當事者ハ通常ノ裁判日ニ於テハ豫メ期日ノ指定ナクシテ裁判所ニ出頭シ訴訟ニ付キ辯論ヲ爲スコトヲ得
 此場合ニ於テ訴ノ提起ハ口頭ノ演述ヲ以テ之ヲ爲ス
 第三百七十九條 數箇ノ妨訴ノ抗辯ヲ本案ノ辯論前同時ニ提出ス可キ規定ハ裁判所管轄邊ノ抗辯ニ限り之ヲ適用ス
 被告ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ本案ノ辯論ヲ拒ム權利ナシ然レトモ裁判所ハ職權ヲ以テ右抗辯ニ付キ分離シタル辯論ヲ命ズルコトヲ得
 第三百八十條 第二百二十三條、第二百六十六條乃至第二百七十二條ノ規定ハ區裁判所ノ訴訟手續ニ之ヲ適用セス
 然レトモ原告若クハ被告ノ申立及ヒ陳述ハ裁判所ノ意見ニ從ヒ訴訟關係ヲ十分ニ明確ナラシムル爲メ必要ナルモノニ限り調書ヲ以テ之ヲ明確ナラシム可シ
 第三百八十一條 訴ヲ起サントスル者ハ和解ノ爲メ請求ノ目的物ヲ

應シ副本ヲ添可シ
 第四十五條 前條ノ
 書類ハ字體明瞭ニ認
 メ若シ其書類中文字
 ナ挿入又ハ削除シ若
 シシハ欄外ニ記入シ
 タルトキハ之ニ認印
 シ地方廳ヲ經由セス
 直ニ特許局ニ差出ス
 第四十六條 特許局
 ニ差出シタル書類ハ
 其下戻ヲ請求スルコ
 ト差得ス
 第四十七條 特許局
 ニ差出ス書類等ニシ
 テ執務時間ノ最後一

開示シテ相手方ヲ其普通裁判籍ヲ有スル區裁判所ニ呼出ス可キコ
 トヲ申立ツルコトヲ得其申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコト
 ヲ得
 當事者雙方出頭シ和解ノ調ヒタルトキハ調書ヲ以テ之ヲ明確ナラ
 シム可シ
 和解ノ調ヒサルトキハ當事者雙方ノ申立ニ因リ其訴訟ニ付キ直チ
 ニ辯論ヲ爲ス此場合ニ於ケル訴ノ提起ハ口頭ノ演述ヲ以テ之ヲ爲
 ス
 相手方カ出頭セス又ハ和解ノ調ヒサルトキハ此カ爲ニ生シタル費
 用ハ訴訟費用ノ一分ト看做ス
 和解ノ申請
 申請人 何府何市何町何番地族籍職業 某
 何縣何郡何村何番地族籍職業 某

時間内又ハ休日ニ到
 着シタルモノハ次ノ
 執務日ニ接受シタル
 モント見做スヘシ
 第四十八條 出願人
 代人ヲ使用スルトキ
 ハ委任狀寫ヲ添ヘ其
 旨ヲ届出ルヘシ
 代人ニ不都合ノ事
 アリト認メタルト
 キハ特許局長ニ於
 テ其代理ヲ差止ム
 第四十九條 特許局
 ニ差出シタル雛形又
 ハ見本ノ不用ニ屬シ
 タルトキハ特許局長

和解ノ目的物
 一(計算事件)
 (妻若クハ妾子離婚)
 何々.....(離婚ナレバ其來歴)(計算事件ナレバ其計算ノ根據
 ヲ記ス可シ)
 右申請人ヨリ被申請人ニ係ル前記ノ目的物ニ付テハ到底訴訟ヲ爲
 スヲ免レスト雖モ其前ニ於テ一應和解ヲ試ミ度候間被申請人何某
 御呼出相成和解被成下度此段申請仕候也
 年月日 申請人 右 某
 何々裁判所 何 某段
 第二節 督促手續
 第三百八十二條 一定ノ金額ノ支拂其他ノ代替物若クハ有價證券ノ

ハ其受取方ヲ差出人ニ通知スヘシ差出人其通知書ノ日附ヨリ九十日以内ニ受取方ヲ爲サ、ルトキハ特許局長ニ於テ適宜處分スヘキモノトス

第五十條 已テ得サル事故ノ爲メ此細則ニ定ムル期限内ニ書類見本又ハ雛形ヲ差出シ又ハ出頭シ難キト等ハ其事由ヲ記載シ期限内ニ延期請求書ヲ差出スコトヲ得前項ノ請求ヲ相當ナリト認メタルト

一定ノ數量ノ給付ヲ目的トスル請求ニ付キ債權者ハ通常ノ訴訟手續ニ依ラスシテ督促手續ニ依リ條件附ノ支拂命令ヲ債務者ニ對シ發センコトヲ申立ツルコトヲ得

申請ノ旨趣ニ依レハ申請者反對給付ヲ爲スニ非サレハ其請求ヲ主張スルコトヲ得サルトキ又ハ支拂命令ノ送達ヲ外國ニ於テ爲シ若クハ公示送達ヲ以テ爲ス可キトキハ督促手續ヲ許サス

第三百八十三條 支拂命令ハ區裁判所之ヲ發ス

此命令ハ區裁判所ノ第一審ノ事物ノ管轄ノ制限ナキモノト看做シ通常ノ訴訟手續ニ於テル訴ノ提起ニ付キ普通裁判籍又ハ不動産上裁判籍ノ屬ス可キ區裁判所ノ管轄ニ專屬ス

第三百八十四條 支拂命令ヲ發スルコトノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

此申請ハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

キハ特許局長又ハ審判長ハ更ニ期限ヲ定メ之ヲ請求人及關係人ニ通知スヘシ

第五十一條 特許證主ハ特許局長ノ差圖ニ從ヒ陳列用ノ爲メ其發明ノ雛形又ハ見本ヲ差出スヘシ

第五十二條 特許證主ハ特許條例第二十條ニ依リ特許品又ハ其上包等ニ特許ノ二字特許證ノ日附及特許ノ年限ヲ標記スヘシ

第一 當事者及ヒ裁判所ノ表示

第二 請求ノ一定ノ數額、目的物及ヒ原因ノ表示若シ請求ノ數額ナルトキハ其各箇ノ一定ノ數額、目的物及ヒ原因ノ表示

第三 支拂命令ヲ發センコトノ申立

支拂命令ノ申請

何府何市何町何番地族籍職業
何縣何郡何村何

申請人 何

被申請人 何

請求ノ目的物

一金何百圓 (若クハ物品又ハ公債) 貸付元金
證書何枚トノ如シ 自何年何月日利 子
一金何圓…………… 至何年何月日 子

合計金何百何十圓

被申請人ニ對シ何年何月何日限リ何々(金員又ハ物品)ヲ返濟ス可キ
處期日ニ至ルモ支拂又ハ引續ヲ爲サ、ルニ依リ此金額物品並ニ督

第五十三條 特許ヲ相續シタルトキ又ハ特許證主氏名ヲ變換シタルトキハ三十日以内ニ其旨ヲ届出ツヘシ

第五十四條 特許ヲ與ヘタルトキ、特許證ノ改訂又ハ明細書ノ削除ヲ許可シタルトキ、特許ヲ取消シ又ハ無効トシタルトキ、及ヒ其他特許ニ關シ必要ノ場合ニ於テハ特許局長ハ官報並ニ特許公報ヲ以テ之ヲ廣告スヘシ

促金何十錢ニ付支拂命令ヲ發セラレ度此段申請仕候也

年月日 申請人 右 某

何々裁判所 判事 何 某段

第三百八十五條 裁判所ハ申請ヲ調査シ其申請カ前三條ノ規定ニ適當セス又ハ申請ノ旨趣ニ於テ請求ノ理由ナク又ハ現時理由ナキコトノ顯ハルルトキハ其申請ヲ却下ス

請求ノ一分ノミニ付キ支拂命令ヲ發スルコトヲ得サルトキハ亦其申請ヲ却下ス然レトモ數箇ノ請求中或ルモノニ理由ナクシテ其他ノモノニ理由アリト見ユルトキハ其理由アリト見ユルモノニ限り申請ヲ許容ス
右却下ノ命令ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス然レトモ通常ノ訴訟手續ニ依リ追訴スルヲ妨クルコト無シ

(書式略ス)

農商務省令第二號 意匠條例施行細則ヲ定ムルコト別冊ノ如シ

明治廿二年 一月四日

農商務大臣 伯爵井上 馨

農商務省令第二號別冊

意匠條例施行細則 第一條 意匠條例ニ依リ差出ス願書ハ第一號ヨリ第七號ニ至ル書式ニ從ヒ之ヲ認

第三百八十六條 支拂命令ハ豫メ債務者ヲ審訊セスシテ之ヲ發ス

支拂命令ニハ第三百八十四條第一號及ヒ第二號ニ掲ケタル申請ノ要件ヲ記載シ且即時ノ強制執行ヲ避ケント欲セハ此命令送達ノ日ヨリ十四日ノ期間内ニ請求ヲ満足セシメ及ヒ其手續ノ費用ニ付キ定ムル數額ヲ債權者ニ辨濟ス可ク又ハ裁判所ニ異議ヲ申立ツ可キ旨ノ債務者ニ對スル命令ヲ記載ス可シ

前項ノ期間ハ爲替ヨリ生スル請求ニ付テハ二十四時間其他ノ請求ニ付テハ申立ニ因テ三日マテ之ヲ短縮スルコトヲ得

第三百八十七條 權利拘束ノ效力ハ支拂命令ヲ債務者ニ送達スルヲ以テ始マル

支拂命令ノ送達ハ之ヲ債權者ニ通知ス可シ

第三百八十八條 債務者ハ支拂命令ニ對シ書面又ハ口頭ヲ以テ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得

同條例第十八條ノ
手数料金額ニ相當ス
ル登記印紙ヲ貼用ス
ルハ

第二條 明細書ニハ
明細書文例ニ準シ左
ノ諸件ヲ記載シ圖面
ニ通テ添フヘシ

- 一 意匠ノ名稱
- 二 意匠ヲ應用スル物品ノ類別及名稱
- 三 意匠ノ詳細説明
- 四 專用權請求ノ區域

第三條 圖面ニハ製

支拂命令ニ對スル異議ノ申立

何府何市何町何番地族籍職業

申立人

何府何市何町何番地族籍職業

發申立人

何年何月何日送達アリタル何々裁判所何年(何)號ノ支拂命令ニハ應
スヘキ義務無之依テ茲ニ異議申立仕候也

年月日 申立人

何々裁判所

判事 何 某 某

右

某 印

第三百八十九條 債務者カ請求ノ全部又ハ一分ニ對シ適當ナル時間
ニ異議ヲ申立ツルトキハ支拂命令ノ效力ヲ失フ然レトモ權利拘束
ノ效力ヲ存續ス

數箇ノ請求中或ルモノニ對シ異議ヲ申立テタルトキハ支拂命令ノ
其他ノ請求及ヒ之ニ相當スル費用ノ部分ニ付キ效力ヲ有ス

第三百九十條 適當ナル時間ニ異議ヲ申立テタル場合ニ於テ請求ニ
付キ起ス可キ訴カ區裁判所ノ管轄ニ屬スルトキハ其訴ハ支拂命令
ノ送達ト同時ニ區裁判所ニ之ヲ起シタルモノト看做ス其口頭辯論
ノ期日ハ第三百七十七條ノ規定ニ從ヒテ之ヲ定ム

第三百九十一條 請求ニ付キ起ス可キ訴カ地方裁判所ノ管轄ニ屬ス
ル場合ニ於テハ適當ナル時間ニ異議ノ申立アリタルコトヲ債權者
ニ通知ス可シ

債權者其通知書ノ送達アリタル日ヨリ起算シ一個月ノ期間内ニ管
轄裁判所ニ訴ヲ起ササルトキハ權利拘束ノ效力ヲ失フ

第三百九十二條 督促手續ノ費用ハ適當ナル時間ニ異議ノ申立アリ
タル場合ニ於テハ起ス可キ訴訟ノ費用ノ一分ト看做ス

前條ノ場合ニ於テ期間内ニ訴ヲ起ササルトキハ手續ノ費用ハ債權
者ノ負擔ニ歸ス

圖例ニ準シ意匠ヲ明
了ニナラシムルニ必
要ナル部分ヲ示スハ
寫真ヲ以テ意匠ヲ
示スコトヲ得ルモ
ノハ之ヲ圖面ニ代
用スルコトヲ得
第四條 意匠登錄願
書ハ其意匠ヲ應用ス
ル物品ノ類別一類毎
ニ各別ニ差出スヘシ
第五條 意匠登錄願
書及明細書圖面ヲ受
理シタルトキハ特許
局長ハ出願人ニ領收
證書送付シ願書ノ日

附ヨリ三十日ヲ経テ
ル後願書日附ノ順ニ
從ヒ審査官ヲシテ其
審査ニ着手セシムル
ハ

第六條 意匠條例第
十六條ニ依リ意匠登
録證ノ改訂ヲ願出ル
トキハ其事由ヲ記載
シタル願書ニ改訂明
細書ニ通若シハ圖面
ニ通テ添へ現意匠登
録證並ニ附屬ノ明細
書圖面ト共ニ差出ス
ヘシ
前項ノ出願ヲ許可
スルトキハ特許局

第三百九十二條 支拂命令ハ其命令中ニ掲ケタル期間ノ經過後債權
者ノ申請ニ因リ之ヲ假ニ執行シ得ヘキコトヲ宣言ス但假執行ノ宣
言前債務者異議ヲ申立テサルトキニ限ル
右假執行ノ宣言ハ支拂命令ニ付ス可キ執行命令ヲ以テ之ヲ爲ス其
執行命令ニハ債權者ニ於テ計算スル手續ノ費用ヲ掲ク可シ
債權者ノ申請ヲ却下スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

支拂執行命令ノ申請

申請人 何 府 市 町 何 郡 何 村 何 番 地 族 籍 職 業
被申請人 何 府 市 町 何 郡 何 村 何 番 地 族 籍 職 業
一 金 何 百 圓 (物品ナレバ其物 又ハ公債證券株券ノ如キ) 請 求 高
一 金 何 十 錢 費 用
右申請人ヨリ被申請人ニ對スル何年(何)第何號ヲ以テ支拂命令ヲ相

長ハ此細則第十條
及第十一條ノ手續
ニ依リ改訂意匠登
録證ヲ送付スヘシ

第七條 審査官ニ於
テ願書明細書圖面等
ニ不完全ノ際アリト
認メタルトキハ特許
局長ハ其旨ヲ出願人
ニ通知シ通知書ノ日
附ヨリ六十日以内ニ
訂正書又ハ訂正圖面
ヲ差出サシムルハ此
期限内ニ差出ササル
トキハ出願ヲ無効ト
ス
第八條 出願人其出

發シ候處期ハ經過スルモ未ダ支拂ヲ爲サス又異議ノ申立モナサ
ルニ付假執行ノ命令御發シ相成度此段申請仕候也
年 月 日 右申立人 何 某 印

何々裁判所 判 事 何 某 段

第三百九十四條 執行命令ハ假執行ノ宣言ヲ付シタル關席判決ト同
一ナリトス其執行命令ニ對シテハ第二百五十五條乃至第二百六十
四條ノ規定ニ從ヒテ故障ヲ申立ツルコトヲ得請求カ區裁判所ノ管
轄ニ屬セサルトキハ區裁判所ハ其故障ヲ法律上ノ方式及ヒ期間ニ
於テ申立テタルヤノ點ノミニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス此場合ニ於
テハ第三百九十一條第二項ニ定メタル期間ハ故障ヲ許ス判決ノ確
定ヲ以テ始マル

支拂執行命令ニ對スル異議ノ申立
何 府 市 町 何 郡 何 村 何 番 地 族 籍 職 業
申 立 人 何 某

願中ニ係ル願書明細書圖面等ニ過誤アルコトヲ發見シタルトキハ意匠ニ變更ヲ生セサルモノニ限リ其訂正ヲ請求スルコトヲ得但査定書若クハ登錄通知書ヲ發シタル後及審判中ニ係ルモノ、訂正ハ特許局長ニ於テ必要ト認メタルモノ、外之ヲ許サス

願中ニ係ル願書明細書圖面等ニ過誤アルコトヲ發見シタルトキハ意匠ニ變更ヲ生セサルモノニ限リ其訂正ヲ請求スルコトヲ得但査定書若クハ登錄通知書ヲ發シタル後及審判中ニ係ルモノ、訂正ハ特許局長ニ於テ必要ト認メタルモノ、外之ヲ許サス

第九條 再審査及審判ニ關スル事項ハ總テ特許條例施行細則ヲ適用ス

第三百九十五條 時期ニ後レテ申立テタル異議ハ命令ヲ以テ之ヲ却下ス

此却下ノ命令ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第三編 上訴

第一章 控訴

第三百九十六條 控訴ハ區裁判所又ハ地方裁判所ノ第一審ニ於テ爲シタル終局判決ニ對シテ之ヲ爲ス

第十條 意匠ノ登錄ヲ許可スルトキハ特許局長ハ登錄料納付用紙ヲ添ヘテ登錄通知書ヲ出願人ニ送付スヘシ

出願人前項ノ通知書ヲ受ケタルトキハ登錄料納付用紙ニ意匠條例第十九條ノ登錄料金額ニ相當スル登記印紙ヲ貼用シ明細書ニ通圖面ニ通テ添ヘ通知書ノ日附ヨリ六十日以内ニ差出スヘシ此期限内ニ

第三百九十七條 終局判決前ニ爲シタル裁判ハ亦控訴裁判所ノ判斷ヲ受ク但此法律ニ於テ不服ヲ申立ツルコトヲ得スト明記シタルトキ又ハ抗告ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ルトキハ此限ニ在ラス

第三百九十八條 闕席判決ニ對シテハ期日ヲ懈怠シタル者ヨリ控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス但故障ヲ許ササル闕席判決ニ對シテハ懈怠ナカリシコトヲ理由トスルトキニ限リ控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得

第三百九十九條 控訴ハ口頭辯論ノ前ニ於テハ被控訴人ノ承諾ナシテ之ヲ取下ルコトヲ得

第四百條 控訴期間ハ一个月トス此期間ハ不變期間ニシテ判決ノ送達ヲ以テ始マル

判決ノ送達前ニ提起シタル控訴ハ無効トス